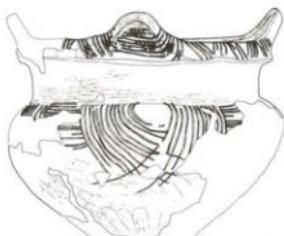


岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要  
2004



2006年3月  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(銅鉢) 津島同大遺跡第17次調査(環境理工学部様)出土の落鉢

(平安時代後期)

(銅鉢) 鹿田遺跡第14次調査(病様)出土の木鉢

(平安時代後半～末)

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2004

2006年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 序

2004（平成16）年度には、鹿田地区において医学部附属病院立体駐車場エレベーター設置とともに発掘調査等をおこなうとともに、事務局本部棟および環境理工学部棟の新嘗にともなって実施した発掘調査の成果を報告書として刊行しました。

事務局本部棟の発掘調査は2001（平成13）年、環境理工学部棟のそれは1996（平成8）年と1999（平成11）年でしたから、ことに後者については成果の報告までにかなりの年月を費やしたことになります。これらの調査のあと他の発掘調査の実施が重なって整理作業が遅延したわけですが、文化庁では発掘調査のあと速やかに報告書の刊行をおこなうよう指導しており、本学でも報告書の積み残し解消のために鋭意整理作業を進めているところです。

今後は鹿田遺跡関係の調査報告書の刊行が主な課題となります。鹿田遺跡に因縁し、本年報では医学部附属病院管理棟の調査で検出した12～13世紀の井戸枠の再検討結果を報告しています。昨年秋に新病棟ロビーで開催した「岡山大学発掘成果展」のために井戸枠を準備していたところ、板材に焼き付けられた刻印を確認し、これをきっかけにしてこれらの井戸枠の板材どうしが接合し、元は箆穴をもった角材として持ち込まれたらしいことが判明しました。古代の長岡京の井戸などで知られた製材と木材の運搬・利用システムの新たな類例を付け加えることとなったわけですが、このことは藤原振闇家の莊園に關係するかと推定されている鹿田遺跡の歴史的位置づけを考えるうえでも意義がありそうです。発掘調査成果の整理作業を進めるにあたっては、迅速とともに遺跡・遺物の内容を學術的に深く的確に把握し、歴史の豊かな内容を報告できるよう努めています。

本年報の津島岡大遺跡調査研究に関しては、発掘資料の自然科学分析に関するこれまでの成果を集成しています。自然科学データの蓄積は、環境問題に強い関心が寄せられている今日、人間の歴史を解き明かすうえでますます重要な意義をもつといえるでしょう。本センター調査研究専門員の諸先生に研究を進めていただいた成果も含まれています。外部に委託している放射性炭素年代測定については、データ数が増えるにつれて問題点も多くなる一面があり、今後とも注意が必要です。

2004（平成16）年度から岡山大学は国立大学法人となり、本センターも新たな体制で事業に取り組んでいます。調査、研究、普及等の事業を推進するにあたっては本学内外の機関・各位から多大のご協力とご支援をいただきました。最後になりましたが、厚く御礼申しあげます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長） 阿部 健

副センター長（文化科学研究科教授） 稲田 孝司

# 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004

## 目 次

### 第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 立会調査の概要	1
1. 調査の実施状況	(光本) 1
2. 公共下水樹接続工事に伴う立会調査	(光本) 1
3. 津島キャンパス環境整備に伴う立会調査	(光本) 2
第2節 津島岡大遺跡の研究	7
1. 構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析	(山本悦世) 7

### 第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 調査の概要	18
1. 鹿田遺跡第16次調査	(高田貴太) 18
第2節 立会調査の概要	22
第3節 鹿田遺跡の研究	25
1. 鹿田遺跡第5次調査出土の井戸柱材に関する再検討－焼印と木材の規格－	(光本) 25

### 第3章 その他の地区の調査

第1節 試掘・確認調査の概要	37
1. 三朝宿泊所増築および高圧線・電話線切替工事に伴う試掘・確認調査	(野崎貴博) 37

### 第4章 調査資料の整理および公開・活用

第1節 調査資料の整理	(岩崎志保) 40
1. 調査資料の整理	40
2. 調査資料の分析	40
3. 調査資料の保存処理	41
第2節 調査成果の公開・活用	(岩崎) 42
1. 公開・展示	42
2. 資料・施設等の利活用	43
第3節 2004年度調査研究員の個別研究活動	44
1. 科学研究費採択状況	44
2. 論文・資料報告	44
3. 研究発表等	45
4. 資料収集・実態調査	45

### 第5章 2004年度における調査・研究のまとめ

(岩崎) 46

## 付 編

### 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程	47
2. 2004年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	49
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項	49

## 挿図目次

### 第1章

図1 調査区と上層断面位置	1	図22 井戸6出土土器	25
図2 公共下水糞土層断面	1	図23 井戸6平面図・断面図	25
図3 調査区と上層断面位置	2	図24 縦板①	27
図4 津島キャンバス境地整備土層断面	3	図25 縦板②	28
図5 2004年度の調査地点【1】－津島地区－	5～6	図26 縦板③	29
図6 津島岡大遺跡第7次調査	10	図27 縦板④	30
図7 津島岡大遺跡第8次調査	10	図28 縦板⑤	31
図8 津島岡大遺跡第27次調査	10	図29 横棟・支柱	32
図9 津島岡大遺跡第17次調査	11	図30 烧印	33
図10 津島岡大遺跡第15次調査	12	図31 縦板	34
図11 津島岡大遺跡第3次調査	12	図32 縦板詳細①	35
図12 津島岡大遺跡第23次調査	12	図33 縦板詳細②	36
図13 津島岡大遺跡における層年較正年代	14		
		第3章	
図14 第16次調査地点位置図	19	図34 宿泊所増築工事地点位置図	37
図15 第16次調査地点土層柱状図	19	図35 宿泊所増築工事地点土層柱状図	38
図16 第16次調査地点近世～近代遺構平面図	21	図36 高圧線・電話線切替工事地点位置図	39
図17 第16次調査地点土坑1断面図	21	図37 高圧線・電話線切替工事地点上層柱状図	39
図18 第16次調査地点土坑2平・断面図	22	図38 2004年度の調査地点【3】－三朝地区－	39
図19 2004年度の調査地点【2】－鹿田地区－	23		
図20 調査8位位置図	24	第4章	
図21 調査8土層柱状図	24	図39 津島キャンバス尻小会風景	42
		図40 展示会アンケート結果	42
		図41 戰場体験〈高松中学校〉	43
		図42 戰場体験〈対操中学校〉	43

## 表目次

表1 2004年度津島地区調査一覧	4	表7 2001年度三朝地区調査一覧	39
表2 試料別年代測定値一覧	8	表8 放射性炭素年代測定資料一覧	40
表3 自然科学的分析一覧	16	表9 樹種同定一覧	41
表4 2004年度鹿田地区調査一覧	23	表10 第6期保存処理工程	41
表5 2004年度鹿田遺跡周辺調査一覧	24	表11 これまでの保存処理工程	41
表6 接合材の法量	26	表12 外部委託による保存処理遺物一覧	41

## 付表・付図

付表1	1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	51
付表2	2003年度以前の構内主要調査（1983～2003年度）	51
付表3	埋蔵文化財調査研究センター収藏遺物概要	58
付表4	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	59
付表5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物	59
付図1	津島地区全体図	61
付図2	2003年度までの調査地点【1】～津島地区～	63～64
付図3	2003年度までの調査地点【2】～鹿田地区～	65
付図4	2003年度までの調査地点【3】～三朝地区～	66
付図5	2003年度までの調査地点【4】～東山地区～	66
付図6	2003年度までの調査地点【5】～倉敷地区～	66

## 例　言

1. 本記要是、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において2004年4月1日から2005年3月31までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果及びセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本記要是について報告している津島周辺遺跡は岡山市津島中二丁目1-1、農田遺跡は岡山市農田町二丁目5-1に、福島遺跡は、鳥取県東伯郡三朝町大字山宇田字福島にそれぞれ所在する。
3. 資料分析にあたっては、岡山大学文部省久野修義教授にご協力、ご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。
4. 本文は、岩崎志保・高田貴大・野崎貴博・光木順・山本洋世が分担執筆し、執筆者は各自および文末に記した。
5. 編集は福田章司専門センター長の指導の元に岩崎が担当した。

## 凡　例

1. 大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14年度（2002年）4月1日より施行された「調査法及び水路発見法の一部を改正する法律」に基づき、世帯調査系を探用し、構内座標を次のように定めている  
1) 津島地区では、土壌探査第V座標系（X= -144,156,4617m, Y = -37,246,7496m）を起点とし、真北を基準とした構内座標を設定する。一辺50mの方形区画である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と、同南地区に分ける（付図1）。
- 2) 三朝地区では、国土地理第V座標系（X= -149,456,3718m, Y = -37,646,7700m）を起点とし、座標軸をN 15° Eに面したものを基準とした構内座標を設定する。地区割りは一辺50mの方形を基準としている。
- 3) 本文中で用いる方は、津島地区・農田地区は国土地籍系の座標北を、他は道北を用いている。
4. 岡山大学構内の遺跡名は、開拓の場合はそのまま西側を、三朝地区的発掘調査地名は小字名をとり「福島遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で呼称する。
5. 遺跡名稱は「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」「立会調査」に分類したものについては、任意の名稱を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したもの、「試掘・確認調査」に分類する。
6. 「発掘調査」についての記述は、いずれも現段階での既報報告であり、詳細な正式報告ではない。
7. 表に記載した所屬部は、原則として各学部の略文字を略号として用いている。
8. 付表2に記載した調査一覧については、耕削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、全てのデータは、出センターにおいて管理している。
9. 本文などで使用の調査番号は表と一致する。
10. 本記要是掲載の地形図（付図1）は、岡山市地図を複写したものである。

# 第1章 津島岡大遺跡の調査・研究

## 第1節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

2004年度において津島地区で実施された立会調査は、事業数で15件を数える（表1、図5）。件数と調査期間は例年に比べてやや少なく、その多くは掘削深度が浅く造成土内あるいは近代層まで掘削がなされたものであった。そうした中で、以下で述べる公共下水桿接続工事（調査1）と津島キャンパス環境整備（調査6）については、掘削深度が深く、中世層以下の土層や遺構・遺物が確認され、それぞれに貴重な成果を得ることができた。ここでは、これら2件の立会調査に関する調査成果について述べる。

### 2. 公共下水桿接続工事（留学生等宿泊施設）に伴う立会調査（津島南B B～B D26区）

#### a. 調査区の位置と調査の経過（図1）

2003年度に引き続き、公共下水桿の接続工事が実施され、2004年度は留学生等宿泊施設付近において工事が実施された。本調査区は、津島南地区の西端部にある。立会調査は、9月1日～13日の期間中に実施した。宿泊施設の北側において2箇所（図1）、その南側（女子学生寮北側）において1箇所実施した。そのうち、包含層まで掘削が及んだのは第1地点・第2地点の桿部分である。

第2地点は地表面から122cmまで掘削し、近代層と近世層をそれぞれ一層確認した。一方、第1地点では掘削深度が深く、168cmまで掘り下げがなされ、中世までの土層を確認するとともに、現在の歩道下に流れている用水路に沿うかたちで、近世と近代の東西灘を確認した。以下では、第1地点における調査成果について概説する。

#### b. 調査の概要

##### ① 層序（図2）

検出された基本層序中からは、遺物の出土がみられなかっただため、土層の時期については既往の津島岡大遺跡の土層堆積と対比した結果を述べる。

1層は、1907年（明治40年）の陸軍駐屯地造成以降の造成土である。2層は青灰色粘質土で、近代層と考えられる。2層の上面から、溝2が掘りこまれている。3～5層は近世層と考えられる層で、3層が明灰色砂質土、4層が明灰褐色粘質土、5層が灰黄橙褐色砂質土となる。いずれも鉄分やマンガンの沈着がみられ、耕作土と考えられる。5層の上面からは、溝1が掘削されている。6層は近世～中世層と考えられる明灰色粘質土である。7・8層は中世層と考えられる粘土層で、7層が明灰白色粘土、8層が灰白色粘土となる。



図1 調査区と土層断面位置  
(縮尺1/800)

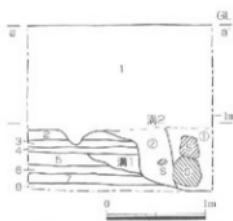


図2 公共下水桿土層断面  
(縮尺1/50)

## (2) 地形と遺構

遺構としては、現在の東西に流れる用水路の前身といえる近代溝と近世溝を確認した。

近世溝（溝1）は、現存幅56cm、深さ20cmを測る。溝2によって半分以上の幅を切られている。埋土は明灰褐色調粘質土となる。遺物は出土していない。

一方、近代溝（溝2）は、現存幅98cm、深さ62cmを測る。埋土は二層に大別される。1層は暗青灰色粘土で、2層は明青灰色粘土となる。1層の掘り方に沿うように、護岸用と思われる二段の石積みが施されている。この石積みよりも北側は、溝の埋土と考えられる。2層は裏込め土か、あるいは石積み構築以前の溝の掘り方であると考えられる。

津島岡大遺跡の調査研究に基づいた近世段階の条里の復元案<sup>⑩</sup>を参照すると、これらの東西溝は条里の区画に則っとるものではない。近世段階には、道路向かいに位置する座主川が東西の条里のラインと考えられている。この座主川は、大学構内を東西に貫流するものであり、中世段階まで遡る可能性があることが第25次調査（農学部散水施設）によって確認されている。

一方、明治時代に作成された地籍図には、本調査区で確認された東西溝が記載されている。今回の調査成果は、地籍図に記載されているこの東西溝による区画が、近世段階にまで遡る可能性が浮かび上がったものといえる。

註（1）野崎貢博 2003「津島岡大遺跡における近世の条里遺構について」『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17回 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp. 142-148

## 3 津島キャンパス環境整備(留学生センター西)に伴う立会調査(津島南B B09・10区)

### a. 調査区の位置と調査の経過(図3)

本調査区は、津島南地区の留学生センターの西に位置する。長方形の池を有する盛土の施された跡地が、調査対象地点である。津島キャンパス内の環境整備の一環で、外灯の設置や雨水用の排水工事、樹木の移植が実施されることとなった。調査期間は樹木移植が2004年9月24日、他は2004年10月5日～11月4日であり、調査は断続的に実施された。

調査区より東40～50mほどに位置する保健環境センター（旧保健管理センター）地点は、津島岡大遺跡第10次調査として1993年に発掘調査が実施されており、すでに報告書も刊行されている<sup>11</sup>。第10次調査地点は河道の自然堤防にあたり、弥生時代後期の土坑群や古墳時代初頭・後期の集落がひろがっていたことが明らかにされている。津島岡大遺跡において当該期の遺構が密集成する地点は第10次調査地点のみであり、本調査区はそのひろがりに関する知見を得られることが調査前から予想された。

調査が必要な工事掘削は、外灯設置箇所（第1・3地点）、雨水排水溝・管理設箇所（第2地点）、樹木移植箇所においてなされた（図3）。そのうち、包含層を確認したのは第1～3地点である。第3地点については、道路面から50cmの深さを掘削し、中～近世層を確認した。一方、第1地点では道路面より115cm、第2地点では112cmの深さの掘削がなされ、弥生時代後期の土層と基盤層を確認した。第1地点では、包含層中に



図3 調査区と土層断面の位置  
(縮尺1/800)

弥生時代後期の小片が多く含まれ、第2地点においては同時期の遺構の可能性がある溝状の土層を確認した。

### b. 調査の概要

#### ① 層序 (図4)

第1～3地点ともに、共通した土層を確認したため、ここでは層名を統一して呼称する。層序を図示したのは、掘削深度が深かった第1地点 (a断面) と、第2地点の拡張部分 (b・c断面) である。

1層は陸軍駐屯地造成以降の造成土である。2層は、第2地点のb断面でのみ確認した青灰色砂質土で、近代の耕作土と考えられる上層である。3層は、3つの地点でいずれも確認している暗茶褐色砂質土で、包含物よりa～c層に細分した。小穀や白色微砂を含む層で、津島國大道路の基本土層とは様相を異にするものである。鉄分やマンガンがみられず、耕作土の可能性は低い。近代以降の堆積土である可能性も含めて検討したが、b断面において近代の耕作土と考えられる2層が上部に確認されたため、現状では包含層と認識している。道路や何らかの土盛り等の造成用の土である可能性もある。3層の時期については、遺物がみられなかったため不明であるが、十層の堆積順序と第10次調査の上層の堆積状況から考えれば、中世～近世のものと考えられる。なお、第3地点における拡張は、本層中で収まっている。4層は、第1・2地点において確認した黒褐色砂質土であり、4a・b層に分層した。第1地点において、弥生時代後期の土器小片を多く含んでいた土層である。5層は、暗茶褐色砂質土で、第2地点において認められた基盤層である。6層は、黄褐色砂泥じり疊層で、5層と同様に基盤層と考えられる。

土質や色調から、近接する第10次調査地点の上層との対応が想定されるのは、2層と4層、5・6層である。まず2層は、土層の特徴から考えれば第10次調査における近代層の2層に該当するだろう。ただし、本調査区における3層の存在によって、2層上面の標高が第10次調査地点よりも約40cm高くなることは注意を要する。4層は、第10次調査地点の土層である7層 (黒褐色砂質土) にはば該当するだろう。5・6層は、第10次調査地点の基盤層である9層に相当する。5層が9a層 (淡黄褐色細砂)、6層が9b層 (灰色礫) に該当するものと考えられる。一方、本調査区において特徴的に認められた3層に該当する上層は、10次調査において見出すことができない。

津島國人遺跡の縫合となっている、突帯文土器や弥生時代前期土器を包含する「黒色土」は、第10次調査地点と同様に本調査区においても認められなかった。

#### ② 地形と遺構・遺物

本調査区の地形については、「黒色土」が認められず、かつ基盤層までの包含層の厚さが薄いことから考えて、第10次調査地点と同様に自然堤防上に位置することが想定される。第10次調査区北側の上層の標高が第1地点の土層の標高とほぼ対応するものと考えられるため、本調査区の標高は第10次調査地点と一連の微高地である可能性がある。

微地形については、第10次調査地点において弥生時代から古代までは北側が高い地形となっていたことが明らかにされている。今回の調査区においては、調査地点が限られているため確定的な微地形の復元は行い得ない。ただし、現状の調査成果からは南側の第2地点の方が北側の第1地点よりも土層が上がっているように見受けられるため、南～南東に向けて微高地が高くなる可能性も存在する。

本調査区では、弥生時代後期と中～近世という二時期の遺構・遺物を確認した。まず、弥生時代後期段階の遺

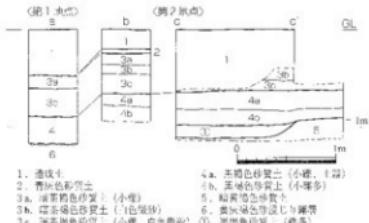


図4 津島キャンバス環境整備土層断面 (縮尺1/50)

構としては、第2地点のc断面にみられる溝状の遺構が挙げられる。現存幅123cm、深さ15cmを測る。埋土は、疊を多く含む黒褐色砂質土であり、4層に類似する。したがって、この溝状遺構は弥生時代後期段階の所産と考えられる。また、包含層である4層については、第1地点において弥生時代後期の土器小片を多く含んでおり、第2地点においてもわずかであるが小片が出土している。こうした包含層の状況は、第10次地点において検出された遺構群のひろがりを想起させるものである。ただし、土器が小片であることから考えれば、本調査区は集落の中心とは考えがたく、第10次調査地点と同様に集落の縁辺部にあたるであろう。

次に中～近世と考えられる段階については、3層の堆積に注目することができる。この土層の性格については、今回の調査だけではにわかに判断しがたいが、いくつかの可能性について検討してみよう<sup>30</sup>。先に道路用の造成上の可能性を述べたが、南北方向の道路であると仮定するならば、10ラインを北に延長した場所に位置する第19次調査地点（コラボレーションセンター）において、近世段階の南北の道路状造構が検出されていることに注目することができる。ただし、この道路状造構の上面は削平を受けているものと考えられるが、そのようにみた場合においても、検出面よりも3層上面が不自然に高くなるという問題は依然とされる。あるいは視点を少し変えて、調査区付近の旧地形との関連についても注意しておく必要がある。岡山大学津島キャンパスが構築される以前の土地利用の様子がわかる明治時代に作成された地籍図を参照すると、調査区付近は周囲の山畠の長方形を呈するX画とは異なり、逆台形状の区画の東邊にあたる。こうしたX画の乱れは、旧地形を反映したものである可能性がある。そのように考えるならば、旧地形に規定されたかたちで、中～近世段階の何らかの造成が本調査区においてなされた可能性が考えられる。いずれにせよ、今後の調査において継続的に検討する必要がある。

以上のように、本調査によっていくつかの貴重な知見を得ることができた。まとめると、まず本調査区は10次地点と同様に自然堤防上に位置することが判明した。このことは、津島岡人遺跡の地形復元を検討する上でも重要な成果となった。また同地点で確認された弥生時代後期段階の集落が、本調査区までひろがることが判明し、当該期の集落のひろがりについて知見が得られた。中～近世の段階については、造成土かと思われる土層を確認し、今後の調査における新たな課題を得ることができたものといえよう。

(光本 順)

註（1）山本悦重・岩崎志保編 2003『津島岡大遺跡II』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16報、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（2）検討にあたっては山本悦重氏から有益なご教示をいただいた。

表1 2004年度津島地区調査一覧

番号	種別	調査地区	地内生産	所属	施 工 名 称	調査期間	堆積深度 (Gm)	内 容
1	立会	津島南	TH1-TH26	西	公共下水施設工事 留学生等宿泊施設	9.1-13	1.22~2.06	中世まで耕作
2	立会	津島北	AX16	未記載	X-法、軽動地実験施設等入植耕作移転工事	9.2	0.6	耕作層
3	立会	津島南	SB-	丁	津島キャンパス造営監修 一枚瓦葺木本 松板	9.24	0.5~0.7	造成土内
4	立会	津島北	BD09-10	未記載	改修ガス配管切り替え工事	9.27, 10.1	0.85~1.18	造成土上
5	立会	津島北	-	事	津島キャンパス監修	10.4	1.15	近代まで耕作
6	立会	津島南	TH9-10	水	津島キャンパス環境整備 留学生センター 西	10.5, 11.4	0.5~1.15	次の段階を含む、遠浅・根層構造
7	立会	津島北	AU03	工	津島側に造営改修工事 工学駆逐車庫	10.22	0.7	造成土内
8	立会	津島北	AU- AV06	工	大学院12号施設ガス漏れ補修・ガス配管工事	10.22, 11.17	0.8~1.00	透水性、未成土内
9	立会	津島北	AW11	工	工学部水道ガス漏れ修理工事	11.1	1.25	未成土内
10	立会	津島南	TH- BG02	工	津島キャンバス環境整備 地盤境界	11.1-17, 18-31	0.7~1.2	西側は透水性、東側は造成層まで削除して換土あり
11	立会	津島北	A105	工	津島キャンバス改修工事改修工事	1.27	0.8~1.0	未成土内
12	立会	津島北	AY-AZ12- 13, BA13	事	津島キャンバス環境整備 北園廻学校本 道施設	2.14, 3.1- 4-16	0.85~1.3	一部で近代層確認、F0は遺存土内
13	立会	津島北	AV12	工	中央校舎周辺改修工事	2.15	1.0	造成土内
14	立会	津島北	AV06	工	工学駆逐車工事	3.4	0.6	造成土内
15	立会	津島南	BC-BD06	西	野球場内跡地改修その施工手	3.20	0.9	造成土内

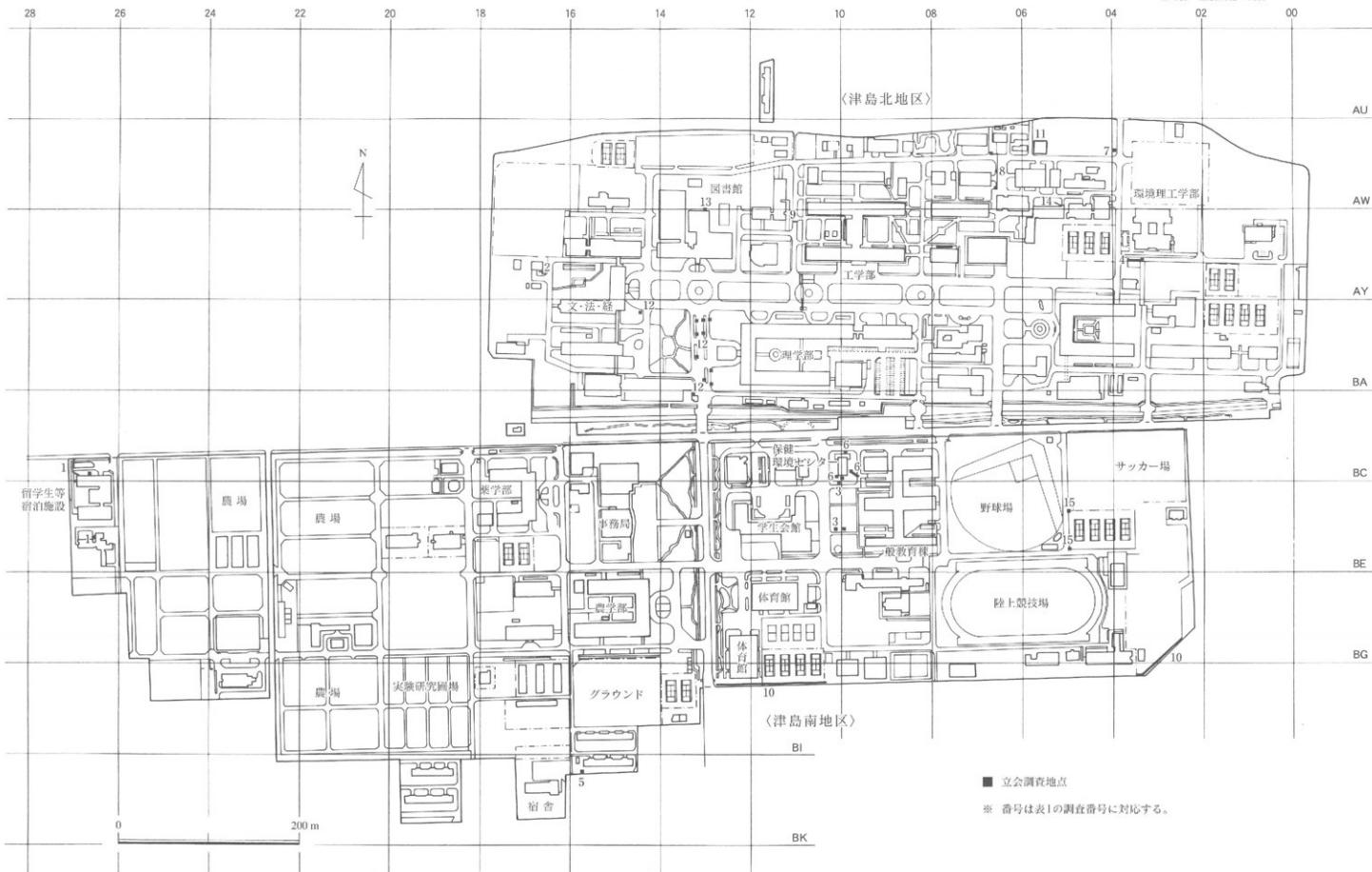


図5 2004年度の調査地点【1】一津島地区一 (縮尺1/4000)

## 第2節 津島岡大遺跡の研究

### 1. 構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは、構内遺跡の発掘調査資料に関して、必要に応じて自然科学的な分析を行っている。分析の内容は、年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析・植物遺存体の分析（炭化植物・種子など）、樹種同定・動物遺存体の同定・石材同定を中心とし、その他に様々な分析（ガラス滓・赤色顔料・金属・鉄滓・火薬・粒度組成など）を含む。こうした分析の一覧は文末に掲載した（表3）。ただし、肉眼同定のものは多岐にわたるために省略した<sup>1)</sup>。

なかでも、津島岡大遺跡では年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析・植物遺存体の分析あるいは樹種同定について、特に系統的な分析を継続している。今回は、その中から放射性炭素年代測定結果について、その成果を報告する。

#### a. 対象とした試料

放射性炭素年代測定を行ったのは、津島岡大遺跡の11箇所の調査地点においてである。試料点数は合計33点で、その内訳は土器外而に付着した炭化物8点、貯蔵穴出土の堅果類5点、杭および利用木材7点、遺構に伴う炭化材あるいは炭化物10点、基本上層中の炭化物3点である（表3 A）。

ここでは、同遺跡を理解する上で重要となる縄文時代～弥生時代前期にあたる試料について、本センターが中心として分析測定機関に依頼して実施した年代分析のデータについてまとめることとする。対象となる試料は、正式報告が既刊の調査に加え、今年度刊行する第23次調査までを含めて、9箇所の調査地点から抽出した計25点である（表2）。試料の内訳は、縄文時代後期の土器を共伴するかあるいはその可能性が高いが、土坑から炭化物を6点（第17・27次調査）と貯蔵穴から堅果類1点（第15次調査）、縄文時代後期河庭内の杭4点（第23次調査）、縄文時代の面で検出されたが遺物を伴わない遺構内の炭化物4点（第7・8次調査）、そして、土器外面に付着した炭化物を突堤土器3点（第3・23次調査）と弥生時代前期の甕1点（第23次調査）から、突堤土器を共伴する貯蔵穴から堅果類1点（第3次調査）。弥生時代前期の土器を作り河道内の遺構材2点（第23次調査）のほかに、弥生時代早期～前期の土層と判断している「黒色土」、あるいはその直下の土層という基本土層からの3点（第22次調査・試掘調査）である。

分析方法は、加速器質量分析法（AMS法）を中心であるが、樹木など一部で、<sup>2)</sup>繊計算法が選択されている。

#### b. 個別試料の内容

分析対象とした試料の年代測定値は表2・図13に示した。まず、分析を行った個別試料について、発掘調査から得られた内容を説明しておこう。

試料1（図6）：試料は第7次調査地点の炉1内に残された炭化材である。同遺構は平面規模が直径30～35cm、深さは約30cmを測る。壁面から検出面の肩部にかけて焼上化した被熱痕が顕著に残る。炭化材は、その壁面に張り付くように検出された。炉に伴う遺物は皆無であるため、炉の時期は確定できない。

同様の検出面では、その他に炉1基と焼土・炭化物集中ビットなどが広がり、少量の土器が出土している。その時期は縄文時代後期中葉を中心とし、中期に遡る可能性のあるものはごく僅かである。

試料2・3・10（図7）：第8次調査地点の土坑3基に伴う試料である。同遺構検出面では土坑10基と小溝5条が確認されているが、いずれの遺構からも出土遺物は皆無であり時期の確定はできない。ただし、検出面あるい

表2 試料別年代測定値一覧

試料番号	地質・土壌 形態	試料の 種類	測定法	℃ 年代	$\sigma^{\circ}\text{C}$ ( $\Delta$ )	測定℃ 年代	層年修正年代	明治開墾年号	八代・風連上層 の型式・時期	報告	
1 第7次 第1	灰化土			5050±90BP (3080±90BC)				Gak-16160		報告9	
2 第8次 良層	灰化物			4960±110BP (3020BC)				Gak-1616		報告8	
3 第8次 良層	灰化物			4490±130BP (2540BC)				Gak-1618		報告8	
4 第27次 第1	灰化土	$\beta$ -放射法	3960±60	27.3	3920±60						
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 2310					
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 2210					
5 第27次 第2	灰化物	$\beta$ -放射法	3800±60	-26.7	3910±60			Beta-172000	中津式	報告16: 分析番号 No.1	
						1: cal BC2460 - 2300 2: cal BC2460 - 2200, 2500 - 2210					
6 第17次 層	上耕9-1	灰化物	3900±40	-23.7	3890±40			Beta-194609	福岡K式 - 2 福岡文土壌成立 段階	報告21: 分析番号 No.4	
						1: cal BC2460 - 2300 2: cal BC2460 - 2250					
7 第17次 層	上耕9-3	灰化物	3870±40	-26.1	3850±40			Beta-191609	福岡K式 - 1 福岡文土壌成立 段階	報告21: 分析番号 No.5	
8 第15次 16	野鹿穴SP	堅果類	AMS 法	3800±50	27.7	3880±50					
						1: cal BC2460 - 2210 2: cal BC2465 - 2145					
						1: cal BC2460 - 2210 2: cal BC2465 - 2145					
9 第17次 1-Ⅳ	灰化物	AMS 法	3740±40	23.4	3770±40			Beta-134021	福岡K式 - 1 福岡文土壌成立 段階	報告21: 分析番号 No.2	
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 2200, 2200 - 2140					
10 第8次 K5 良層	灰化物			3880±130BP (<1800BC)				Gak-16417		報告8	
11 第23次 七番	木	$\beta$ -放射法	3670±40	-27.5	3630±40						
						1: cal BC2460 - 1940 2: cal BC2460 - 2080, 2060 - 1890					
12 第23次 九番	木	$\beta$ -放射法	3650±70	-30.6	3560±70			Beta-206670	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.15, 分析番号 No.10 - 2005年	
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 1770 2: cal BC2460 - 2090, 2050 - 1750					
13 第23次 九番	木	$\beta$ -放射法	3520±60	-27.7	3480±40			Beta-146335	中津式 - 推定 K式 - 3	報告22: 分析番号 No.5, 分析番号 No.4 - 2000年	
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 1770 2: cal BC2460 - 1690					
14 第23次 九番	木	$\beta$ -放射法	3250±70	28.3	3210±70			Beta-206671	中津式 - 推定 K式 - 3	報告22: 分析番号 No.11 - 2005年	
						1: cal BC2460 2: cal BC2460 - 1440 2: cal BC2460 - 1890					
15 第7.3m 堅穴住居通構1-3号	灰化物	AMS 法	2930±50	-23.8	2960±50			Beta-122002	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.1 - 2002年	
						1: cal BC2460 - 1440 2: cal BC2460 - 1060 2: cal BC2460 - 1000					
16 成相 1-6 (T37) 1-1 (土層)	灰化物	AMS 法	2800±60	-23	2840±60			Beta-146335		報告18	
						1: cal BC2460 - 920 2: cal BC2460 - 870					
17 第2次 15m (黒色 の土層)	灰化物	AMS 法	2090±50	-23	2720±30			Beta-134019	報告21: 分析番号 No.2		
						1: cal BC2460 - 920 2: cal BC2460 - 870					
18 第25次 河原3-1	木板	$\beta$ -放射法	2700±50	-28.5	2640±30			Beta-206669	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 改正H2, 分析番号 No.9 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 790 2: cal BC2460 - 780					
19 第25次 河原3-1	木板	$\beta$ -放射法	2690±60	-29.6	2590±60			Beta-206668	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 改正H2, 分析番号 No.9 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 790, 700 - 540					
20 第3次 3層	土器化 灰化物	AMS 法	2590±40	26.1	2560±40			Beta-206666	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 改正H2, 分析番号 No.9 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 770 2: cal BC2460 - 760, 680 - 550					
21 第3次 堅穴SP1	堅果類	AMS 法	2620±40	28.4	2560±40			Beta-134020	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.5	
						1: cal BC2460 - 770 2: cal BC2460 - 755, BC2460 - 550					
22 第3次 13層	土器化 灰化物	AMS 法	2570±40	-26.1	2530±40			Beta-206667	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.1 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 770 2: cal BC2460 - 760, 700 - 550					
23 第2次 河原2	二酸化 灰化物	AMS 法	2550±40	-26.6	2520±40			Beta-206642	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.1 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 770, 680 - 550 2: cal BC2460 - 530					
24 第2次 河原3	土器化 灰化物	AMS 法	2510±30	-26.4	2490±50			Beta-206643	中津式 - 推定 K式 - 2	報告22: 分析番号 No.2 - 2005年	
						1: cal BC2460 - 770 2: cal BC2460 - 710					
25 第2次 D層(生糞)	灰化物	AMS 法	2400±60	-22.3	2350±60			Beta-134018		報告22: 分析番号 No.1	
						1: cal BC2460 - 770 2: cal BC2460 - 415					

「生糞」：糞便池に堆積する完熟糞

- 糞糞層付近に含むする未熟な糞

1: 68%確率

2: 95%確率

『』：高過溝 - 土器で異質性を示すもの

報告：福岡大学土壤遺物分析課による

Beta: ベータレジストリ

はそれを覆う上層には福田K II式の土器片がわずかに含まれることから、縄文時代後期の時期を想定した報告を行った。

試料2は土坑K 1内の炭化物である。同遺構は平面規模が95×85cm、深さ32cmを有す。内部には焼上あるいは炭化物の堆積土層が確認される(図7-b)。分析を行った試料は、土坑使用段階に形成された木炭である。

試料3は土坑6内の炭化物塊である。同遺構は平面規模72×52cmが復元され、深さは17cmを測る。埋土は、前述の七坑K 1とはやや異なり、堆積土層全体に炭化物が多く含まれ、被熱した大形の角礫が認められる。土坑K 1・K 5とはそれぞれ7m程度の距離を有する。

試料10は土坑K 5内の木炭である。同遺構は平面規模が165×121cm、深さ25cmを測り、内部には多量の焼上と木炭塊が堆積するなど、土坑K 1との類似性が高い。同土坑とは約10m程度の距離をもつ。

試料4・5(図8)：第27次調査のか1・2に伴う試料である。両かの検出面では、他に炉1基・焼土と炭の集中箇所数カ所のほか土坑3基が検出された(図8-a)。同面で出土する遺物は少量であるが、縄文時代後期初頭の中津式に属する土器のほかに、やや下層からは中期に遡る土器がわずかに確認されている。

試料4は炉1の内部から出土した炭化材である。炉1は、4m前後の範囲に窪み部と被熱痕を残す張り出し部で構成され、焼土塊や炭化物の集中堆積が認められる。試料は、その焼上あるいは炭化物の堆積層間に位置する。炉内からの出土遺物は皆無であるが、ごく周辺の検出面において遺物が集中的に分布する。これらの土器(図8-b)は中津式にあたり、炉1周辺以外では出土遺物が極めて少ないとから、同遺構との共伴関係が想定される。

試料5は、炉1とは4～5mの間隔をもつ炉2の上層に集中的に包含された炭化物である。か2は4m前後の範囲に窪み部と張り出し部を有し、被熱痕あるいは焼上・炭化物の包含などの点で炉1と共に特徴を示す。試料をサンプリングした土層中からは、中津式の土器(図8-c)がまとまって出土している。

試料6・7(図9-a・b)：第17次調査で検出された土坑9の試料である。同土坑は平面規模が2.6×2.3m、深さ50cmを測り、埋土は黒色土に近い上層と黄色系の色調を示す下層とに大別される(図9-a)。土質の明瞭な差異に加えて、両層面には出土遺物量あるいは上層堆積状況などの点で堆積環境の違いが窺われる。

試料6は上層にあたる1層の土壤に含まれる炭化物である。上層からは福田K II式～縁帯文土器成立段階を中心とした土器(図9-b)が集中的に出土する。試料7は下層にあたる3層の土壤に含まれる炭化物である。土器の出土量は非常に少なく、縄文時代後期と判断されるのみである。

試料8(図10)：第15次調査地点の貯蔵穴SP16内に残された堅果類(カシ類)である。試料は上層(2層)から出土しており、貯蔵されていた堅果類と判断される。その採集時期は貯蔵穴使用時期に一致すると考えられるが、明確な時期を示す共伴遺物は認められない。参考となる土器は、同一面に広がる貯蔵穴から出土した福田K II式の上器、そして、同遺構が河道斜面下端付近に構築されているという点から、河道内に豊富に包含される福田K II式～縁帯文土器成立段階を中心とする土器があげられる。その他に、河道内からは里木II式・縄文時代中期後段・中津式・縁帯文土器がわずかに出土する。

試料9・15(図9-c・d)：第17次調査で調査された堅穴住居状遺構1に伴う炉址2・3からの試料である。上層サンプルとして採取した炭化物について2回にわたる分析を行った。試料15が2000年の分析試料であり、試料9は2002年に同じ土壤サンプルから試料を再度採取した2回日の分析試料である。

分析対象とした3層は、炉2から炉3へと炉が再構築されるなかで形成された土層であり、か3の使用に伴う被熱壁面を構成する。その上面にはか3に伴う1個体の深鉢(図9-d：土器2)が張り付いて出土し、か2上面にはその深鉢に統合して別の深鉢片(同：土器1)が残る。この土器の特徴は縁帯文土器成立段階を示しており、堅穴住居状遺構の床面出土土器の時期とも一致する。埋土には福田K II式～津塞A式の土器を含むが、分析試料の形成に最も関わりが強い炉2・3の時期は、縁帯文土器成立段階と考えている。

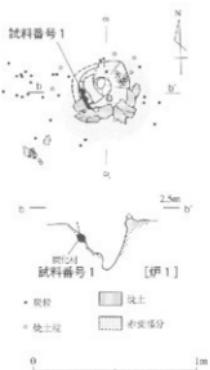
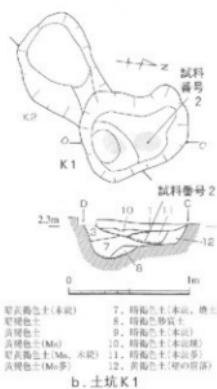


図6 津島岡太遺跡第7次調査



図7 津島國大遺跡第8次調査



b. 土坑K1

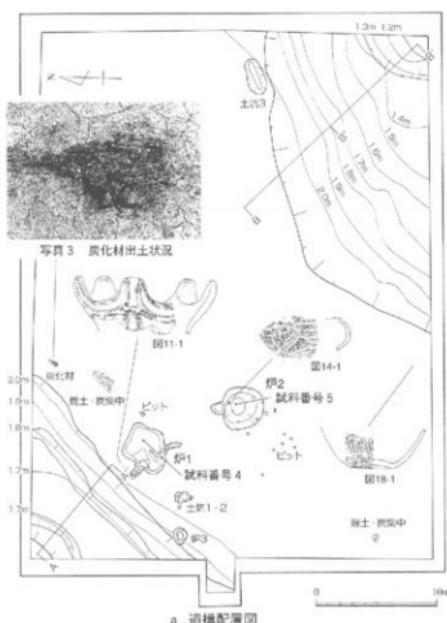


図8 津島岡大遺跡第27次調査



c. 烟2出土十器

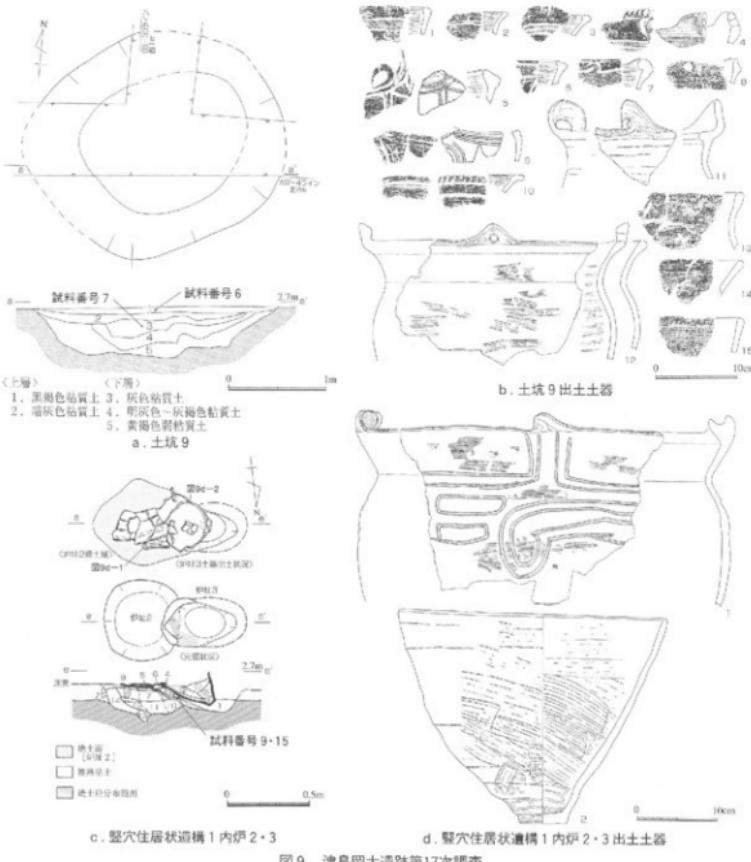
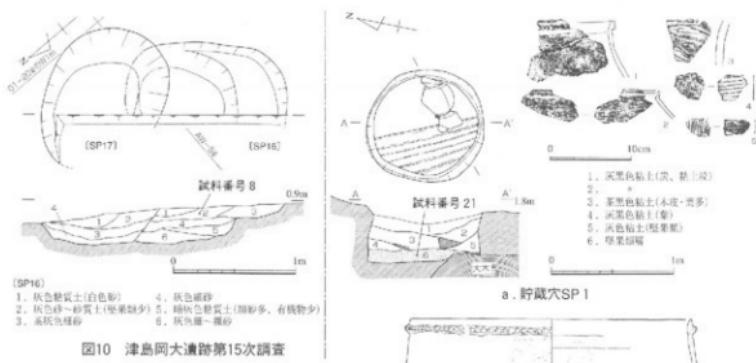


図9 津島岡大遺跡第17次調査

試料11~14：試料は第23次調査において河道1内に打ち込まれた杭群の中の4点である。200本以上の杭で構成される杭群には複数の機能が想定されているが、その利用に関しては一連のものと捉えられている。河道内からは、縄文後期初頭～前葉（中津式・福田KⅡ式）を中心とした土器が出土する。後期中葉のものは小片であり数点が含まれるのみである。

試料の杭は、いずれも先端を炭化させており、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。樹皮は試料14を除く試料11~13で残っている。試料11は直径3cm、残存長45cm、試料12は直径2.7cm、残存長34.1cm、試料13は直径2.6cm、残存長19.4cm、試料14は直径3cm、残存長20.4cmを測る。

試料16：試料は第17次調査地点の南側で実施した試掘調査において採取した土壌中の炭化物である。分析対象と



a. 許藏穴 SP 1



図11 津島岡大遺跡第3次調査

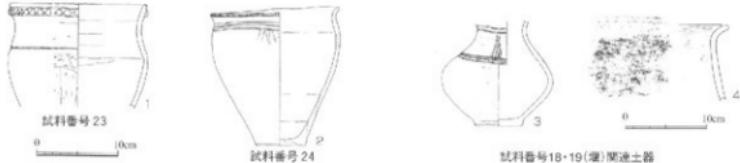


図12 津島岡大遺跡第23次調査

した土層は、津島岡大遺跡において「黒色土」として縦層になっている土層である。ただし、同地点においては、通常の「黒色土」と比べると、土層の厚さが非常に薄く下層との境が不明瞭で漸移的な状態にあった点は注意しなければならない。津島岡大遺跡ではこの「黒色土」から突帯文土器あるいは弥生前期土器が出土する場合が多いが、サンプリングを行った同地点では遺物は出土していない。

試料17・25：両試料は第22次調査において採集した堆積土中の炭化物である。試料17は「黒色土」の直下に堆積する15層（第17・22次調査基本土層）に、試料25は「黒色土」にあたる13層（同基本土層）に、それぞれ含まれる。いずれも時期を示す遺物は出土していない。

試料18・19（図12）：試料は、第23次調査の河道3内に構築された壇の構成部材2点である。同河道は、前述した試料11～14が位置する绳文時代後期の河道上部に重複する。壇は杭7本と支保材3点などで構成される。

試料18は3本の支保材の中央に位置し、189.4cmの長さをもつ丸木材で、樹種はコナラ属コナラ節である。

試料19は7本で構成される杭列の西から3番目に位置し（報告：杭3）、中心的部材として壇を構成する。直径は11.2×10.6cmを測る丸木材で、長さは44.8cmが残る。樹種はコナラ属クヌギ節である。両試料は、その位置関係から一連の構造物を成すことは明らかであり、使用時期はほぼ一致する可能性が高い。時期を考える上

で参考になるのは、堰に絡み合うように出土した弥生時代前期中葉の土器（図12：土器4）あるいは同堰から溝への取水口にあたる位置に置かれた弥生前期中葉～後葉の壺（同：土器3）があげられる。また、同河道からは、後述する試料24（同：土器2）が出土している。

試料20・22（同11-b）：試料20（同11-b：土器2）と試料22（同：土器1）は、第3次調査において13層（同調査基本土層）から出土した突帯文土器の外面に付着した炭化物である。河道斜面に堆積する同層からは、突帯文土器を中心とした多量の土器が集中して出土した。土器の特徴から縄文時代晩期の前池式と沢田式の間に位置する土器群として報告している。

試料21（同11-a）：試料は、第3次調査地点において河道斜面下端に構築された貯蔵穴SP1の最下層（4層）に貯蔵された状態で堆積した堅果類（カシ類）である。河道斜面には、前述の試料20・22を含む土器群が貯蔵穴直上を覆っており、同貯蔵穴内から出土した突帯文土器とともに、その埋没時期を窺わせる。

試料23（同12）：試料は、第23次調査の河道2から出土した突帯文土器（図12：土器1）の外面に付着した炭化物である。同河道からは突帯文土器がまとめて出土し、弥生土器を作わない。

試料24（同12）：試料は、第23次調査の河道3から出土した弥生時代前期の壺（図12：土器2）の外面に付着した炭化物である。前述したように同河道は試料18・19にあたる堰が設置された河道である。土器は3条の沈線などから前期中葉～後葉に属すると判断される。

### c. 考古学的成果と分析結果との関係

ここまで、試料1～25について考古学的資料からその内容を説明した。次に、発掘調査から年代を推し量った試料に関して、放射性炭素測定値（表2・図13）との関係を整理しておこう。

まず、縄文時代後期の土器が直接的あるいは間接的に共存する試料4～9・11～15について確認しよう。試料4・5では中津式、試料6～8では福田KⅡ式～縁帯文土器成立段階、試料9・15では縁帯文土器成立段階、試料11～14では中津式～福田KⅡ式が主体をなす。それに対して分析から得られる数値は、試料4・5では交点B C2450（ $1\sigma$ ：B C2480～2310、 $2\sigma$ ：B C2570～2210）と交点B C2450（ $1\sigma$ ：B C2470～2300、 $2\sigma$ ：B C2570～2520・2500～2210）であり、交点あるいは $2\sigma$ ではほとんど一致する。一方、試料6～8でも、その数値は、例えば試料6（ $1\sigma$ ：B C2460～2300、 $2\sigma$ ：B C2470～2220）をみてもわかるように、試料4・5の数値とかなりの部分で重複する。交点では、試料6・7・8はB C2400・2380・2360、B C2300、B C2300をそれぞれ示し、試料4・5より若干新しい値となるが、数値域の多くが重複する点は見過ごせないであろう。

さらに、考古学的見地とは明らかに一致しない場合が指摘される。試料6・7に関して分析数値を比較してみよう。両試料は同一土坑の上層（試料6）と下層（試料7）にあたる。当然、試料6は試料7よりも新しい数値が予想されるが、分析数値は $2\sigma$ では重複しつつ交点では下層にあたる試料7の値の方が新しい。その差は100年～60年の幅を見せており、堆積順序とは逆転することとなる。その他に、試料9と試料15にも、サンプル位置がごく近い試料間にもかかわらず、大きな数値の差が認められる。両試料は同一の土壤サンプルから抽出した試料であり、共存土器は縁帯文土器成立段階の土器である。それでもかかわらず、例えば試料9の $2\sigma$ では全体でB C2300～2040、試料15ではB C1305～1000年を示し、1000年前後という大きな差が生じている。確かに、試料9だけを取り上げると、交点あるいは $2\sigma$ の値は試料6～8よりもやや新しい傾向を示す点から、両試料間に認められる土器型式の関係と相容れないわけではない。しかし、 $2\sigma$ が示す数値域の一端で、異なる土器型式を伴う試料6・7と重複する点はやはり注意しておく必要があるうし、また、試料15の数値を否定する根拠も求められないことは言うまでもない。

試料11～14についてはどうであろうか。両試料は縄文時代後期の河道内に打ち込まれた杭で、使用段階に強い関連性を有する構成材と評価される。そして、同河道内出土の土器は中津式～福田KⅡ式が大半である。それに

(試料番号)

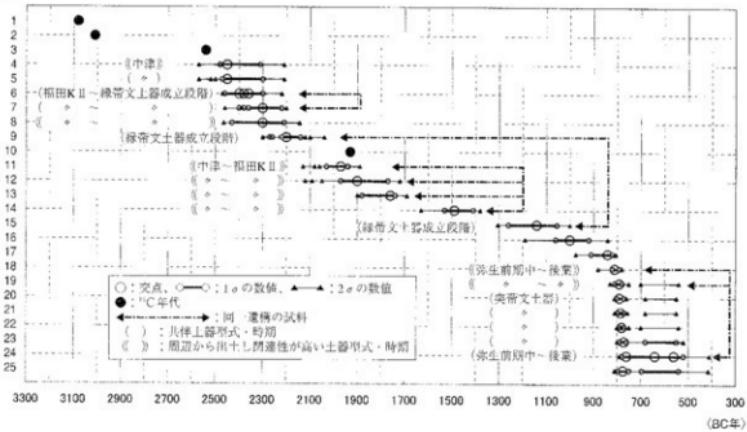


図13 津島岡大遺跡における暦年較正年代

対して、各坑の分析から得られた数値は、交点でB C 1970・1900・1760・1490、 $2\sigma$ 全体会ではB C 2130～1890、B C 2120～1720、B C 1900～1690、B C 1630～1380というバラツキを示す上、出土土器の編年観とは大きな開きを見せる。これは、中津式にあたる試料4、同5の数値（交点：B C 2450、2450）あるいは福田K II式～縄帯文土器成立段階の試料6～8（交点：B C 2400・2380・2360、2300、2300）との比較でも明らかである。

次に、突帯文土器あるいは弥生上器を共伴する試料18・19・20～24を検討しよう。

まず、試料18・19は、前述の試料11～14と同様に、河内内に設けられた壇を構成する部材であり、各部材間の利用時期に大きな差は認めがない。分析で得られた数値は、試料18と19は交点でB C 810とB C 790、 $1\sigma$ の範囲でB C 820～790とB C 810～780と、非常に近い数値を示すが、 $2\sigma$ （試料18：B C 880～780、試料19：B C 830～750、700～540）では試料18に古い数値域そして試料19に新しい数値域が現れる。試料19のこの数値を他の試料と比較すると、試料20～23に近似し、試料24ともかなり重複する。

ここで、試料20～24の状況を確認してみよう。試料20・22・23は突帯文土器、試料21は突帯文土器を共伴する堅果殻、試料24は弥生時代前期中葉～後葉の土器からの炭化物である。試料20～22の分析数値は交点・ $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 数値に関して非常に近似した値を示す。こうした関係は、試料21を伴う貯蔵穴の直上に試料20・22を含む堆積層が覆う状況や出土土器の特徴が共通するという発掘調査成果と矛盾しない。一方、 $2\sigma$ の値を比較すると、試料20～24の上限はすべてB C 810～790の中に収まり、下限では試料20～23でB C 550・540あるいは520、試料24でB C 410となる。つまり、これらの試料に対応する突帯文土器と弥生前期中葉～後葉の土器に関しては、測定値幅の多くの部分で重複することとなり、土器の編年観とは必ずしも一致しない。

再び、試料18・19に立ち返ると、発掘調査からは弥生時代前期中葉あるいは中葉～後葉の土器が同試料に伴う可能性が高いのに対して、 $2\sigma$ の数値は、試料24（弥生時代前期中葉～後葉の土器）と重複しつつ、試料20～22（突帯文土器）により近い値を示す結果となっている。このように、試料18・19についても、分析数値と共伴土器の年代観に関して試料20～24と同様の問題が指摘される。

最後に、縄文時代とした試料の中で、共伴土器が認められず時期が不明な遺構の試料1～3・10<sup>号</sup>について

は、縄文後期の可能性が報告されている。それに対して、分析数値は試料1・2が縄文時代中期に、試料3・10は同後期にあたる値を示すと考えられるが、これらの分析数値に関しては、<sup>14</sup>C年代にとどまっており、その評価については参考資料としておきたい。

#### d. 成果と問題点

各試料に関して考古学的な評価と放射性炭素測定法によって得られた数値との関係を確認すると、両者が一致した方向を示す場合と明らかに矛盾を生じている場合とが存在することがわかる。

縄文後期の土器編年については、後期初頭に位置づけられ中津式と併行関係にある称名式の年代が2470 calBCころ（2500～2450 calBC）とされている<sup>30</sup>点と比較すると、中津式土器を共伴する試料4・5の数値（交点 calBC2450）あるいは、それに続く試料6～8などの関係は、比較的良好な対応関係を保つと評価できるかもしれない。しかし、実際の年代は数値域の幅の中の一時期にあたることを考慮すると、これらが必ずしも同時性あるいは時期的な差を現しているとは言い難い点は注意しなければならない。また、同一土坑内での上下層での数値の逆転（試料6・7）、同一サンプル内での数値の違い（試料9・15）、あるいは河底内の杭（試料11～14、試料18・19）に認められるような共伴土器との齟齬、突窓文土器と弥生土器の重複（試料20～24）のように、考古学的評価とは異なる数値が同時に存在することも事実である。イレギュラーと感じられる数値に対して、様々な解釈を行うことは可能であろう。しかし、データを取捨選択する明確な根拠を考古学的な解釈から認めるることは困難な場合が多い。炭素14年代測定法に対して全く否定するものではないが、実際の遺跡・遺構を評価する場合、分析で得られた数値をどのように解釈するかという点で、慎重であるべきだと考える。

先後関係に関して比較的矛盾を見せない縄文後期においても、接近する型式間レベルの問題では、かなりの重複関係を示すこれらの試料を見る限り、数量的な裏付けなしに論じることは危険であることも明らかである。考古学的な十分な検証を踏まえた上で、データの蓄積を進めることができることは言うまでもないだろう。今後、考古学的検証を十分に踏まえた試料を蓄積することによって、こうした分析データを実態に沿ったものへとつなげていくことが重要であり、そうした作業のなかで、層年代の問題も考えていくこととしたい。

（山本悦世）

なお、試料12・14・16の年代測定には、平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（研究代表：山本悦世 基盤研究C(2)）（課題番号12610414）および平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（研究代表：山本悦世 基盤研究C(2)）（課題番号14510427）の成果の一部を含む。

- 註（1）石材同定あるいは動物遺体の同定あるいは射撃同定の一部が肉眼同定で行われている。
- （2）第7次・8次調査の分析データは1995年の分析である。
- （3）小林謙一2004『縄文社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』六一書房 106頁

#### 参考文献

- 中村俊大2003「放射性炭素年代測定法と層年代校正」『環境考古学マニュアル』同成社
- 春成秀爾2001「近畿・中国の実年代」「弥生時代の実年代」同成社
- 小林謙一2004『縄文社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』六一書房
- 挿図出典
- 図6～12：津島岡大遺跡の各調査地点の発掘調査報告からの引用、一部加筆  
第23次調査以外の発掘調査報告は59頁付表5に掲載
- 津島岡大遺跡第23次調査：野崎貴博ほか2006『津島岡大遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表3. 自然科学的分析一覧

## A. 年代測定関係

遺跡名	調査次	種類	点数	分析方法	測定値の沿革	本報告式件番号	分析機関・分析者
津島岡大	第1次調査	貯蔵穴(炉)灰果樹	1	放射性炭素年代測定	報告19	21	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第1次調査	貯蔵穴(炉)灰果樹	1	放射性炭素年代測定	—	—	国立歴史民俗博物館
津島岡大	第3次調査	土器付骨灰	2	放射性炭素年代測定	木紀要	20・22	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第3次調査	土器付骨灰	1	放射性炭素年代測定	—	—	国立歴史民俗博物館 (Beta 社)
津島岡大	第3次調査	土器付骨灰	1	放射性炭素年代測定	—	—	国立歴史民俗博物館 (Beta 社)
津島岡大	第3次調査	土器付骨灰	1	放射性炭素年代測定	—	—	国立歴史民俗博物館 (Beta 社)
津島岡大	第7次調査	炉内灰化物	1	放射性炭素年代測定	報告9	1	学習院大学 木越邦彦
津島岡大	第8次調査	土壤内灰化物	3	放射性炭素年代測定	報告8	2・3・10	学習院大学 木越邦彦
津島岡大	第8次調査	貯蔵穴(炉)灰果樹	1	放射性炭素年代測定	報告19	8	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第15次調査	土器付骨灰	2	放射性炭素年代測定	—	—	国立歴史民俗博物館
津島岡大	第15次調査	土器付骨灰	2	放射性炭素年代測定	報告21	9・15	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第17次調査	住居内の灰化物	2	放射性炭素年代測定	報告21	6・7	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第22次調査	土壤内灰化物	2	放射性炭素年代測定	報告21	17・25	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第23次調査	土器付骨灰	2	放射性炭素年代測定	報告22	23・24	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第23次調査	核	1	放射性炭素年代測定	報告22	12	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第23次調査	核・木材	5	放射性炭素年代測定	報告22	11・13・15・18・19	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第27次調査	土器付灰化物	2	放射性炭素年代測定	報告18	4・5	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第28次調査	核	1	放射性炭素年代測定	—	—	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	試掘(T37)	土壤内灰化物	1	放射性炭素年代測定	報告18	16	御古環境研究所 (Beta 社)
津島岡大	第7次調査	炉内灰化物	1	熱残留磁気測定	報告9	—	鳥居大学 春枝克安

## B. 植物珪酸体分析

遺跡名	調査次	種類	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第2次調査	土壤	報告2	大分県立大学 佐々木幸
津島岡大	第5次調査	土質粘土	報告7	宮崎大学 藤原忠史
津島岡大	第17・22次調査	土壤	報告21	(株) 古環境研究所
津島岡大	第21次調査	土壤	報告21	(株) 古環境研究所
津島岡大	第22次調査	土壤	報告18	(株) 古環境研究所
津島岡大	第23次調査	土壤	報告18	(株) 古環境研究所
津島岡大	第28次調査	土壤	—	(株) 古環境研究所
津島岡大	試掘(T37)	土壤	—	(株) 古環境研究所
鬼田	第13次調査	土壤	—	(株) 古環境研究所

&lt;表3の凡例&gt;

報告：岡山大学構内遺跡発掘調査報告

分析者：分析依頼を行った時点の所属を示す。

## C. 花粉分析

遺跡名	調査次	種類	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第2次調査	土壤	報告2	岡山理科大学 三好教夫
津島岡大	第6次調査	土壤	報告9	岡山理科大学 三好教夫
津島岡大	第8次調査	土壤	報告9	岡山理科大学 三好教夫
津島岡大	第23次調査	土壤	報告22	(株) 古環境研究所
津島岡大	第27次調査	土壤	報告18	(株) 古環境研究所
津島岡大	第28次調査	土壤	—	(株) 古環境研究所
津島岡大	試掘(T37)	土壤	—	(株) 古環境研究所
鬼田	第13次調査	土壤	—	(株) 古環境研究所

## D. 植物遺存体1

遺跡名	調査次	試料		分析方法	報告	分析機関・分析者	成果
		遺構・遺物	種類				
鬼田	第1次調査	井戸27	灰	灰像分析	年報12	東京大学 松谷義子	イネ科・穀
鬼田	第1次調査	井戸19個	炭化物(灰)	灰像分析	年報12	東京大学 松谷義子	イネ科
鬼田	第3次調査	井戸2	炭化物(灰)	灰像分析	報告4	東京大学 松谷義子	イネ科・穀
鬼田	第3次調査	井戸4	灰	灰像分析	年報12	東京大学 松谷義子	イネ科・穀
津島岡大	第7次調査	炉1	炭化物を含む土	灰像分析	年報12	東京大学 松谷義子	未検出
津島岡大	第3次調査	炭化土	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告5	東京大学 松谷義子	小明
津島岡大	第5次調査	炭化土	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告7	東京大学 松谷義子	ユリ科ネギ属(ノビルの断定はできない)

## D2. 植物遺存体2(種子)※正式報告を行ったもののみを掲載

遺跡名	調査次	試料採集場所	分析方法	報告	分析機関・分析者
鹿田	第3次調査	井戸2	実体顕微鏡観察	報告4	東京大学 松谷恵一
鹿田	第1次調査	井戸1	実体顕微鏡観察	報告3	大阪府立大学 齋藤典之
鹿田	第5次調査	土坑15	実体顕微鏡観察	報告2003	元九州大学 小西純
鹿田	第1次調査	井戸4	実体顕微鏡観察	報告3	元岡山大? 笠原农夫・武岡満子
鹿田	第3次調査	井戸	実体顕微鏡観察	報告4	大阪府立大学 齋藤典之
鹿田	第5次調査	井戸・土坑	実体顕微鏡観察	報告6	大阪府立大学 齋藤典之
鹿田	第6次調査	井戸	実体顕微鏡観察	報告14	岡山大學 沖陽子
津島岡大	第3次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告5	大阪府立大学 齋藤典之
津島岡大	第5次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告7	岡山大学 沖陽子
津島岡大	第6次調査	貯蔵穴	実体顕微鏡観察	報告9	大阪府立大学 齋藤典之
				報告13	岡山大学 沖陽子

## E. 動物遺存体(報告書刊行分)

遺跡名	調査次	試料採集場所	種類	報告	分析機関・分析者
鹿田	第1次調査	井戸	骨(ウマ)	報告3	西岡大学 鳥海俊
鹿田	第1次調査	土器破片	骨(ヒト)	報告3	岡山大学 小田鶴信郎
鹿田	第1・2次調査	井戸	貝	報告3	北治山女了短期大学 福井明彦
鹿田	第1次調査	柱穴	歯・骨(ヒト)	報告4	岡山大学 小田鶴信郎
鹿田	第3・4次調査	河床	骨(ウシ、イヌ、ニホンジカ)	報告4	奈良国立文化財研究所 松井章
鹿田	第5次調査	井戸4	骨	報告6	奈良国立文化財研究所 松井章
鹿田	第5次調査	土堆墓	肉・骨(ヒト)	報告6	岡山大学 小田鶴信郎
津島岡大	第9次調査	土	骨(ウシ、ウマ、シカ)	報告14	奈良国立文化財研究所 松井章

## F. 植物同定

遺跡名	調査次	分析方法	報告	分析機関・分析者
鹿田	第1次調査	内臓観察	報告3 (種名6、年齢10±再緑)	西岡大学 野村謙
鹿田	第2次調査	内臓観察	報告6 (年齢10±再緑)	岡山大学 野村謙
鹿田	第1次調査	顎微鏡観察	年齢10	森林総合研究所 能城修一
鹿田	第2次調査	顎微鏡観察	年齢10	森林総合研究所 能城修一
鹿田	第3次調査	顎微鏡観察	報告4 (報告6共、年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
鹿田	第4次調査	顎微鏡観察	報告6 (年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
鹿田	第5次調査	顎微鏡観察	報告7 (年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第3次調査	顎微鏡観察	報告7.5 (報告9共、年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第5次調査	顎微鏡観察	報告9 (年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第6次調査	顎微鏡観察	報告9 (年齢10±再緑)	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第9次調査	顎微鏡観察	報告14	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第12次調査	顎微鏡観察	報告14 (報告16共再緑)	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第10次調査	顎微鏡観察	報告16	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第15次調査	顎微鏡観察	報告19	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第17次調査	顎微鏡観察	報告21	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第19次調査	顎微鏡観察	報告21	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第22次調査	顎微鏡観察	報告21	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第26次調査	顎微鏡観察	報告20	森林総合研究所 能城修一
津島岡大	第27次調査	顎微鏡観察	報告18	(他) 古環境研究所

## G. その他

遺跡名	調査次	試料の種類	目的・方法	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第19次調査	土壤	粒度組成分析	報告17	岡山大学 鈴木茂之
津島岡大	第19次調査	上層土	粒度組成分析	報告7	帝京大学 川西学
福岡	第1次調査	石器破片(漢文)	石器破片同定	報告15	岡山専門大学 白石耕
鹿田	第1次調査	ガラス片	成分分析	報告3	東京国立文化財研究所 三浦定俊
鹿田	第1次調査	土壤中の赤色顕微	成分分析(ベンガラ)	報告3	株式会社レジン 鳥谷道郎
津島岡大	第12次調査	堆灰火灰	火薬成分分析	報告2003	岡山大学 松田敏恵
津島岡大	第12次調査	堆灰火灰	金属・定量分析	報告16	岡山大学 朝田次夫
津島岡大	第10次調査	堆灰	成分分析	報告2003	川越タクノリサチ
津島岡大	第19次調査	堆灰	成分分析	報告2003	川越タクノリサチ
津島岡大	第28次調査	土壌(亜土)	成分分析	報告2003	岡山専門大学 白石耕
鹿田	第12次調査	漆塗り陶	漆分析	-	勤児房寺文化財研究所
津島岡大	第5次調査	漆塗り漆	赤色顔料成分分析(無鉛)	報告11	勤児房寺文化財研究所
津島岡大	第5次調査	赤色顔料塗布耳朶	赤色顔料成分分析(水銀)	報告5	施島県立博物館 鳥島哲一

## 第2章 鹿田遺跡の調査研究

### 第1節 調査の概要

本年度は1件の発掘調査と、試掘・確認調査2件、立会調査7件を実施した（図19・表4）。発掘調査・試掘・確認調査は、医学部附属病院立体駐車場の新営に伴うものであり、一括して報告を行うこととする。また立会調査のうち、医病構内支障ガス管配管等工事に伴う調査（調査3）と医病構内支障給水管配管等工事に伴う調査（調査5）についても、その位置が第16次調査地点と近接し基本的な層序も一致することから、下記にあわせて報告している。その他の調査（調査2・4・6・7）はいずれも近代～近世土層で掘削が終了したものである。また鹿田遺跡周辺の調査として、調査8を次節に掲載している。

#### 1. 鹿田遺跡第16次調査（立体駐車場エレベーター設置：鹿田A II～A I 6・7区、AF12・13区、AN～AO4区）

##### a. 調査の成果

本調査地点は鹿田地区の北東隅にあたる。今回の調査では、近世～近代の畦町や畝、中世の土坑、弥生～古墳時代後期頃と考えられる河遺などを確認した。これまで鹿田地区の北東部分は、発掘調査が行なわれていなかったため状況が不明確であったが、周辺地形の変遷状況を概観できるようになった。

調査期間：2004（平成16）年10月21日～11月8日

調査地点と面積：3ヶ所、総面積：49.15m<sup>2</sup>

発掘調査地点1ヶ所：40.15m<sup>2</sup>、エレベータービット範囲（鹿田A H～A I 6・7区）

試掘・確認調査地点2ヶ所：5m<sup>2</sup>（第1地点 AF12・13区）、4m<sup>2</sup>（第2地点 AN～AO4区）

調査担当：高田貴太

主な遺構：近世～近代の畦町、畝、溝、土坑1基、中世の土坑1基

##### b. 調査の経過

岡山大学鹿田地区では、2004年度に立体駐車場を新営することとなり、そこにエレベーターが設置されることとなった。エレベーター設置には、7.1m×5.1mの範囲を現地表面から2.65mの深さで掘削する必要があり、エレベータービット範囲について発掘調査を実施することになった。また、歯学部棟の北東に隣接する立体駐車場新営予定地とその周辺は、これまで発掘調査が行なわれておらず、近世～弥生時代の状況が不明確であったため、発掘調査に先立ち、2ヶ所において試掘調査を実施することとした。

エレベータービット範囲の発掘調査の実施に先立ち、10月21、22日そして25日に試掘・確認調査を実施した。発掘調査は10月27日から開始し、近世～近代、中世の遺構、弥生～古墳時代後期の自然河道を調査したうえで、11月8日に終了した。

また、試掘・確認・発掘調査と併行してガス管・水道管の切換に伴う立会調査も行なっている（表4 調査3・5）。基本的な層序は一致し、遺跡形成を考えるうえで重要であり、ここでは2ヶ所の立会調査地点もあわせて、調査成果を報告することにする。

## c. 調査の概要

## ① 位置 (図14)

本調査地点は岡山大学鹿山地区の北東隅にある。調査開始前は駐車場として利用されていた。西側には医学部附属病院正門があり、南西側に歯学部棟が建つ。

## ② 層序 (図15)

上層の説明、対応関係は発掘調査地点のものを基準とした。

1層：大正時代から現代までの造成土である。現地表面から約0.8～1m下位まで堆積している。現地表面の標高は、約2.5～2.8mである。

2層：橙灰褐色粘質土である。灰色粘土ブロックを多く含み、近代に形成された土層である。

3層：淡青灰色粘質土で、近世～近代の耕作土である。色調によつて細分も可能である。鉄分、マンガンが多く含み、下層には鉄分の沈着が認められる。発掘調査地点において、柱跡・歯とそれに伴う溝を確認した。

4層：茶灰色粘質土で、色調から上下2層に区分できる。鉄分、マンガンが多く含み、下層には鉄分の沈着が確

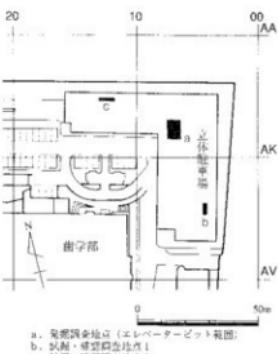
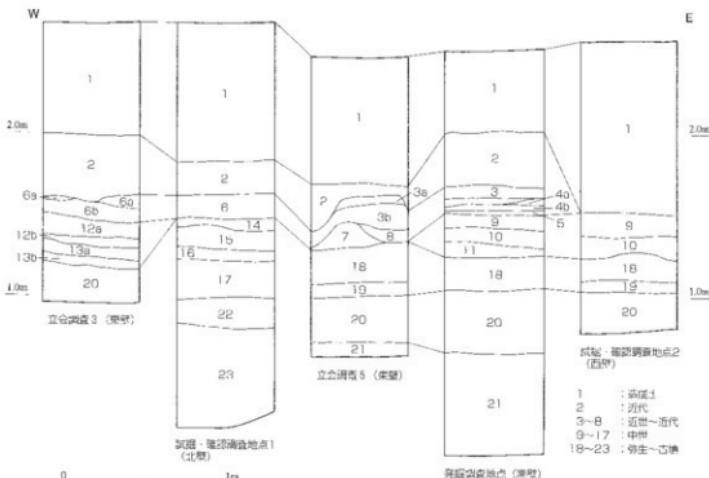


図14 第16次調査地点位置図



1. 造成土 2. 橙灰褐色粘質土 (Fe・Mn) 3a. 淡青灰色粘質土 (Fe・Mn) 3b. 暗茶褐色粘質土 4a. 茶褐色粘質土 4b. 暗茶褐色粘質土 5. 黄茶褐色砂質土 6a. 灰褐色砂質土 (Fe・Mn) 6b. 灰褐色粘質土 (Fe・Mn) 7. 灰褐色粘質土 8. 灰褐色砂質土 9. 灰褐色粘質土 (Fe・Mn多い) 10. 灰褐色砂質土 (灰化物) 11. 暗茶褐色砂質土 (灰化物) 12a. 灰褐色砂質土 (Fe・Mn多い) 12b. 灰褐色砂質土 (Fe・Mn多い) 13a. 灰褐色粘質土 13b. 灰褐色砂質土 14. 灰褐色粘質土 15. 灰褐色粘質土 16. 灰褐色粘質土 17. 茶褐色粘質土 18. 茶褐色砂質土 19. 茶褐色砂質土 20. 茶褐色砂質土 21. 灰褐色砂質土 22. 灰褐色砂質土 23. 茶褐色粘質土

図15 第16次調査地点土層柱状図 (縮尺1/30)

認できる。4a層は茶褐色で、発掘調査区ではその上面において不定形なたわみと土坑1基を確認した。4b層は暗茶灰色粘質土である。近世の耕作土である。

5層：黄茶褐色砂質土で、発掘調査区で部分的に確認された土層で、砂質度が強い。4層が形成される以前に洪水などの要因によって短期間に堆積した土層と考えられる。

6層：灰褐色粘質土である。6bは6aに比べて茶色沙が混じる。鉄分、マンガンを多く含み、近世の耕作土と考えられる。立会調査3地点では、畦畔状の高まりを確認している。

7層：茶褐色砂質土である。立会調査5地点で確認した畦畔状の高まりを形成する土層である。鉄分、マンガンを含む。

8層：灰褐色砂質土である。鉄分を多く含み、近世の耕作土と考えられる。

9層：橙茶灰色粘質土層である。鉄分、マンガンを多く含む。中世土器片がまばらに出土しており、中世の耕作土と考えられる。

10層：橙茶褐色砂質土である。鉄分、マンガンを多く含む。中世土器片がまばらに出土している。中世の耕作土と考えられる。

11層：暗茶褐色砂質土である。中世土器片を含む。発掘調査地点では上面で土坑1基を確認している。中世の堆積層であるが、中世土器片がまばらに出土し、鉄分、マンガンを多く含むことから、耕作土として利用されていた可能性が高い。

12層：淡茶褐色砂質土層である。鉄分、マンガンを多く含む。色調により上下2層に区分できる。12b層は12a層に比べて鉄分の沈着のためか黄色味が強い。立会調査3地点で、畦畔状の高まりを確認しており、中世段階の耕作土と判断される。

13層：橙褐色砂質土である。鉄分、マンガンを含む。色調により上下2層に区分でき、13bは13aに比べて鉄分の沈着のためか黄色味が強い。中世段階の耕作土と判断される。

14~17層：棕茶褐色の色調を示す土層である。試掘地点1においてのみ確認される層序であるが、他地点における同じレベルの4層に比べて粘質が強く、鉄分やマンガンをあまり含まない。また、16~17層はそれぞれ色調によって上下2層に区分することも可能である。いずれも下層の黄色味が強い。遺物は出土していない。

18~19層：いずれも茶褐色砂質土で、18層がやや暗い色調である。砂質感が強い。中世の耕作土（9~13層）が形成される以前の自然河道による堆積層と考えられる。

20~21層：粗砂あるいは細砂である。上面のレベルは、標高1.0~1.2mを測る。発掘調査区では、標高30cmまで調査を行った。その後、重機によってさらに掘削し、標高約0.1mで湧水地点を確認した。弥生~古墳時代後期の上器が比較的豊富に出土し、また流木も検出された。自然河道による堆積層である。

22層：明灰色粘質土である。試掘・確認調査地点1でのみ確認された土層である。粘質が非常に強く、鉄分、マンガンを含む。

23層：明青灰色粘質土である。試掘・確認調査地点1でのみ確認された土層である。上面のレベルは標高0.8mである。この層の掘削の結果、標高0.2mで湧水地点を確認し、そこでは流木も検出された。

### ③ 遺構・遺物

発掘調査地点において、近世~近代、中世の遺構面を確認した。

〈近世~近代〉（図16~17）

3層上面で、調査区南半分で畦畔とそれに伴う溝、北半分で竪を検出した。畦畔は東西方向にのびる1条（幅1.9m）とそこから南北にのびる1条（幅1m）を検出した。削平により高さ3cm程度が残存している。竪は3条確認し、幅1.2~1.4m程度である。

4層上面で、たわみと土坑1基を検出した。たわみは不定形ではあるが、検出範囲の北半部では畦畔状の高ま

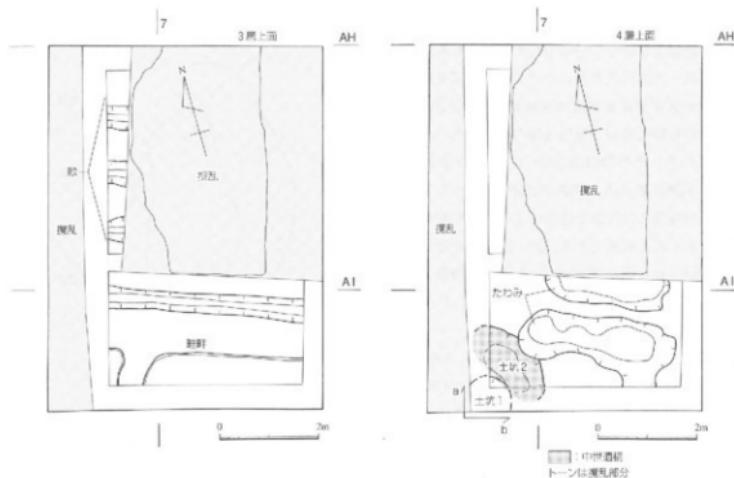


図16 近世～近代遺構平面図（縮尺1/100）

り部分が確認できる点や4層に鉄分やマンガンが多く含まれる点、たわみの落ち込み部分の埋土が灰褐色粘質土で鉄分やマンガンを含む点などから耕作に関連するものと考えている。土坑は調査区南西隅の側溝壁面で確認した（図17）。平面形状は不明であるが、断面形状から、径130~140cm程の円もしくは梢円形を呈するものと推定される。深さ67cmで、底面は砂層（20層）に達する。埋土は灰褐色土ブロックを多く含み、砂質度が強い。

#### （中世）（図18）

11層上面で土坑1基を検出した。土坑2は調査区南西隅の側溝付近で確認され、長径190cm、短径116cmの平面梢円形を呈し、残存深さは23cmである。底面で拳大の割石1点が確認された。埋土はほぼ水平な堆積で砂質度が強い。埋土中から中世土器片が出土している。

#### ④ 鹿田地区北東部の地形の変遷について

今回の調査によって、鹿田遺跡の北東限周辺の環境をある程度概観できるようになった。以下、その概要を記す。まず、弥生～古墳時代後期頃には自然河道が通っていたと考えられる。河道による堆積層と判断される20・21層（砂層）が調査地点周辺の広範囲に広がる状況が明らかとなった。このような状況は、本調査地点から50m程西へ位置する正面玄関前の駐車場付近における試掘調査（1985年度）においても確認されている<sup>13)</sup>。この点を考慮すると、発掘調査地点付近では、河道は大きく見て東西方向に流れていた可能性がある。

一方で、試掘・確認調査地点1周辺の当時の状況はやや異なる。他地点で確認された20・21層のような砂層が確認されず、代わりにそれと同様のレベルで青灰色の粘質土層（22・23層）が確認された点、14～17層のような粘質が非常に強い層が厚く堆積している点などを考慮すると、試掘・確認調査地点1の周辺は弥生時代から中世

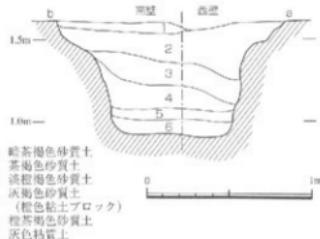


図17 土坑1断面図（縮尺1/30）

まで低湿地のような状態であったことが想定でき、河岸付近の状況を反映しているものと判断される。

弥生時代～古墳時代初頭にかけては、本調査地点より南西側の医学部附属病院外来診療棟<sup>1)</sup>や管理棟<sup>2)</sup>の周辺に広がる微高地が、鹿田遺跡の中心であったと考えられている。その微高地部から、1m程低い位置に当たる本調査地点は、遺跡の北東限であったと判断され、この時期には河道や流水による砂の堆積が著しい環境であったと判断できる。20・21層（砂層）の下半部で確認された出土遺物は、そのような環境の中で流れ込んだものであった可能性を考えることができる。

その後、河道による土砂の堆積が進行し、中世に比定される10・11・13層の段階で耕作地としての利用が本格的に開始されたものと判断される。外来診療棟や管理棟の周辺に広がる微高地には中世においても集落が形成されており、そのような生活域に対応する耕作域が本調査地点周辺に広がっていた可能性が高い。以後、近世～近代においても基本的には耕作地としての利用が継続したようである。3層上面では、畦畔と畝があわせて検出されたが、当時の二毛作の状況を反映しているとも評価できよう。（高田貴太）

註（1）山本悦徳1987『医学部附属病院基幹環境整備工事に先立つ範囲確認調査』『岡山大学構内遺跡調査研究年報』3 1985年度 岡山大学埋蔵文化財調査室 14～15頁

（2）吉留秀敏・山本悦徳1988『鹿田遺跡1』 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（3）松木武彦・山本悦徳1993『鹿田遺跡3』 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

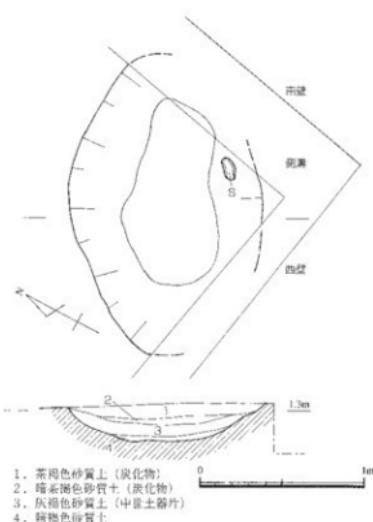


図18 土坑2平・断面図（縮尺1/30）

表4 2004年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	調査位置	所轄	調査名 称	発生期間	発掘深度 (GL.m)	内 容
1	発見	AH-AI6・7 AI2・13. AN～O4	医病	0体駐車場新設工事（エレベーター・ピット）	19.21～11.8	2.5m	調査面積約135m <sup>2</sup> （発掘箇所底点）、試掘調査施設（2）近世～古代の礫境（西・東）、土柱、中世の土器、陶器、古墳の円頂（鹿田遺跡第16次調査）
2	立会	DG・DH31 DH32・34	医・商	職員集合所改修及び新規樹木植栽作業	9.9	0.6～1.2m	近代夢寐跡（GL=1.2m）
3	立会	AF16・AF・AI17 AI9～16	医病	医病棟内支障ガス管配管工事	10.21～ 10.25	1.0～1.8m	後戦跡で近世～近代の水田塁、中世の柱跡を確認。また、弥生～古墳の実家と鑑定される跡量を確認。アコニトリスあり。
4	立会	CY26・27、CZ26	○	保健学科西側拉戸管取扱工事	10.22	1.15m	未成土内
5	立会	AE4～16 AF～AI16 AI9～15 AJ～AO9	医病	医病棟内支障給水管配管工事	10.27～ 11.6・19	0.9～1.9m	樹・中世？～近代の輪軸確認。また、先史～古墳の河港と鑑定される跡量を確認した箇所あり。
6	立会	BX12、DC・CA12 CC12、CF12、CI10 CL10・11	医病	病院日野新設工事（パーキング・駐車設置）	03.3.1・2	0.8～0.9m	未成土内、駐車部分では近代層確認
7	立会	CO13・14	医病	所轄日野新設工事に伴う移設工事（PL鋼製管など）	5.3.14	1.5～1.7m	近世～近代層確認（GL=1.5m）

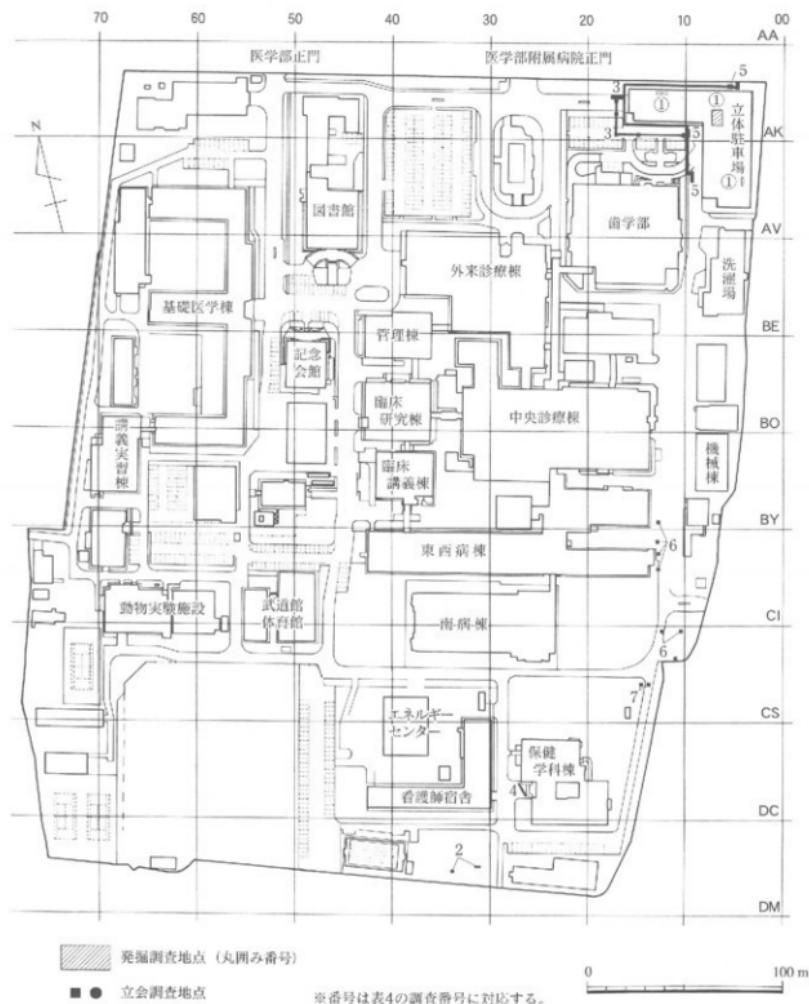


図19 2004年度の調査地点【2】—鹿田地区—（縮尺1/2500）

## 第2節 鹿田遺跡周辺の調査

2005年2月に、岡山大学が岡山市大併に所有する土地を民間に貸与して「岡山画像診断センター」を設置することになった。対象地に対して岡山市教育委員会が試掘・確認調査を実施した。調査地点は、鹿田遺跡の北西約0.3kmにあたる(図20)。鹿田遺跡の旧地形を考える上でも有益な情報が得られており、岡山市教育委員会より面図・所見の提供を受け、ここに掲載した。

試掘・確認調査は新宮予定地内の南北二箇所に試掘坑を設け、深さ2.2~2.3mまで掘削し、堆積状況を確認した(図21)。

岡山市教育委員会の調査所見では造成土以下、近代~古代相当と考えられる耕作土の堆積が認められ、両試掘坑とともに、GL-2.05mより下位は、低湿地堆積層と考えられる白色砂をラミナ状に含む灰色シルト層に達した。以上の結果より、本地点では埋蔵文化財埋蔵層は認められず、試掘坑2からごく少量の土器片の出土がみられることから、古代以降は集落に近接した水田のひろがる地域、それ以前は低湿地や河道跡の状況と考えられている。

(岩崎)



図20 調査8位置図(縮尺1/6250)

図21 調査8土層柱状図(岡山市教委提供)  
(縮尺1/40)

表5 2004年度鹿田遺跡周辺調査一覧

番号	種類	調査主体	調査名稱	調査期間	剖面深度(GL.m)	内 容
8	試掘・確認	岡山市教育委員会	岡山画像診断センター新宮に伴う試掘・確認	05.2.14	2.2~2.3m	造成土以下、近代~古代相当の耕作土の堆積状況を確認。

### 第3節 鹿田遺跡の研究

#### 1. 鹿田遺跡第5次調査出土の井戸枠材に関する再検討—焼印と木材の規格—

##### a. はじめに

今回再検討する井戸枠材は、1987・88年度に発掘調査がなされた鹿田遺跡第5次調査（管理棟）において発見されたものである。この井戸は、すでに刊行がなされた報告書において、「井戸6」として報告がなされている（松木・山本編1993、以下『報告』と略す）。井戸6は、3段（上段・中段・下段）の横桟を有する縱板組構造の井戸である（図23）。近代の建物基礎の下から検出されたため、調査には困難を伴ったが、井戸の底面中央部からウシの頭骨が、四隅からは土師器皿が出土し、当時の井戸祭祀を考える上で注目すべき遺構となった。出土土器から、井戸の時期は12世紀代～13世紀初頭という年代が与えられている（図22）。一方『報告』においては、遺存状態の良好な中段・下段の横桟と、両者の間に設置された支木4点の実測図が示されたのみであり、紙幅等の関係から縱板の詳細を含めた枠木材の全体像については言及がなされていなかった。

さて、2005年度の展示会開催のために本井戸の枠木を取り出した際、縱板に焼印が2点の縱板と支木1点に、合計3箇所存在することが新たに判明した。近年、博と呼ばれる建築素材の規格品と、それに付された焼印に関する研究が、岡田文男と鍾方正樹によって進展している（岡田2002・2004、鍾方2003）。岡田と鍾方は、見解の相違もみられるが、刻印や焼印が生産・流通時に付与された属性であることを詳細に論じている。また岡田は、実際の長岡京から出土した井戸枠材の接合作業の結果、長さ376cm（約1丈2尺）、幅16cm（5寸）、厚さ12cm（4寸）の原材料を復元し、それが文献に記載された博に相当することを論証した。実際に、今回報告する縱板についても、板どうしが接合する状況を確認することができた。

本論では、保存処理による幾分の変形も予想されるが、未発表であった枠木や焼印に関する実測図と観察結果について報告する。そして、鹿田遺跡における材木の生産・流通の具体相を探るための基礎的研究を提示したい。

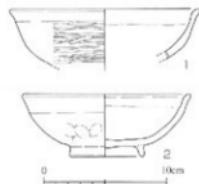


図22 井戸6出土土器（縮尺1/4）

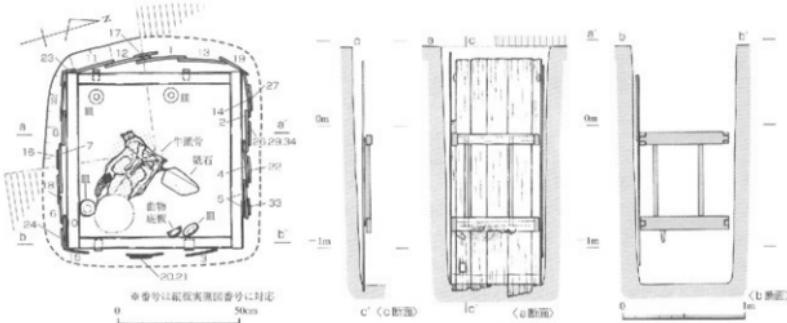


図23 井戸6平面図（縮尺1/20）・断面図（縮尺1/40）

### b. 井戸枠木材に関する検討

#### ① 縦板 (図24~28, 30~33)

縦板は38点出している。そのうち、小片を除く34点について図化した。実測図は木裏面を同化し、材の天地は井戸構築時の設置状態を基準とした。

縦板はいずれも割り裂き材である。縦板の分類と接合作業の結果、a ~ e類という5組の接合材を確認した。接合関係の認められない材については、幅が狭く下端部付近に穿孔を有する一群をまず抽出することができる。残りの穿孔を有さない縦板は、幅広の大型のものから幅の狭い小型のものまでバリエーションが認められる。

#### i) 接合材 (図24~26-W1~12, 表6)

接合材b ~ e類は、下端部の加工痕（後穴を含む）が一致することで接合が判明したものである。したがって、これらの加工は原材の割り裂き前に施された属性といえる。接合材は、木表幅が15~18cm（5~6寸）となることや、割り裂き材であること、焼印を有するものがあることから、博に該当するものと考えられる。

a類 (図24-W1・2) 2枚の材が接合した。W1は木口面が平滑となる。W2は、割り裂きが元の材の木口まで到達することなく、剥ぎ取られたものである。

b類 (図24-W3~5) 3枚の材が接合した。木口が木裏から木表にかけて斜めに切断されているため、下端の長さは木表側の板ほど短くなっている。下端部両側には加工が施される。両側とも3単位の加工を基本とする<sup>10</sup>。また、中央付近の右長側面（下端を基準としてみた方向、以下同様）には、何かが押し当てられた際に付いたと思われる、幅2.4~4.3cmの窪み状の痕跡が認められる（図32-6）。この痕跡は、接合した状況で3枚の板にまたがって認められることから、割り裂き前に形成されたものといえる。原材を繩で縛った際等に付いた痕跡の可能性がある。この痕跡は反対側の長側面にはみられない。

c類 (図25-W6・7) 2枚の材が接合した。下端部右側に4つの単位の加工が施される。加工には材の長軸に対して斜め急角度となるものと、ほぼ平行する方向のものがあり、W7では両者の交点に幅2.8cmの抉りが残る。抉りの存在から、次のd類も同様であるが、この下端部加工は連続に関連するものと考えられる。

d類 (図25-W8~10) 3枚の材が接合した。下端部右側には、5つの単位の加工が施される。その平面的形状はc類に類似する。長軸に対し斜め方向と平行になされる加工の交点には、幅2.3cmの抉りが作られる。この接合材のみに認められる特徴として、いずれの板も割り裂き後に、下端部の木裏面にハツリがなされることが挙げられる。これは、井戸構築時に縦板を地中に突き刺すことを容易にするための加工と考えられる。

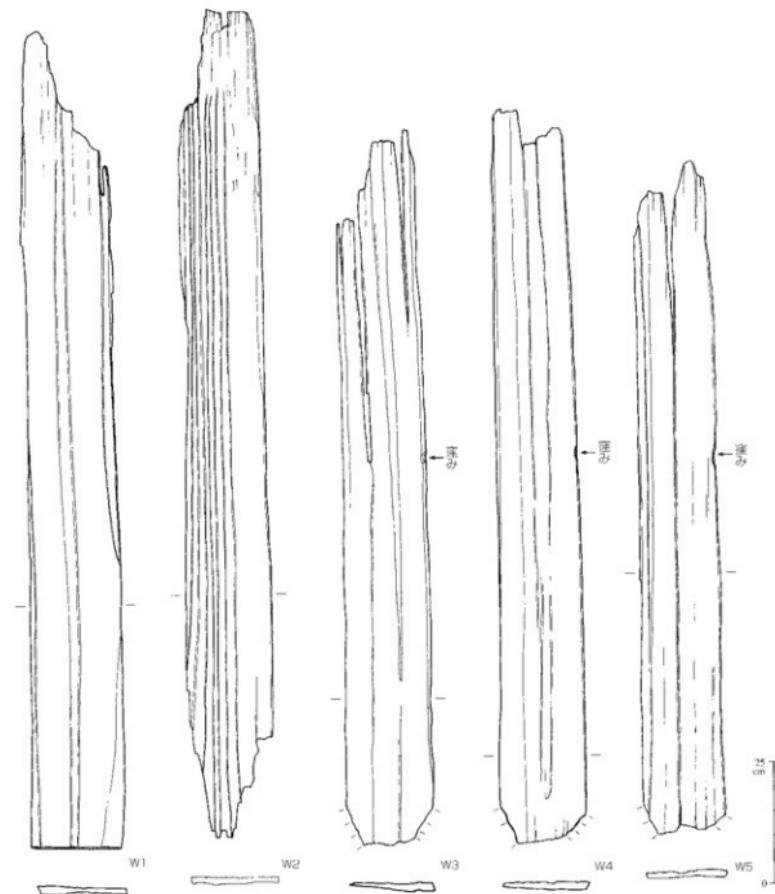
e類 (図26-W11・12) 2枚の材が接合した。後穴を有すること、最も今長の長い接合材であること、焼印を有することを特徴とする。後穴は一段目の板から下段にかけて、材の木裏面に対して垂直ではなく斜めに工具が入れられている。W11には、下端部付近の木裏に一箇所の焼印が施されている。

表6 接合材の法量

接合材	接合枚数	縦板長(cm)	木表幅(cm)	木裏幅(cm)	最大幅(cm)	用 斧	特 徴	
							スギ	トネル部加工なし、木口平滑
a	2	174.0	17.9	18.4	3.2	スギ	下端部の右側面を加工	
b	3	150.8	16.8	16.5	4.7	スギ	下端部の右側面を加工	
c	2	169.7	16.0	15.5	2.6	スギ	下端部の右側面を加工	
d	3	168.5	15.0	12.4	4.2	スギ	下端部の右側面を加工	
e	2	187.4	18.0	19.9	4.1	スギ	種子、木口に焼印1箇所	

#### ii) その他の縦板 (図26~28-W13~34)

穿孔を有さない縦板 (図26~28-W13~25, 33~34) 形状・規模については、上記の接合材と同規模のものから、小型のものまで多様である。W13は、下端部に加工が施され、かつ木裏に焼印を有する縦板である。下端部は、両長側面に抉りが作られ、木口の両側も長軸に対して斜めに加工されている。特に左側の抉りにおいて明瞭であるが、抉りの内部にさらに幅1.2cmの抉りが作られている。抉りは繩をくくりつけるためのものであろう。抉りよりも下位の木裏には、直線で長軸に直交ないしは斜交する傷状の痕跡が約10箇所みられるが、これがどのような意味をもつかは判然としない。中央付近の右長側面には、b類接合材と類似した幅3.5cmの半円状



番号	観測名	位置	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大奥深(cm)	木取り	接合	脚注	特徴
W.1	板柵	西側	167.9	18.4	2.0	直接目	a-1段	スギ	木口平手
W.2	板柵	北側	170.2	17.9	1.5	直接目	a-2段	スギ	厚材の木口まで分肉が及ぶことなく、表面とらわねた様
W.3	板柵	東側	146.0	18.0	1.6	板目	b-1段	スギ	下部両面を加工(内側とも上側)。右長側面に深み(幅2.4cm)
W.4	板柵	北側	150.8	17.6	1.6	板目	b-2段	スギ	下部両面を加工(両側とも4.4cm)。右長側面に浅み(幅3.0cm)
W.5	板柵	北側	158.2	17.1	1.5	板目	b-3段	スギ	下部両面を加工(右側:基部、上側2段目)。右長側面に深み(幅3.0cm)。木表面に焼け

図24 疊板①(縮尺1/10)

の痕跡が認められる。W17は右長側面に幅3.5cmの窪みがみられ、その木表には刻印の可能性もある線刻が認められる。

穿孔を有する縦板(図28-W26~32) 穿孔がなされた縦板は7点確認された。これらの材は、幅が9~12cm前後で、薄手の板が穿孔の対象となっている。いずれの孔の内側にも焦げが認められるため、穿孔は焼成によっ

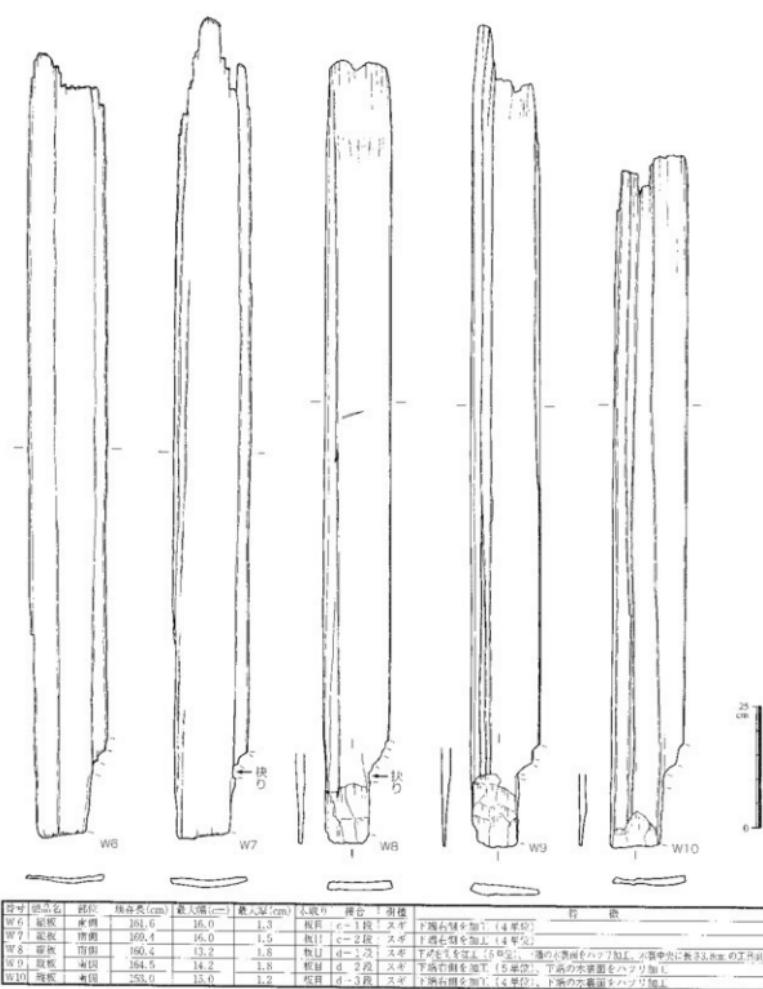


図25 縦板②(縮尺1/10)

てなされていることがわかる。したがって、削り裂き後に穿孔がなされたものと考えられる。穿孔には、図33-10のように十分に貫通しないものも認められる。こうした穿孔が、井戸の構造と直接かかわるものと想定することは困難だろう。穿孔を有する材は、接合関係が認められないことからも、縄と認識した縦板とは異なる経緯で製作されたものが、井戸構築にあたって転用された可能性が考えられる。

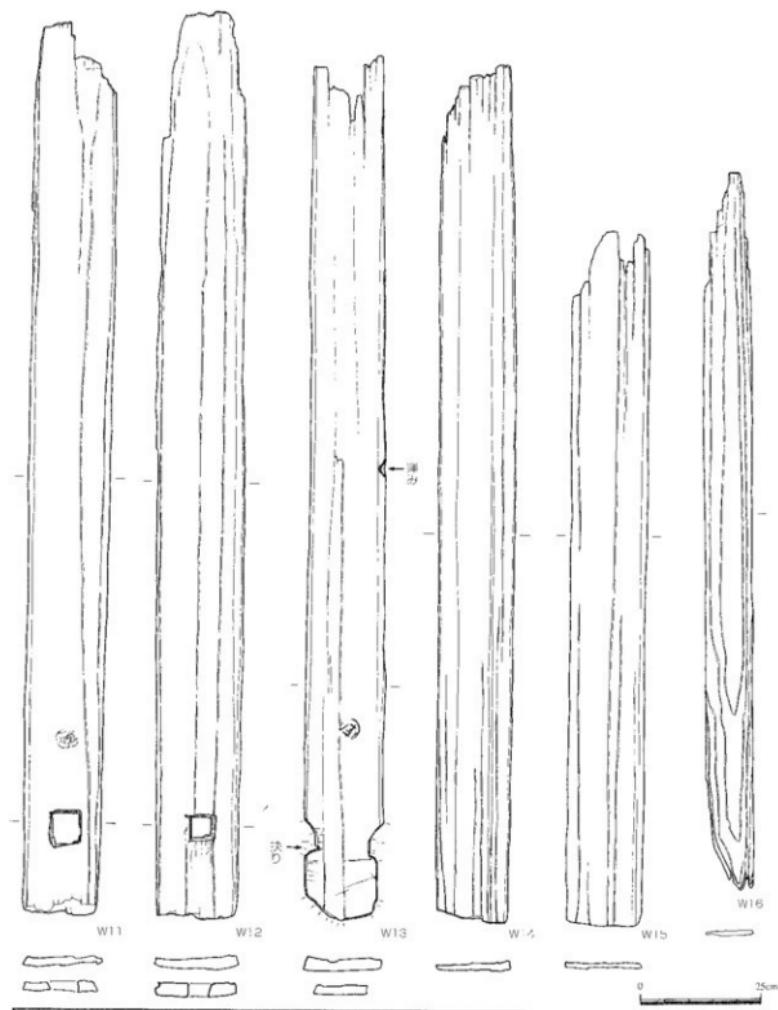


図26 欄板③(縮尺1/10)

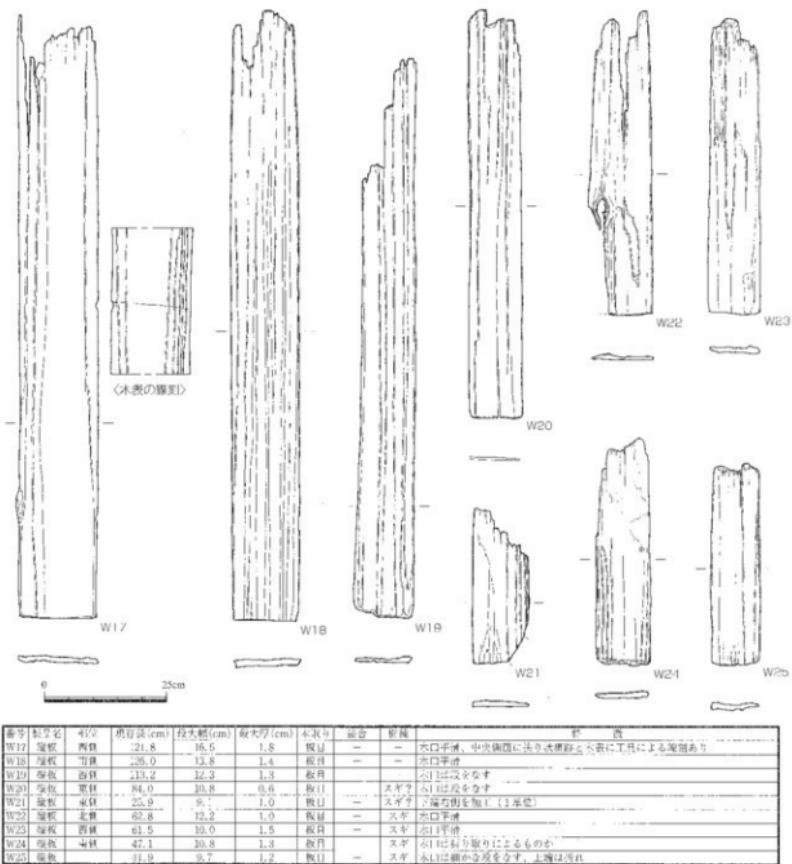
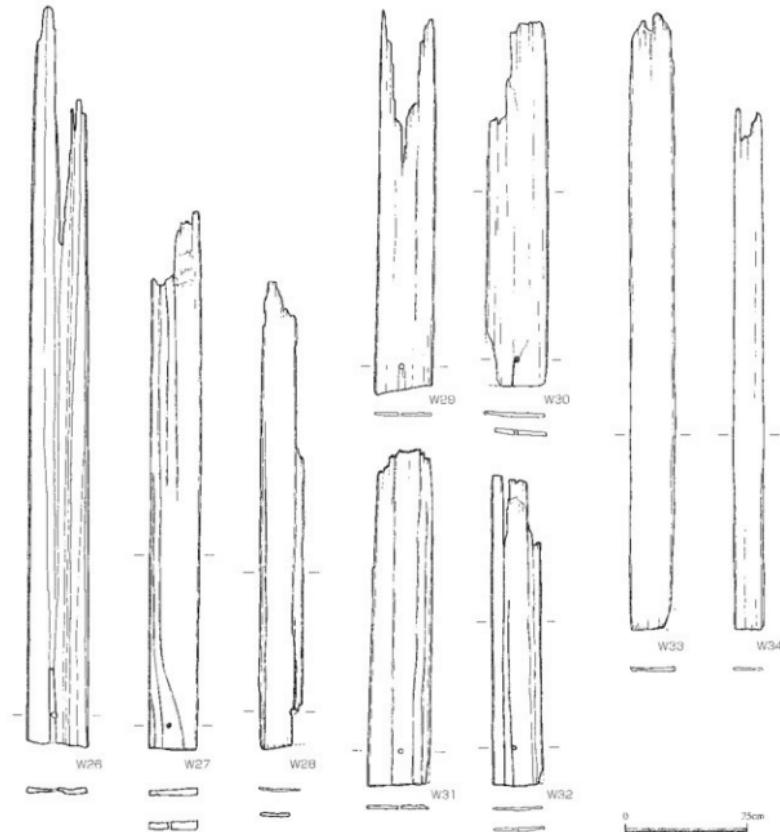


図27 縦板④ (縮尺1/10)

## iii) 縦板の種類と井戸における使用箇所の関係 (図23)

まず縦板の接合関係と、井戸における使用箇所の関係をみてみよう。a類となる2枚の板については、西側辺と北側辺に配備されるが、b～d類については井戸の特定の辺に使用されている。類似する下端部加工がなされたc・d類は南側辺、e類は西側辺となる。またb類は、北側に2枚、東側に1枚配備されるが、これらは井戸北東隅付近に配置されたものである。こうした接合材と使用箇所との対応関係は、運びこまれた素材が、井戸の設計・構築にあたって割り裂かれた状況を示唆する。穿孔を有する板材を含む小型の材 (W16～34) の多くは、内側の大型の縦板の背後、掘り方と縦板との隙間に挿入される。



番号	部品名	材種	横断長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	横合	埋粧	特
W26	横板	北楓	152.9	12.5	0.7	板目	—	スギ 穿孔 (φ7.0mm、木裏から木表へ)	
W27	横板	北楓	110.7	9.9	0.8	板目	—	スギ 穿孔 (φ7.0mm、木裏から木表へ)	
W28	横板	西楓	96.4	10.7	0.5	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm)	
W29	横板	北楓	79.9	11.8	0.6	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm)	
W30	横板	西楓	74.4	12.3	0.8	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm、板目から心材側に穿孔あり)	
W31	横板	西楓	66.2	12.6	0.7	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm、木裏から木表へ)	
W32	横板	西楓	63.9	10.2	0.7	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm)	
W33	横板	北楓	126.4	9.1	0.9	板目	—	スギ 穿孔 (φ6.5mm)	
W34	横板	北楓	107.1	6.0	0.5	板目	—	スギ 心材生透	

図28 縦板⑤ (縮尺1/10)

## c. 横桟・支木 (同29)

遺存状態の良好な中段と下段の横桟については、『報告』においてすでに尖測図が示されているが、今回は未報告であった上段の横桟の図化を行った。上段の横桟は、井戸の上部から出土したため風化が著しく、正方形な大きさや加工については不明である。その一方で、中段・下段の材の長さが72.9cm前後となるのに対し、上段の長さは両端の凸部・凹部を比較の基準とすればいくぶん短く、両者に違いがある。なお、幅は中段が8.5~10.2

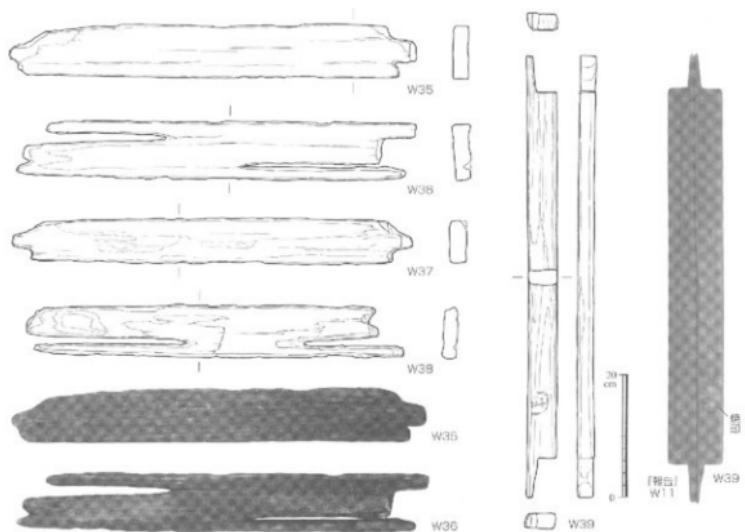


図29 横桟・支木(縮尺1/8)

cm、下段が11.3~12.1cm、厚さは中段が4.4~4.9cm、下段が3.8~4.2cmとなる。

一方、出土した4点の支木については、「報告」においてすでに実測図が掲載されていたが、今回新たに次の二つの様相が明らかとなった。まず、4点の支木のひとつ(図29-W39、「報告」W12)に、縦板と同様の焼印が1箇所確認された。第二に、この支木と同様の規格の支木(「報告」W11)どうしが、長側面で接合することが判明した(図29接合写真)。接合材は、長さ72.6cm、幅9.1cm、厚さ2.6cmを測る。この法量は、横桟の法量に近い。長さについては中段・下段、幅については上段・中段、厚さについては上段の横桟に近い数値となる。材を二分した後に、分割面の縁が丸みを帯びるように加工がなされている。W39の焼印が、もう一方の材にまで及んでいないのは、こうした加工によって焼印の残り部分が尖われたためと考えられる。

規格の上で類似する横桟と支木は、幅と厚さから考えるならば角材を素材とした可能性が高いだろう。

#### d. 焼印(図30)

井戸枠材からは、表面に焦げ目が認められる3点の焼印が確認された。焼印は2枚の縦板(W11・13)と1点の支木(W39)に対して、それぞれに1箇所施されていた。縦板における焼印の位置は、W11で下端から33cm、W13で下端から37cmとなり、ほぼ類似した位置にある。ただし、両者では焼印の向きが約180度異なる。

3点の焼印は、押し方や原体の熱し方等によるためか、形状がいくぶん異なるものの、同様の大きさ・形状をなすことから、同一の原体から押印されたものである可能性が高い。焼印は、不整円形の外縁部分(外区)と文字状の部分(内区)からなる。外区の形状については、4つの単位の線分が確認される。内区は、中央の三日月

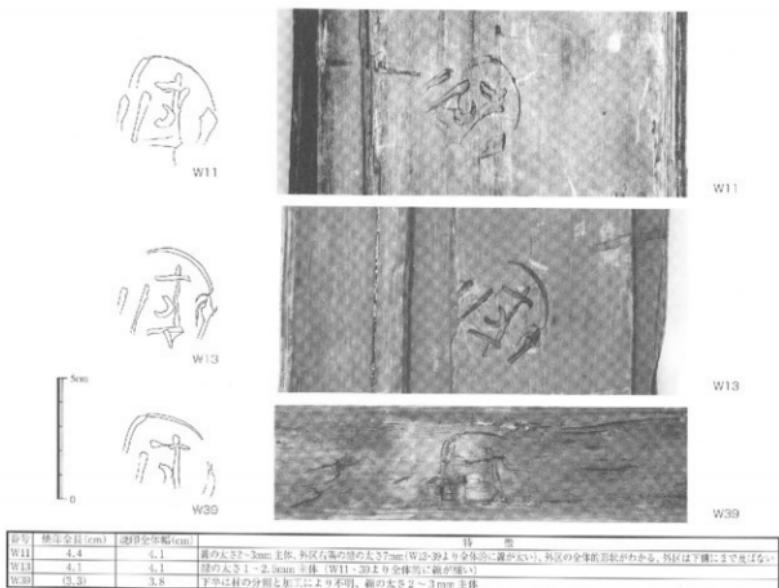


図30 燒印（顎尺1/2）

状の文様と、それを囲むような台形状の直線からなる。内区の形状は、文字を图案化したもの可能性が高いが、その文字の内容については判読できない<sup>12)</sup>。縁の形状については、内区・外区ともに縁が深くなり、縁より内側はわずかに隆起する。

縱板と支木に同様の焼印が付与されていたことは、支木と同じ規格となる横棟も含めて、材の生産場所が同じであったことを示唆する。

#### e.まとめ

紙幅の関係で簡略な記述にとどまったものの、井戸枠材の圖化を今回試みることによって、從来明らかにされなかった奈良・平安時代の都城関係の井戸枠材とは異なる、中世でかつ地方における井戸枠材の規格や焼印に関する基礎資料を提示することができた。今後は、鹿田遺跡における他の井戸についても検討を拡大し、個々の井戸における材の生産・流通、井戸の構築過程を復元していきたい。それによって、古代・中世の木材生産・流通・使用に関する検討を深めていきたい。

(光本 順)

註（1）b型の下端部は本米、W13のような左右の抉りの形状を呈していた可能性がある。b型の木口は、削り製き前に上段から下段にかけて斜めに切削される。

（2）焼印については本学文学部教授の久野修義氏に観察していただき、貴重なご教示をいただいた。

#### 引用文献

岡田文男2002「長岡京の井戸の側板に用いられた古代の傳について」『田辺順三先生古稀記念論文集』 pp.411-422

岡田文男2004「林業一科の生産と流通」『列島の古代史 ひと・もの・こと 2』暮らしと生業 岩波書店 pp.303-320

鏡方正樹2003『井戸の考古学』同成社

松本武彦・山本悦世編1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内道路発掘調査報告 第6輯 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

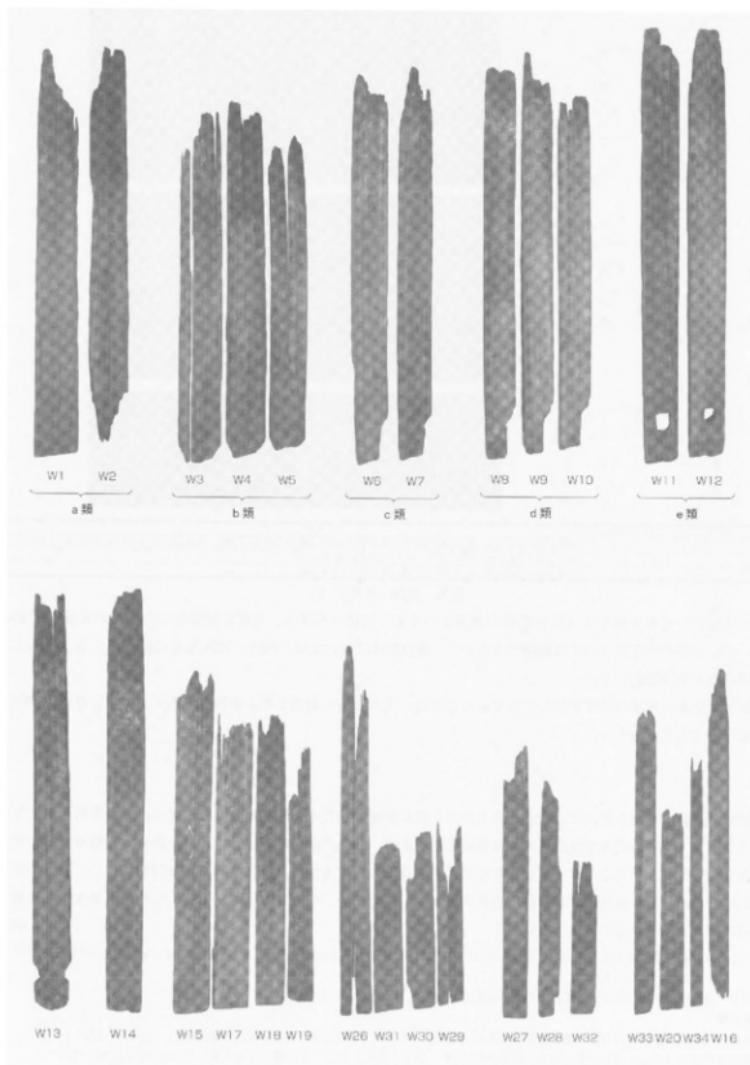
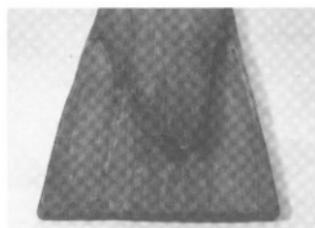


図31 麦板 (縮尺 1/20)



1. a類接合状況（全体）



2. a類接合状況（木口）



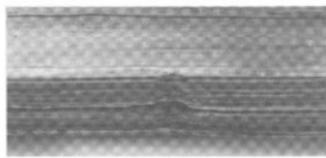
3. b類接合状況（全体）



4. b類接合状況（木口）



5. b類木口加工



6. b類長側面



7. c類接合状況（全体）



9. c類接合状況（加工部分）



8. c類接合状況（木口）



10. c類下端部

図32 檻板詳細①

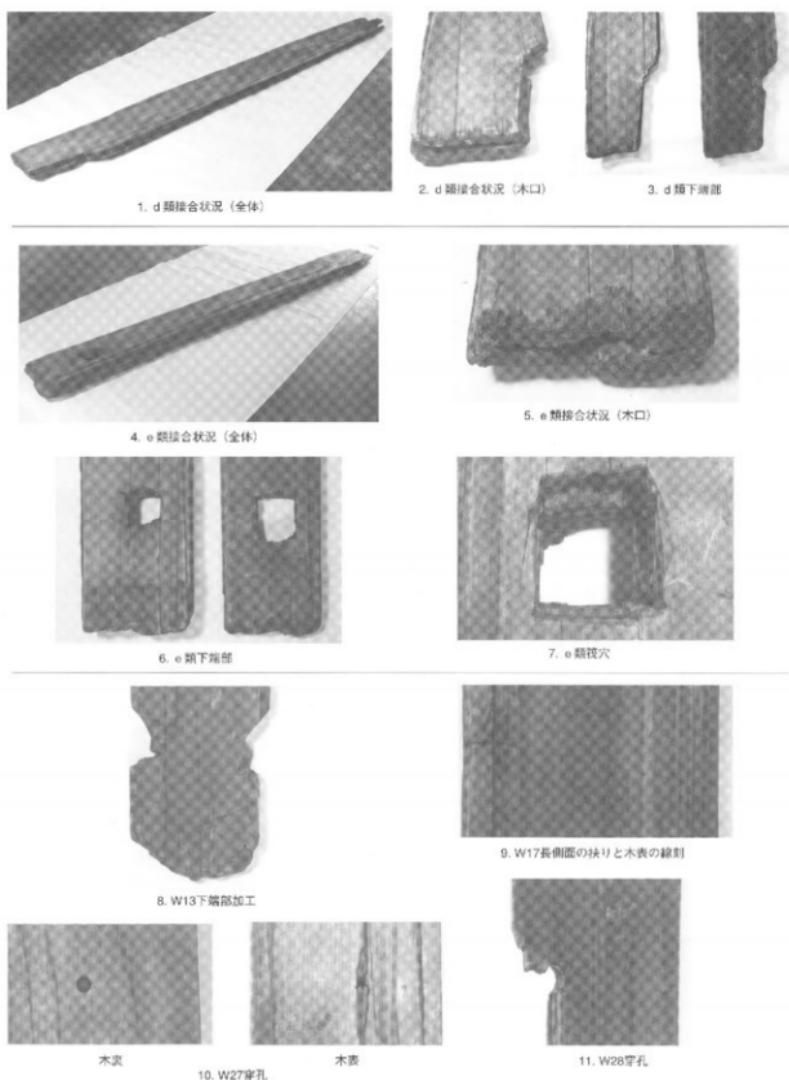


図33 緩板詳細②

## 第3章 その他地区の調査

### 第1節 試掘・確認調査の概要

#### 1. 三朝宿泊所増築および高圧線・電話線切替工事に伴う試掘・確認調査

##### a. 調査の成果

三朝地区におけるこれまでの調査には、周辺の分布調査<sup>①</sup>（1989年実施）、福呂遺跡第1・2次調査<sup>②</sup>（1997年実施）がある。発掘調査の結果、縄文時代・弥生時代・中世の遺構・遺物を豊富に確認していた。

今回の調査地点は福呂遺跡の範囲からは外れており、遺構・遺物や遺物包含層を確認するにはいたらなかったが、三朝地区の東端・南端の状況を一部明らかにすることができた。三朝宿泊所地点では、調査成果に周辺の地形を勘案すると、北東から南西に緩く傾斜して下がり、尾根の東側を通る谷状地へと連なる地形になると考えられる。高圧線・電話線切替工事地点は、三朝地区の南側を西流する三徳川の河岸段丘にあたり、河床とみられる礫層を確認した。なお、1997年の立会では、礫層の直上に近世の包含層が堆積していることを確認しており、今回の調査で確認した土層についても、近世以降の堆積層であると考えられる。

今回と1997年の立会調査の成果を合わせて考えるならば、三朝地区では病院より南の河岸段丘面上には、遺跡は存在しない公算が大きいと考えられる。今後はそれ以外の範囲での遺跡の有無を明らかにしていく必要がある。特に北からのびる尾根の裾部や福呂遺跡の位置する最も高い段丘面については注意が必要であろう。

##### b. 調査の経過

###### ① 調査に至る経緯

2004年になって地区東端の三朝宿泊所の増築計画が具体化した。また、地区の南を東西に通る県道でバス停の引き込みが計画され、それにともなって敷地内の高圧線・電話線を切替える必要が生じた。これらの工事計画地点と、福呂遺跡との位置関係については、三朝宿泊所地点が福呂遺跡の位置する段丘面の東に谷を抉んだ尾根の東側裾部に、高圧線・電話線切替工事地点は、福呂遺跡の南の段丘面を一段下がった段丘面に位置する（図38）。

工事予定地は同遺跡から離れた位置になるが、遺跡の有無を確認するために、工事対象地域内において試掘・確認調査を行うこととした。（図38）。工事予定地は同遺跡から離れた位置になるが、遺跡の有無を確認するために、工事対象地域内において試掘・確認調査を行うこととした。

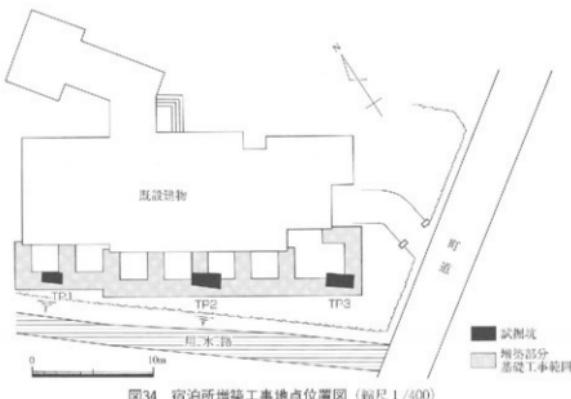


図34 宿泊所増築工事地点位置図 (縮尺1/400)

## ② 調査の経過

試掘・確認調査は2004年9月21・22日の両日で実施した。三朝宿泊所の増築範囲は東西約28.5m、南北約3.6～5.6mであり、東から西に下がる地形に沿って設計されていた。増築範囲の東西端と中間の位置に3ヶ所の試掘坑を設定し西からTP1、TP2、TP3とした。なお、工事予定地内には既設の雨水排水や電気配線が通り、擾乱を受けていることが予測されたため、それらを避けて試掘坑を設定した。また、高圧線・電話線切替工事地点ではハンドホール新設予定地点に試掘坑を設定した。いずれも重機によって掘削し、砂礫層を確認したところで掘削を終了したが、遺構・遺物・遺物包含層を確認するに至らず、記録をとて調査を終了した。

### c. 調査の概要

#### ① 三朝宿泊所増築工事地点

調査地点は段階状に造成されており、現状での地表の標高は、TP1が53.9m、TP2が54.4m、TP3が54.7mである。掘削の結果、遺構・遺物・遺物包含層は確認されなかたため、層序と地形について記しておく。

**層序** 土層図は、設定した3ヶ所の試掘坑の北壁断面を並べたものである。3ヶ所の試掘坑にみられた堆積層のそれぞれの対応関係は上層番号によって示している。掘削深度は約1.1～1.3mで、層序は次のとおりである。

1層は造成土である。2層は淡黒灰色砂質土で、1～4cm大の礫を多く含む。3層は暗灰茶褐色砂質土で、1cm大の礫が多い。4層は淡黄褐色砂質土で、1cm未満の礫を多く含み、白色微砂を帯状に含んでいる。土石流や洪水による堆積層と考えられる。5層は淡黒褐色砂質土で、礫は少なく、炭粒を含んでいる。6層は黄褐色砂で、マサ土である。7層は灰黄色疊混じり砂である。いずれの上層も今回初めて確認されたもので、出土遺物はなく時期は不明である。

**地形** 7層上面は東側のTP3では標高53.5mであるが、西側のTP1では標高52.8mである。7層上面では東から西に下がる地形を想定することが可能である。上層もこの地形に規制されて同様の地形を反映している。なお、調査地点周辺についても踏査したところ、調査地の東は北東から南西に緩く下がる傾斜を有していることを確認した。

#### ② 高圧線・電話線切替工事地点

試掘坑は、周囲には大型の擾乱もあり、上端は約3×3mとなったが、造成土以下は1×1.5mの平面規模となつた。

**層序** 掘削深度は約1mで、層序は次のとおりである。1層は造成土である。2層は暗褐色～暗茶褐色を呈する砂質土で旧表土と考えられる。3層は茶褐色～灰褐色砂質土である。砂粒は細かく礫は少ない。4層は明黄褐色粗砂である。鉄分の沈着が著しい。河道堆積物であると考える。5層は灰褐色粗砂～疊層である。段丘疊層

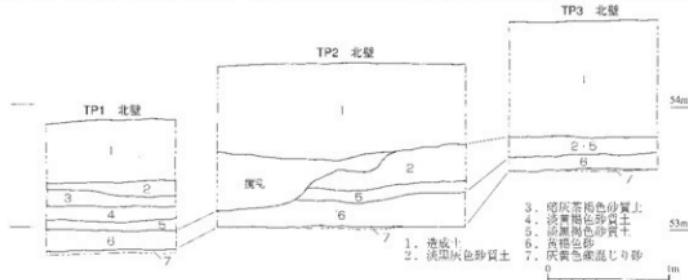


図35 審査所増築工事地点土層柱状図 (縮尺1/40)

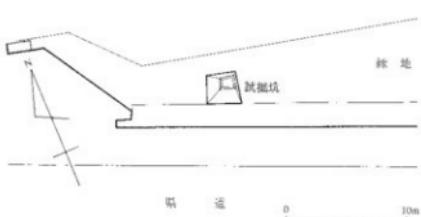


図36 高圧線・電話線切替工事地点位置図（縮尺1/400）

～河床跡と考えられる。

**結果** 挖削の結果、遺構・遺物・遺物包含層は確認されなかった。最下層で確認した段丘疊層（5層）については、今回と同一の段丘面を掘削した1997年の立会の際にも認められており、この段丘面は基本的には同じ状況を示すものと考えられる。2～4層の堆積時期については、1997年の立会調査成果から、近世以降と考えられる。（野崎貴博）

註（1）石坂後郎1990「分布調査」『岡山大学境内道路調査報告年報』7、p.23、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（2）野崎貴博2000「福呂造跡1号、岡山大学境内道路免振調査報告書第15冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

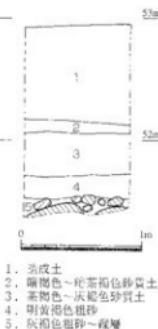
図37 高圧線・電話線切替工事地点  
土層柱状図（縮尺1/400）

図38 2004年度の調査地点【3】—三朝地区—（縮尺1/2500）

表7 2004年度三朝地区調査一覧

番号	地盤	調査地区	所属	調査名称	調査期間	範囲(深さ) (CL.m)	内 容
1	試掘 確認 調査	二羽	岡	三朝町山田堆積工事	9.21	1.3	3箇所、いずれの箇所でも道路包含層は未確認
2	*	*	*	高圧線・電話線切替 工事	9.22	1.0	造成土以下、五差し内の土層3枚と表層の細砂を確認。 橋・透かなし

## 第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理

#### 1. 調査資料の整理

2004年度の調査資料の整理は鹿島遺跡第13次・14次調査、津島岡人遺跡第26・28次調査の整理作業を中心に行い、また報告書作成作業に関しては『津島岡大遺跡15』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊)・『津島岡大遺跡16』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊)の二冊を刊行した。

『津島岡大遺跡15』は事務局本部棟新営に伴う第26次調査の成果報告書である。2000年度に実施した発掘調査であり、縄文時代中期～近世における土地利用形態の推移を明らかにすることができた。また古墳時代後期から中世にかけての「欄列」・溝状遺構に着目した考察を掲載した。

『津島岡人遺跡16』は環境理学部校舎新営に伴う、第17次(1996年度調査)・22次(1998～1999年度調査)の二期にわたる発掘調査の報告書である。津島岡大遺跡の中でも、特に縄文時代において最も遺構密度の高い地点の調査報告である。第17次調査地点の大半を占めるようにひろがる微高地での集落の実態とその北側の斜面部での状況を明らかにした。また縄文後期を中心とする遺物は、土器・石器とともに豊富であり、遺物の面からは、土器の型式的検討・石器の特徴、縄文時代の石製収穫具に関する考察を、また遺構の面からは、条状の溝に関する考察を掲載した。

自然科学分析では、報告書作成にも関わるものとして、放射性炭素年代測定、樹種同定を行った。それぞれの分析結果については次項で報告している。

(岩崎)

#### 2. 調査資料の分析

##### (1) 放射性炭素年代測定

本年度は表8に挙げたように、14件の試料の放射性炭素年代測定を行っている。1～3は津島岡人遺跡第17次調査土坑9及び竪穴住居址1戸1の試料であり、詳細な結果は報告書に掲載している。4～10は、2003年度に国立歴史民俗博物館に資料提供をおこなった試料7点である。その内訳は、土器付着炭化物4点(津島岡大遺跡第3・5・15次調査)と堅果類3点(津島岡大遺跡第3・15次調査)である。11～14は前述の4～7の試料について古環境研究所で分析を行ったものである。

表8 放射線炭素年代測定資料一覧表

取扱所	遺 留	対象資料	分析法	分析機関	備考
1	上地原	炭化物	AMS	(株) 古環境研究所 (Beta 社)	『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊に報告
2	津島岡大遺跡17次調査	土坑9 土坑9	AMS		
3	土坑9	炭化物	AMS		
4	津島岡人第3次調査	土器付着炭化物	AMS		
5	津島岡大遺跡5次調査	SPI 1	AMS		
6	津島岡大遺跡15次調査	堅果類 SPI 3	AMS		
7	津島岡大遺跡15次調査	堅果類 SPI 3	AMS		
8	津島岡大遺跡3次調査	堅果類 SPI 1	AMS		
9	津島岡大遺跡3次調査	堅果類 SPI 13	AMS		
10	津島岡大遺跡3次調査	堅果類 SPI 19	AMS		
11	津島岡大遺跡3次調査	13B	AMS		
12	津島岡人第5次調査	SPI	AMS		
13	津島岡大遺跡15次調査	堅果類 SPI 13	AMS		
14	津島岡人第5次調査	堅果類	AMS		
				(株) 古環境研究所 (Beta 社)	平成13～15年度研費基盤研究A 「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」 (研究代表者：今村泰雄)

## (2) 樹種同定

本年度の整理作業に伴い、津島岡大第22・26次調査および鹿田遺跡第7次調査の木製品・流木について、森林総合研究所、能城修一氏に樹種同定を依頼し、有益な教示を得た。主な内容は表9の通りであり、詳細な結果については、正式報告書を参照されたい。

表9 樹種同定一覧

調査地点	分析機関	点数	出土品上場場	報告
津島岡大第22次調査	森林総合研究所 岩城修一	55	古代窓	『津島岡大遺跡16』
津島岡大第26次調査	森林総合研究所 岩城修一	28	近世窓	『津島岡大遺跡15』
鹿田遺跡第7次調査	森林総合研究所 岩城修一	27	中世・古墳窓	『鹿田遺跡5』(断片)
鹿田遺跡第13次調査	(株) 古田生物研究所	2	中世窓	
鹿田遺跡第14次調査	(株) 古田生物研究所	3	中世窓	

## 3. 調査資料の保存処理

### (1) 木製品のPEG保存処理作業

2002年11月より行ってきた第6期保存処理作業を継続して実施した。対象資料は津島岡大遺跡第19次・22次調査および鹿田遺跡第7次調査の出土品である。昨年度2月に濃度95%に達した後、蓋を開けて100%に上昇させていたる途中であった。今年度当初からも引き続き処理を継続していたが、8月4日に引き上げを行い、この日をもって第6回処理を終了した。

処理槽より引き上げた木器については、洗浄、乾燥、ラベル付けを行った後、収納した。なお、引き上げ後の一連の作業を岡山大学の博物館実習に取り入れ、岡山大学文学部の実習生の協力を得た。

表10 これまでの保存処理工程

周	期間	施設名	施設内別	施設外別
第1期	1992年2月～1993年11月	鹿田第1次(近畿学院附外名古屋寮)・第2次(NAIC-C)至		1年ヶ月
第2期	1994年6月～1996年8月	鹿田第3次(近畿学院附大寺遺跡会本体)・第4次(近畿学院附大寺松原奈良遺跡)・第5次(近畿学院附大寺遺跡)		2年ヶ月
第3期	1998年12月～1999年6月	鹿田第3次(近畿学院附大寺遺跡会本体)・第6次(生物心川下字外様)		2年ヶ月
第4期	1999年7月～2000年12月	鹿田遺跡第3・4次・津山人の形第3次		1年ヶ月
第5期	2001年1月～2002年3月	鹿田遺跡第3・4次・津山人の形第3次		1年ヶ月
第6期	2002年11月～2004年6月	鹿田第7次(近畿学院附外名古屋寮)・鹿田第19次(コラボレーションセンター)・第22次(鹿田遺跡下字部屋第3期)		1年10ヶ月

### (2) 外部委託による木製品の保存処理

本センターでは構内遺跡出土木製品について、多くはセンター内での保存処理を実施しているが、製品の素材や状態に依り、外部委託による保存処理を実施している。

本年度は下記の3件の遺物について、外部委託による木製品の保存処理を実施した。対象資料は下表の通りである。なお資料4の漆椀については、あわせて漆膜分析も行った。

表12 外部委託による保存処理遺物一覧

番号	遺物	施設	施設上場	時間	处理方法	處理機関
1	漆椀	東山第9次	井戸	中世	アクリル樹脂法	(四) 吉田寺文化復元研究会科学センター
2	木舟	東山第14次	井戸	中世	高麗アルコール含浸	(四) 吉田寺生物研究所
3	櫛	東山第14次	井戸	中世	高麗アルコール含浸	(四) 吉田寺生物研究所
4	漆椀	東山第14次	ため池底洗清	古墳	高麗アルコール含浸	(四) 吉田寺生物研究所
5	往物	東山第13次	井戸	中世	高麗アルコール含浸	(四) 吉田寺生物研究所
6	往物	東山第13次	井戸	中世	高麗アルコール含浸	(四) 吉田寺生物研究所

## 第2節 調査成果の公開・活用

2004年度は、津島キャンパスにおいてキャンパス発掘成果展を開催した。また大学生の博物館実習や中学生の職場体験受け入れのほか、総合学習時間を利用した小学生の見学に対する説明など、学校教育現場との連携も積極的に行なった。

### 1. 公開・展示

#### (1) 第8回キャンバス発掘成果展

**概要:** 津島キャンバスでは2000年度以降、毎年秋に定期的に展示会を開催しており、今年度は8回目にあたる。第8回のテーマは「土・技・心」との副題を設定し、土器の観察・製作技法の紹介をメインとした展示と、「分銅形土製品」を粘土で製作する体験コーナー等を設けた。開催期間は10月26日～31日までの6日間である。

会場は例年通り、埋蔵文化財調査研究センター収蔵庫2階展示室を使用した。見学者数は延べ253名であった。内容：『土・技・心』というテーマのもと、主となる展示では土器の時代による形・技法等の移り変わりを、縄文時代～中世にいたる煮沸具の変遷、弥生時代の高杯の変遷を通じて、観察したり、実際に触れることで体感してもらうことを目指した。特別展示としては弥生時代の「顔」の表現を、岡山大学考古学研究室収蔵の人形土製品を中心に、構内で出土した分銅形土製品・人面線刻土器の展示によって示した。

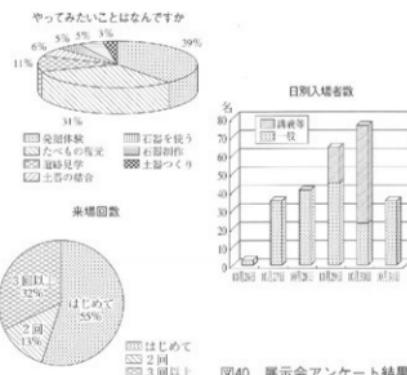
恒例となっている体験コーナーでは、展示品と関連して「分銅形土製品」を作るコーナー、縄文土器の文様つけコーナー（貝殻・繩・ヘラ等）、ロクロ切り離しコーナーを設定した。様々な文様の付け方や、成形技法を実際にやってみることで、展示品を観察する際にもまた異なる視点が持てるという相乗効果もあった。

見学者253名、アンケート回収は88枚であり、回収率は34%であった。来場回数をみると、55%にあたる48名が初めての見学者であり、2回、3回以上というリピーターの割合は45%を占めている。リピーターの割合は年々着実に増加の傾向にある。また日別の来場者数では、開催初日にメディアで紹介されたことが功を奏し、水曜・木曜といったこれまでには来場者数の伸びない平日の見学者増につながったものと考えられる。

最も印象に残ったものとしては、分銅形土製品作成を挙げた方が25名と最も多く、縄文土器の文様付け（8名）、土器に直接触れたこと（8名）が続いた。その他に「体験」、「土器の変化」、「土層の剥ぎ取り」、「土塚墓」といった項目が挙がっており、今回の展示の目的に沿う結果が得られた。



図39 津島キャンバス展示会風景



た。また、直接出土遺物に触れることや、各種の体験への関心の高さを実感する結果であった。このことは、「やってみたいことはなんですか」との問い合わせに対する回答のうち、発掘体験（39%）・石器を使う（5%）・石器作成（5%）・土器つくり（3%）というように体験に関係するもので半分を占めていることからも窺える。

課題：津島キャンパスでの展示会開催も2000年度から継続して5回目となり、毎年確実にリピーターを獲得し、好評を得ている。またアンケートの結果をみても強調したい部分に対する反応がよく、意図を伝えるという点は一定の成果があったと思われる。その一方、今回は目の不自由な方の見学もあり、見学施設としての安全性や利便性について考える良い機会ともなった。いわゆるバリアフリー対策として階段の傾斜や通路の通りやすさ等に配慮することも今後の検討課題である。

成果：今回は初めて目の不自由な方からの見学希望があり、盲導犬同伴で見学された。本センター展示室ではほとんどすべての展示品に直に触れることができ、何よりもその点が、目の不自由な方にも体感していただけたことで、展示する側もよい刺激を受けられた。

このような『実物に触れる展示』は、見学者に対して、予想以上に強い印象を与え、歴史を体感することに繋がる。しかし、通常の博物館等では様々な制約もあり、本センターのような小規模展示施設であるからこそ、実現できる部分も多い。このことが、本センターの展示会の大きな特色のひとつとなっている。

今後も展示方法・内容について意欲的な検討を加えて実践していくとともに、業務全体の中でのバランスにも配慮した取り組みとなるよう、公開・啓発活動の主幹として展示会を継続していきたい。

## 2. 資料・施設等の利活用

### (1) 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

#### ① 博物館実習：（8/3～8/10）

岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業（博物館実習）の受け入れを行った。期間は8月3日から10日の中の6日間である。全体を3グループに分け、それぞれ2日間を受講日程とした。昨年までは、受講期間中に発掘調査を実施していたことから、発掘調査参加も組み入れた日程としていたが、本年度は調査がなく、本センター施設内で、埋蔵文化財が出土してから展示されるまでの一連の作業工程を組み込んだ体験を実施することとした。

一日目にセンター展示室を利用して、構内遺跡の概要説明、センターの業務内容説明を行った後、出土遺物の注記作業を実施した。二日目は木製品の保存処理工程の一部を体験するということで、処理済みの木器引き上げ、ラベル付け、収納作業のほか、処理前の木器の計測等の作業を実施した。

#### ② 中学生の職場体験：竜操中学（11/16～18）、高松中学（11/19）

岡山市内の公立中学校2校より、職場体験の生徒各3名、計6名の受け入れを実施した。昨年度も受け入れを実施した岡山市立竜操中学校と岡山市立高松中学校の2校である。期間は竜操中学校が11月16日～18日の三日間、高松中学校が11月19日1日であった。

職場体験の内容は、遺物の注記・接合作業体験、種子の顕微鏡写真撮影、蔵書整理、清掃のほか、図版・写真的カバーかけ



図41 職場体験（高松中学校）



図42 職場体験（竜操中学校）

といった報告書作成に関わる諸作業である。

今年度は発掘調査のない時期の、博物館実習・職場体験の受け入れとなった。そのためいずれの取り組みでも、発掘調査後の埋蔵文化財の取り扱いが中心となる作業となった。木製品の取り扱いでは、特に木構内遺跡に特徴的な作業を経験するという意味で貴重な体験ともなったといえる。

③ 小学生総合学習：津島小6年生

小学校の総合的学習の時間を利用して、身近な遺跡を調べるために津島小6年生が当センターを訪れた。常設展示室の展示説明を中心に、職員が説明を行い、児童からの質問に答えた。

(2) 調査・研究への支援

① 資料見学・提供

- ・鉢甲（鹿田1次調査）：1件
- ・猿形木製品（鹿田7次調査）：1件
- ・縄文早期土器（福呂遺跡第1次調査）：1件
- ・中世土器（鹿田遺跡1・2・5・6次調査）：1件（胎土分析用）
- ・弥生時代中期土器（鹿田遺跡第1次調査）：1件
- ・石斧（津島岡大遺跡）：1件

② 図書の外部貸し出し：18件（岡山大学文学部学生他）

(3) 資料の貸し出し

① 出版物の資料提供

- ・鹿田遺跡現地説明会資料（2003年10月18日実施）「月刊文化財発掘出土情報」2004年7月号掲載
  - ・津島岡大遺跡第3・21次調査石窓下石器写真2点「古代を考える 吉備」吉川弘文館
- ② 他機関の展示・公開支援
- ・岡山県立博物館 「津々浦々をめぐる考古学」鹿田遺跡出土資料（7／12～11／25）及び図録掲載写真提供

### 第3節 2004年度調査研究員の個別研究活動

#### 1. 科学研究費採択状況

岩崎志保：平成16年度科学研究費（若手研究B）「東周時代墓葬の比較考古学的研究」：研究代表者

光本 順：平成16年度科学研究費（若手研究B）「弥生時代から古墳時代における刀剣副葬に関する集成的研究」：研究代表者

#### 2. 論文・資料報告

山本悦世：山本悦世・杉山一雄（共著）「岡山原城」「中津式の成立と展開」集成資料集 中四国陶文土器研究会  
「集落からみた山地域と沿岸域」日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集 日本考古学協会  
2004年度広島大会実行委員会

- 「備前における9・10世紀の様相」第4回山陰中世土器検討会資料集『平安時代前期の土器様相』山陰中世土器検討会
- 「絵文時代後期の集落構造とその推移」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 岩崎志保：『津島岡大遺跡16』（編集）  
「条里の溝について」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 「鹿山遺跡第14次調査出土木簡について」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター…  
「岡山・鹿田遺跡」「木簡研究」第26号
- 野崎貴博：『津島岡大遺跡第17・22次調査出土繩文土器の型式学的検討』『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 光本 順：『日本古代の身体表現に関する考古学的研究』（岡山大学大学院文化科学研究科提出博士論文）  
『近現代考古学の射程』六一書房（共著、執筆箇所「身体の近代と考古学」）  
『津島岡大遺跡15』（編集）  
「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 「クイア考古学の展開」「ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究」「ジェンダーの多様性・普遍性・可変性の分析および独自のジェンダー教育プログラムの立案を含む学際的研究」グレード
- 高田貴太：「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」「古墳出土金工製品の日韓比較研究」新大阪府文化財センター

### 3. 研究発表等

- 山本悦世：津島やよい講座『弥生時代のくらしを考える』（岡山県教育委員会主催）コーディネーター（10月2日）  
岡山大学文学部公開講座 講師「繩文から弥生へ～津島岡大遺跡に刻まれた縄文人の選択～」（10月23日）  
「集落からみた山地城と沿岸城」日本考古学協会2004年広島大会（11月6・7日）  
「備前における9・10世紀の様相」山陰中世土器検討会（1月22・23日）
- 光本 順：New direction in the archaeology of human body in Japan and its application to the social body in the Kofun Period, The Society for East Asian Archaeology, Chungnam National University, KOREA (6月17日)
- 高田貴太：「朝鮮半島大加耶地域の対倭交渉経路」考古学研究会岡山例会発表（7月）  
「垂飾付耳飾からみた朝鮮半島の対倭交渉」近畿飛鳥博物館シンポジウム（3月6日）

### 4. 資料収集・実態調査

- 山本悦世：中世土器・猿形木製品に関する資料調査（大分県教育庁文化課）
- 岩崎志保：東周～漢代青銅器・墓葬に拘する資料調査（出光美術館・国立国際美術館ほか）
- 野崎貴博：犬飼山古墳出土柱甲の調査（東京国立博物館）
- 光本 順：刀剣・絵画資料・人物埴輪に関する資料調査（滋賀県、福岡県、群馬県）  
弥生遺跡の実態調査（長崎県）
- 高田貴太：古墳時代金工品の資料調査（奈良県、大阪府、岐阜県）

## 第5章 2004年度における調査・研究のまとめ

**調査** 2004年度に実施した発掘調査は鹿田遺跡第16次調査1件である。鹿田キャンパスの北東部の立体駐車場新営に伴う調査であり、エレベーター・ピット部分のごく小規模な範囲であったが、これに伴う試掘調査・立会調査の成果も併せ、鹿田地区の北部の土地利用状況等に関して貴重な知見を得ることができた。津島地区においては、昨年度のような比較的規模の大きい立会調査はなかったものの、保健管理センター東側での立会調査（調査6）に示されるように、小規模なものであっても既調査部分の状況との比較検討により、有意義な成果を得ることができ、またこれまでの成果を補足するデータの蓄積もできた。また今年度は三胡地区においても試掘調査を実施した。同地区での調査の実施は1997年来である。今回の調査地点ではいずれも遺構・遺物包含層は確認されなかったが、同地区における上層堆積状況の確認及び旧地形の復元に際して新たな知見を得た。

**研究** 今年度は『津島岡大遺跡15』と『津島岡大遺跡16』の二回の発掘調査報告書を刊行した。前者は事務局本部棟の新営に伴う発掘調査（第26次調査地点）、後者は環境理工学部棟の新営工事に伴う発掘調査（第17・22次調査地点）の成果である。まず、『津島岡大遺跡15』では縄文時代中期から近代に至る各時期の遺構・遺物が報告され、中でも縄文時代中期の遺構・遺物は津島岡大遺跡の中でも最初期の資料として注目される。隣接する第27次調査地点の成果とも併せ、当該時期の土地利用の実態をつかむ成果を得ることができた。また考察では、古代～中世における柵列遺構・溝状遺構の解明に向けた検討がなされた。『津島岡大遺跡16』では、縄文時代における津島岡大遺跡の中心的な活動域の状況、弥生時代以降の水田畦畔・川水路等の耕作域の状況、さらに古代以降近代までの条里に関する溝の状況等を報告した。特に縄文時代後期の遺構・遺物の内容は質・量とともに既調査地点のうちで際だって密度の高いものであり、堅穴住居・土坑・溝から構成される集落のあり方や周辺の土地利用状態についての貴重な成果を得ることができた。考察では、遺物の分析として縄文時代後期土器の型式学的検討、石器の出土状況と打製石器の機能に関する考察、遺構の点からは、津島地区の北側を東西に走る条里の溝についての分析・検討がなされた。

そのほかにこれまでに構内遺跡に関して実施してきた自然科学分析について、これまでの成果をまとめて本紀要に掲載した。具体的には年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定・種子同定の結果である。の中でも、津島岡大遺跡の放射性炭素年代測定の成果をとりあげ、掲載している。同じく本紀要では鹿田遺跡の研究として、第5次調査井戸6の井戸枠材についての分析をとりあげた。当該井戸は既に正式報告済みのものであるが、2005年度の展示会の際に保存処理を施した部材を確認したところ、いくつかの点で新たな知見が得られた。このように報告書作成だけでなく、保存処理・展示公開等の取り組みの中で得られた新たな情報や知見について様々な視点から検討していくよう、努力していくたい。

**展示・公開** 第8回岡山大学キャンパス発掘成果展の開催のはか、博物館実習・職場体験の受け入れといった教育現場との連携を継続して行った。展示会では着実にリビーターが増加している。特に体験型展示や実際の遺物に触れる展示方法が、好評であることは毎回実感として受けとめられるが、一方で開催場所のわりにくさ等、広報活動や、よりわかりやすい展示方法の摸索等、改善すべき点も多く、今後も改善を加えながら、様々な形での展示・公開活動に取り組んでいきたい。

2004年度は国立大学法人化して最初の年にあたり、本センターも法人理事がセンター長を兼務し、副センター長職を設けて新たな体制での運営がスタートした。上記の活動のほか、特に安全衛生の観点からの施設・設備の点検・整備にも力を入れた。設備面の充実に努力するとともに、専任職員の意識の向上、調査・研究面での内的な質の向上にも尽力していきたい。

（岩崎）

## 付 編

### 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

#### 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

##### (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日〕  
〔岡大規程第93号〕

###### (趣旨)

第1条 この規程は、岡立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

###### (目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に關すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に關すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に關すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

###### (自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

###### (教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

###### (センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、岡立大学法人岡山大学役員規則（平成16年两大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。

###### (副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の義務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

###### (調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

###### (調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。  
(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に關し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(規則)

第12条 この規程に定めるもののはか、センターに關し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

## (2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

〔平成16年4月1日〕  
〔学長裁定〕

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長

三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若十名

四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者一人

五 センターの調査研究室長

六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらくじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

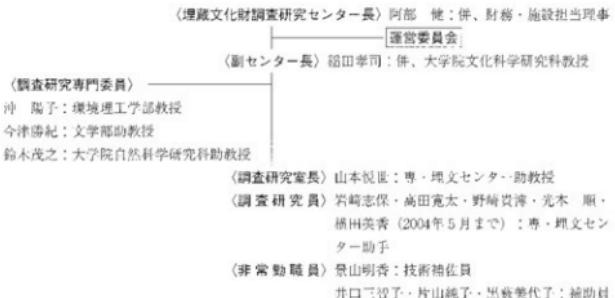
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

## 2. 2004年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

### (1) センター組織一覧



### (2) 運営委員会

#### 【委員】

阿部 健 財務・施設担当理事（センター長）	柴山次夫 人学院自然科学研究科教授
稲田孝司 人学院文化科学研究科教授（副センター長）	沖 陽子 環境理工学部教授（調査研究専門委員）
新納 泉 文学部助教授	山本悦世 埋蔵文化財調査研究センター助教授（調査研究室長）
久野修義 文学部教授	斎藤健次 施設企画部長
大塚愛一 大学院医歯学総合研究科教授	

#### 【2004年度協議・決定事項】

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 第55回 2004年6月7日  | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 平成15年度決算について</li> <li>• 平成16年度事業計画について</li> <li>• 平成16年度予算について</li> <li>• その他</li> </ul>                         |
| 第56回 2005年1月11日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 平成17年度予算について</li> <li>• 平成16年度発掘調査の報告について</li> <li>• 平成17年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について</li> <li>• 助手の後任について</li> </ul> |

## 3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかる安全管理事項

平成12年5月15日  
埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部門長

#### T. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

## II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
  - 1) 安全で機能的な服装にする。
  - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
  - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
  - 4) グライダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
  - 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 掘削
  - 1) のり面の角度  
造成土：通常の土壌の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は十止め等の手当をおこなう。
  - 堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。  
発掘機の壁面を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、600mm以上とする。
  - 2) のり面の保護  
のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
  - 3) 深い溝（深さ1.5m以上の造渠）  
造渠掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。  
なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
  - 1) 作業中には安全帯を着用する。
  - 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
  - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作
  - (ベルトコンベアー・ポンプ等)
    - 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
    - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が監督・稼働させる。
    - 3) ベルトコンベアーを盡ねたつなぎ日の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
    - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
    - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。  
(重機関係)
      - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
      - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
      - 3) 積荷中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
  5. 健康管理
    - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

## III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督員の指示を受ける。
- 2) 調査機の状況や造渠などの特殊性・重要性等により、上記の2の1) ~ 3) どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

## 付 表

付表 I 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	地 区 名	種類	所轄	調査名 称	調査社 会	調査面積 (ha)	文獻	備 考
1980	東 田	立会	美	同前	岡山市教育委員会	8		
	津島南	BD06	文	荷物貯蔵庫新設	*			
	津島北		文支	合併整理構築	*			
	津島北		文支組	合併整理構築	*			
	津島東	BD09, BC09 -11		新種登録(片持傳取付)	*			
	津島南	BD-1BZ04- 07		漢上新枝垣改修(和生算説)	*			
1981	西 田		監所	高気圧治療水新設	*			
	*		*	動物実験施設新設	岡山県教育委員会			大学が教育委員への接続構造の必要をせずに何れ、その後、西田山、岡山6m教委が残存する等の調査結果
	*		*	珊瑚解剖作業部活用改修	岡山市教育委員会			
	*		*	運動場改修	*			
	津 乃	AV06-10, AW05-14, AX08, BX07, EH10	試験	排水新設整備	*			津島 A/W14区で既存時代立会曾有河誌、協定→津島岡大連携事業、次調査へ
	津島北	AW14	試験	排水工事槽(NE-1)引抜	岡山大学	24.0	3	小橋法日連携:津島岡大第1次調査
	津島南		試験	学	武道館新築	岡山市教育委員会	2.3	
1982	津島北	AY15-16	試験	校舎新築	*			
	東 田	*	風	地形学新築	岡山県教育委員会	8.0		
	*		区分	外来客接待新設	岡山市教育委員会	4.0	2	
	*		立会	動物実験施設新設	岡山市教育委員会			
	東 田	AE-AN22- AE22-26	曲	電気ケーブル敷設	岡山市教育委員会 岡山大学農芸文化系資源室			

文献

1. 木村真一 1983 「岡山大学近郊福原裏病院動物芸術教育工事」に「往々拂衣神社」[津島農業文化財調査] 13 岡山県教育委員会  
 2. 木村 真 1983 「岡山大学近郊福原裏病院動物芸術教育工事」に「拂衣神社」[津島農業文化財調査] 13 岡山県教育委員会  
 3. 古川秀敏 1985 「岡山大学近郊福原裏(AN-W14)」の発掘調査」岡山市教育委員会遺跡発掘委員会研究第1号 岡山大学農芸文化財調査室

付表 2 2003年度以前の構内主要調査(1983~2003年度)

* 凡例・総合各号:調査の地区別別記、番号:〔合計数は括弧内に記載〕
並合算まで、付番に記載する番号
①中井土層以下を確認した段階で明確な構造・遺物を確認した標記
発掘調査には参考に○印をしてある。
指認箇所には参考に△印をしてある。
番号:年度別総合番号

付表 2-1(I) 発掘調査

〔津島地区:津島岡大連携〕

総合 番号	年度	番号	調査地名	所轄	調査名 称	調査社 会	面積 (ha)	概 要	文獻
* 1	1982	-	AW14	文	小橋法実験(岡山人四人連合築1次 完成):拂衣神社集中権(NE-1)見出	8.10.28-11.24	24	弥生・古墳時代中期・古代漆	3
①	1983	11	BD14-18, BF17-18, DG14, MH14-15	曲	津島北・大連携第2次調査 :拂衣神社	84.1.9-3.5	265	弥生時代早・中期・霜鳥集落	4
②	1983	12	DH13	曲	津島南・大連携第2次調査 :拂衣神社	84.1.9-3.5	276	弥生時代早・中期・霜鳥集落(津 島)	4
③	1986	2	AV00, AW00-01	学	津島南・大連携第3次調査 :拂衣神社	12.1-87.6.18、 8.24-9.5	1650	绳文時代後期-乳母時代早期の竹筒火 と灰壙および墓葬、弥生時代の前段- 近世の水田・溝、古代の水田開墾	19
④	1986	3	BF-BG09	学	津島南・大連携第4次調査 :拂衣神社	87.1.19-1.22	70	弥生時代前段の溝、中世河岸	6

## 付 墓

地名 番号	年度	番号	墓内埋葬	所持	調査名 称	調査期間	山積 (m <sup>3</sup> )	概 内 容	文 献
○○	1988	1	AY06~08, AZ06~07	大塗	平島阿大遺跡第6次調査 ：古墳文字研究会・発掘	6.27~89.5.19	1507	縄文時代後期・弥生時代中期の貯蔵穴 と古墳文字：弥生時代末～近畿の水田開拓 遺構	27
○○	1988	2	AV~AW04~05	二	平島阿大遺跡第6次調査 ：古墳文字研究会・発掘	9.20~89.5.31	600	縄文時代後期の町並みと古道、古代米 芋畠遺迹、弥生時代初期～中期の水 田・古墳	35
○○	1988	3	AV~AW05~06	T	平島阿大遺跡第7次調査 ：古墳文字研究会・発掘	10.12~89.3.31	800	縄文時代後期・弥生時代初期～中期の水 田・古墳	35
○○	1990	1	AV~AZ08	大塗	平島阿大遺跡第8次調査 ：古墳文字研究会・発掘	4.3~4.5.2	90	古墳時代後期の古道	27
○○	1991	2	BD18~19	農場	津島大河原第5次調査(A・B点)	7.23~12.25	600	縄文時代の土塁、傳承母代～丘陵の環 状構造	32
○○	1991	3	BH13	農場	津島大河原第5次調査(B・C点) ：古墳文字研究会・発掘	7.23~12.2	140	古墳時代溝、古代～近代の環 状構造	32
○○	1992	1	AU~AW01	I	津島阿大遺跡第9次調査 ：古墳文字研究会・発掘	7.1~93.1.29	650	縄文時代後期の町並みと古道、弥生時 代～古墳の水田	47
○○	1992	2	BB~BC10~11	保	津島阿大遺跡第10次調査 ：古墳文字研究会・発掘	93.2.1~3.31 4.17~7.31	400	古墳時代後期～古墳時代後期、近畿耕 作区の変遷	61
○○	1993	2	AV~AW11~12	香	津島阿大遺跡第11次調査 ：古墳文字研究会・発掘	9.14~94.1.11	600	縄文時代後期	36
○○	1993	3	AV~AW13~14	園	津島阿大遺跡第12次調査 ：古墳文字研究会・発掘	94.2.9~3.31 4.1~11.30	1472	古墳時代前半開拓地、弥生時代馬込期 ～古墳時代後期、古代～近世の水田（吉野 郡）	64
○○	1994	1	AW~AX11~12	幸	津島阿大遺跡第13次調査 ：古墳文字研究会・発掘	10.6~11.30 95.7.10~10.4	816	縄文時代後期ビート、弥生時代衣冠、 古代～古墳時代、古代耕作区	41
○○	1994	2	BB~BC12~13	伊	津島阿大遺跡第14次調査 ：古墳文字研究会・発掘	10.25~96.2.14	856	縄文時代後期ビート、弥生時代衣冠、 古代～古墳時代、古代耕作区	46
○○	1995	3	AV00~01	中	津島阿大遺跡第15次調査 ：古墳文字研究会・発掘	96.1.16~4.25	1600	古文時代後期セメント、弥生時代衣冠、 古代～古墳時代、古代耕作区、溝	38
○○	1996	2	BD19~20	農場	津島阿大遺跡第16次調査 ：動物実験実習室	96.5.7~15	30.3	A 地点：古文時代と古墳時代の土塁、 古墳時代～古世の古道、古代の柱穴、弥 生時代の火葬	41
○○	1996	3	AW02~04	園	津島阿大遺跡第17次調査 ：古墳文字研究会・発掘	96.5.21~1.9	1454	古文時代後期の墓葬、弥生時代の水 田、古代の水田	44
○○	1998	2	BB11	少	津島阿大遺跡第18次調査 ：古墳文字研究会・発掘	98.4.7~4.10	26	古代の廣狀遺構	53
○○	1998	3	AZ09~10	堤	津島阿大遺跡第19次調査 ：古墳文字研究会・発掘	98.7.27~99.2.18	1019	古文時代後期～弥生時代初期と溝、古墳 時代～中世の溝、近世の治田渠	65
○○	1996	3	AY07	堤	津島阿大遺跡第20次調査：松倉(1点)	98.10.19~28	26	黒色土・L面に溝、中井溝	53
○○	1998	6	AX09	J.	津島阿大遺跡第21次調査 ：古墳文字研究会・発掘	98.11.6~26	32.2	縄文時代中期から、弥生時代早年～前 期溝、古代光景・溝	63
○○	1998	8	AW02~03	堤	津島阿大遺跡第22次調査 ：技術(日昇)	1999.3.1~7.12	722.3	古文時代後期～溝、古牛時代河岸、 水田跡地、古跡代溝、古代～近世溝 (桑原農業地)	53
○○	1999	3	AZ15~BA14	大塗	津島阿大遺跡第23次調査 ：社会実験	00.2.3~7.28	1359	古文時代後期～溝、弥生・古墳時代 溝、古代・古墳時代、古代・古墳時代	56
○○	2000	3	AZ14	大塗	津島阿大遺跡第24次調査 ：社会実験	00.12.5~14	34.3	古文時代後期～溝、移耕	61
○○	2000	4	BA15	大塗	津島阿大遺跡第25次調査 ：農業試験	01.1.29~31	20.0	中世～近世の溝、杭	61
○○	2000	5	BC~BD14~15	少	津島阿大遺跡第26次調査 ：農業	01.3.26~9.30	1550	古文・弦文時代の溝地、階級墓、土 塁、壁、近世の溝、堆	56
○○	2001	2	BS~BC14~15	大塗	津島阿大遺跡第27次調査 ：古墳文字研究会・発掘	02.2.1~6.24	1648	古文時代後期の溝、古代～古墳時代、 古墳時代の溝、古墳時代の水田(東洋園)	66
○○	2002	2	AW~AY06~08	大塗	津島阿大遺跡第28次調査 ：自然科學系総合研究会	4.30~9.26, 11.28~03.1.15	1796	弥生時代前期の水田、中世～古墳時代 の溝、溝	71
○○	2002	4	BF16	農	津島阿大遺跡第29次調査：古墳様	02.9.18~10.3	62.6	弥生～古墳時代の溝・壁	71

## (鹿田地区：鹿田遺跡)

地名 番号	年度	番号	墓内埋葬	所持	調査名 称	調査期間	山積 (m <sup>3</sup> )	概 内 容	文 献
○○	1983	9	AU~BU28~40	奈良	対州通築第1次調査：外堀跡発掘	7.27~11.22 84.1.9~8.31	2288	弥生時代後期半～中世集落	7
○○	1983	10	DG~E118~21	奈良	対州通築第2次調査：NMRCT 実	8.1~12.30	776	弥生時代後期～中世集落	7
○○	1986	1	CN~CU27~28, CT~CV19~27, CA~UD16~25, DD~DG22~23	奈良	対州通築第3次調査：松倉	6.2~11.29	2390	奈良の墓葬、古代の河道と植耕	10
○○	1987	3	DD~DF25, DG~DE7~28	奈良	対州通築第4次調査：松原	11.2~11.21	30	古代の河道	10
○○	1987	2	BD~BH35~42	奈良	対州通築第5次調査：吉澤様	10.6~68.3.2 88.3.3~3.31	1102	弥生時代中期後半～中世の廃落	21

組合番号	年度	番号	構内座標	所轄	調査名 称	調査期間	面積 (ha)	統計表	文献
⑥	1990	2	TW4-CG67-72	ア	佐世遺跡第6次調査	11.20~91.6.30	650	承土~古墳時代の墓葬、白鳥塚古墳	40
⑥	1991	1	-	ア	佐世遺跡第7次調査 佐世遺跡第7次調査 佐世遺跡第7次調査	98.2.27~8.6	829	A.古墳時代初期・中期の墓葬、表野の水田	50
⑥	1998	1	ZY36-57	西	-	-	-	田中・築	53
⑦	1998	4	B4-2830~32	西	佐世遺跡第8次調査：RT沿廻路	98.7.28~9.1	165	古墳時代高・中期	53
⑨	1996	2	CZ33-37	東	佐世遺跡第9次調査 ：病棟	98.11.27~ 99.5.11	288	弥生時代水田・溝、中世~近世墓葬	53
⑨	1999	1	CC-CJ30~37	東	佐世遺跡第10次調査 ：病棟	99.5.7~99.10.14	244.1	古代の秋刈（河邊内）、弥生時代ビット、近世墓	56
⑩	1999	3	CD-CE10~12	西	佐世遺跡第11次調査 ：明礬	99.6.19~10.22	2020	弥生時代水田廻路、古墳泊岸施設、中世~近世墓葬	56
⑪	1999	4	CD-CM19~22	西	-	-	-	弥生時代高・河邊、古墳時代・平安時代、近世墓葬、溝	61
⑫	2000	2	CO-CV35~44	西	佐世遺跡第12次調査 ：木馬	00.10.2~ 00.05.10	1897	弥生時代高・河邊、古墳時代・平安時代、近世墓葬、溝	56
⑫	2001	1	CH-CM38~41	西	-	-	-	弥生時代高・河邊、古墳時代・平安時代、近世墓葬、溝	61
⑬	2002	3	TE-BR46~51	西	佐世遺跡第13次調査 ：古墳	02.7.30~10.25	934	牟婁時代の墓、古墳時代の水路施設・溝、古墳時代初期	71
⑭	2003	1	CD-CM12~20	西	佐世遺跡第14次調査 ：稻作	03.7.31~12.17	1331	古墳~古墳時代の墓葬・溝、中世の井戸・土坑、近世墓葬	74
⑮	2003	2	H4-HS45~46	西	佐世遺跡第15次調査 ：古墳	03.10.16~10.29	30.4	土墳時代初期の墓群・溝、中世墓葬	74

## (三朝地区：福島遺跡)

組合番号	年月	南号	構内座標	所轄	調査名 称	調査期間	面積 (ha)	統計表	文献
①	1997	1~2	-	西	佐世遺跡：水堀全 ：土壤研究	97.5.6~20. 7.28~31	369	越後時代早・弥生時代中期・中世、 沈没遺跡	55
②	1997	3	-	西	佐世遺跡第2次調査：実験研究後新實 に付く工事メモ評定	97.11.23~12.5	120	近世・中世・古代の米庫	55

## 付费表-2-(2) 試掘・確認調査

(津島地区：津島岡大廻路)

序号	年月	名号	構内座標	所轄	調査名 称	標高(度)	進度(度)	調査表	文献
(3)	1983	1	E113	西	佐世遺跡第1次調査 ：地形	2.5	-	→津島岡大廻路第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	E917	西	佐世遺跡第2次調査 ：地形	3.5	-	-	1
5	1983	3	EK-EK34, 18E-EK35, DZ18,DZ16~18, ECK18	西	佐世遺跡設定期定地	2.0	-	29.7.6試掘・津島岡大廻路2次調査； 1983年度	1
6	1983	4	TEP22~28	西	津島岡大廻路予定地	2.0~3.0	0.6	2~4.7.6試掘・津島岡大廻路2次調査； 1983年度	1
(7)	1983	5	DC-DH15	東	大学実験施設予定地	2.0~3.0	0.9	2~4.7.6試掘・津島岡大廻路2次調査； 1983年度	1
(8)	1983	6	ED50	西	記念館セントラル新官邸予定地	2.0~3.0	0.8	→津島岡大廻路第3次調査：1990年度	1
9	1983	7	BD16	西	津島岡大廻路新官邸予定地	0.9	0.9	1.7.6~1.9.7.6試掘・津島岡大廻路2次調査； 1983年度	1
10	1983	8	AW105	西	津島岡大廻路予定地	3.0	1	上原・1.7.6~1.9.7.6試掘・津島岡大廻路2次調査； 1983年度	1
12	1985	1	EH708	東	津島岡大廻路予定地	3.5	1.2	貴様など未記載（1986年度工事予定）	1
13	1985	2	AU2C	東	研究室予定地	2.6~3.4	1.2	3ヶ月、貴様など未記載	1
14	1985	3	AV-AW99~01	学	男子学生新舍予定地	2.0~3.0	1	→津島岡大廻路3次調査：1986年度	1
(17)	1986	3	BR-BE09~10	学	区内勤務施設予定地	2.4,1.2~1.7	1.1	→津島岡大廻路3次調査：1986年度	6
(18)	1986	4	AV-AZ07	大	自然環境保護施設予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	→津島岡大廻路4次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP12(工業団地)	手	外丸山・石松丸山予定地	2.2~2.8	-	施設代、名古屋市、近畿の連携重視	8
(23)	1987	5	AV11	手	合宿施設熱練センター新官邸予定地	2.0~3.0	2	→津島岡大廻路5次調査：1990年度	8
24	1987	6	AY109	理	修身体育省若者レベーター建設予定地	3.0~3.5	約1.0	牛井・足尾の水害、古代・中世の水田 (未記載で開拓)	8
25	1987	7	EU09	教育	修身体育省若者レベーター建設予定地	2.5	0.7	講文化代遺跡、弓文、手笛・五世士器 (新井)にて著書	8
29	1988	17	AX01~06, AW04	二	校舎造造予定地	2.0~3.5	-	津島岡大廻路6、7.大廻路：1988年度	11
30	1988	19	TD18~19	理	施設物販賣販賣、老健了失施設	2.3	1.1~1.2	津島岡大廻路8次調査：1991年度	11
31	1988	20	DC29	事	同上	2.5	1.2	中段・貴様の施設化計画（1988年度工事 予定）	11
33	1989	2	AZ-TA05	教育	修身体育省若者レベーター	2.5	0.8	弥生時代振興、施設代早・中期の新苗 み、津島岡大廻路・小丘・谷谷（無記載で開拓、 開拓、西原、西原、弓文、手笛、五世士器）	14
34	1989	3	AZ17	大	名古屋市修身体育省若者予定地	4.0	1.6~2.0	中川・朝倉山の水害の特徴、溝 (1989年度工事予定)	16
35	1989	4	TD02	手	学生会館予定地	2.0~3.2	1	施設代早・中期の特徴（1989年度工事 予定）	14
(36)	1989	5	AV-AW13	研	長良川農業記念地	3.0	1.4~1.6	→津島岡大廻路12次調査：1993年度	14
40	1990	3	TC02	手	学生会館施設ゴンドラ椅子予定地	2.5	1.1	糸山代石棚跡跡跡、芋子石谷片	18
42	1990	6	AW-AX11	研	施設ゴンドラ椅子予定地	3.0	1.4~1.6	→津島岡大廻路13次調査：1994年度	18

## 付録

総号 番号	年度	番号	深内生標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	底面土厚 (m)	概 略	文 献
56	1993	3	IRR-TM22-23	食	長島加茂治沖縄先住民実習班	1.5	—	中・古並耕作。	30
65	1994	3	BU20	農	動物糞肥施設	2.0	0.9	GL-1.4mで黑色土、磚瓦土群1点出 土(赤土色)。	33
71	1995	4	BL26	事	国際交流会館新設予定地	4.1~2.4	1.6	明治～中土の上層腐植、以下は地状 態、遺物、遺物施設(明治城のみ) (1点等分)。	38
72	1995	5	AW02-03	地	埋蔵工事確認	2.4	1.2	洋鳥糞17大発見；1996年度 確認2.5mで黒色土、赤土～古墳時代 の灰2条、古代墳1条。	38
73	1995	6	BP07	学	ガラシングコンパクス移設	3.0	3	—	38
900	1998	9	AZ09	埋	コラボレーションセンター新設に伴う試掘 調査	2.7~3.4	1.3	→浮鳥糞19大発見；1998年度	53
(91)	1998	10	AW02-03	理	長崎(Ⅱ期) 調査に伴う調査	4.5	1.2	→浮鳥糞17大発見；1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システムアプローチ調査に伴う調査	2.8	1.0	GL-1.8mで黑色土、埴輪瓦の遺構 5点。	53
93	1998	14	AU02-03-06. AV03	事	道路駆除区壁に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	5点所、TP1-3-5-7-9-11-13-15 で黄褐色、TP2-4は灰色状、TP1で若石 青、TP3で赤色土、ピット、TP4で 中性土。	63
(105)	1999	6	AZ15, BA14	文法 経	社会教育施設に伴う調査	2.7, 3.5	0.8 1.1	→浮鳥糞13大発見；1999年度	56
106	1999	7	AV06	工	防衛省新幹線に伴う調査	1.2	0.2	現段上以下、赤土となる白粘土。	56
114	2000	5	AV00, AX00-02- 03, AZ06, AW08	理文 歴文 ア	「古代」～「現代」に伴う発達段階に伴う調 査。	2.6~3.2	1.7~0.9	6点所原層、鐵器～赤土時代の鐵石 頭、古代土を確認。	61
115	2000	7	D54	農	農業50周年記念新幹線に伴う調査	2	0.8	→浮鳥糞27大発見；2000年度	61
129	2002	5	BD35	工	東京駅旧土木構造物に伴う調査	2.1	—	赤土の各所検出。	71

(熊田地区：鹿田遺跡)

総号 番号	年度	番号	深内生標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	底面土厚 (m)	概 略	文 献
(4)	1984	1	HU00-31	病	西園医化社水槽予定地	1.4	0.5~0.7	小土器群、盆地骨器群(出土伴存)。	2
(5)	1984	2	CT-C125, CZ19-29-30-34	区域	西園駒取大学部後谷貢予定地	2.7	0.8~1.0	→鹿田第3次調査；1985年度	2
6	1985	4	AJ-33, AJ-40, AJ-41, AK05	陶	外ヶ瀬遺跡環境整備工事に伴う花崗岩	2.2~3.0	0.9~1.4	赤朱鷺羽、赤朱鷺羽。	5
(17)	1990	5	BY-3768	ア	アイソトープ地合センター予定地	2.3	1.2~1.3	→鹿田糞6次調査；1990年度	18
(26)	1997	8	BT37	天	五重空穴地	2.2	0.9	→鹿田糞6次調査；1997年度	50
29	1998	11	CK-025-26, CK05-36, CK15	粘土	新潟新幹線に伴う調査	2.0~2.4	1.0	→鹿田糞9次調査；1998年度	53

(鶴敷地区)

総号 番号	年度	番号	深内生標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	底面土厚 (m)	概 略	文 献
1	1990	4	—	地質	青森市鶴敷研究会通路跡調査	2.5	0.7	中世後半以前の上層部。	18
2	1998	12	—	年輪	バイオ炭酸塩鉱物調査に伴う調査	1.5	0.4	古世千代内、遺構未確認。	53

(三隅地区：福呂遺跡)

総号 番号	年度	番号	深内生標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	底面土厚 (m)	概 略	文 献
3	1997	5-6	—	—	青森県研究会通路跡調査に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	2方向、福呂第2次調査；1997年度	50

付表 2-(3) 立会調査

(津島地区：津島岡大遺跡)

総号 番号	年度	番号	深内生標	所属	調査名 称	掘削深度 (m)	底面土厚 (m)	概 略	文 献
12	1984	20	HU5-17	事	青森市合浦町埋立地開拓地に伴う試掘調査	1.0~2.2	1.0	津、三段、植生1層、須恵器。	2
19	1986	12	ED86-09	改修	標準新幹線	2.3	1.3	中、近世の土壤、上層	6
20	1986	21	EK08	学	ハンマボルゴー工事	0.2~2.0	0.8	植生土層。	6
21	1986	26	EF07-08	改修	松合新幹線に伴う葉葉灰岩。	1.9	0.9	中世名残。	6
32	1988	17	FG10-11	教委	アーチストリート埋立地引込段	2.2	1.5	GL-2mで墨色土、西に向かう流 りを認定。	11
37	1989	8	AZ08	人自	自然科学研究会科学普及会「下野川遺跡	1.4	—	神牛町代表的水田、薄	14
38	1989	10	AU05	学	松合新幹線に伴う地盤処理	1.9	1.0	褐色、柱認定。	14
42	1990	10	AV04-10	事	宮古市直木町山東境地開拓地に伴う植樹工事 1:危険地帯。	0.4~3.0	0.6~1.4	5:所、黒色土、東京市北藻。	18
43	1990	20	PC02-01, HD03-01	事	防災化水施設	2.3	1.2	GL-2.3mで墨色土。	18
46	1991	9	PC18	農	防災化水施設	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石出上。	21
47	1991	17	DR16	事	津嘉山地区埋立地(葛城)	1.7~1.8	0.5	2ヶ月、昭治1-3段灰色地土層。	21
48	1991	19	ED15	事	津嘉山地区埋立地(葛城)1:アース版	1.7	1.0	GL-1.5mで墨色土。	21
49	1991	40	EC-BG-BF12	事	南北道路切口設置	1.5	—	3+所、GL-1.4mで古代層。	21
32	1992	15	BD18	農	沿岸土末実験段ハンドホール設置	1.5	0.75~1.1	調査後剥離まで耕作、第2本耕作。	25
53	1992	24	AV12	事	南米内西日本地盤整備	3	1.7	通航1以下は耕1層。	25

総合 計号	年度	番号	施内 建築	所調	調査 名 称	掘削深 度 (m)	表取土厚 (m)	地 面	文献
57	1993	17	ED~EDC10~12	渠	仮構造センタ~新宮に伴う外構工事ほか: 素材配線	1.8	0.6~0.7	仮構造センタ~木脚と同じ形態。基礎古文書 GL-1.15~1.7m、その底下に墓跡。	30
58	1993	19	ED11	渠	御陵構造センター~新宮に伴う沿線改修; 材料配線	1.1	0.8	赤土土器片、T法底質	30
59	1993	23	DA07	渠	ほ込山地区構造整備: 北門利根設置排水溝開削施設整備	3.2	-	明治~大正屋根・床・壁・土器、古代漆?、古文時代土器片	30
60	1993	26	GD~TDG13	渠	津幡山地区構造整備: 楠北送路沿水路キックスカルバーパー設置	1.5	1.0	近鉄~小部屋まで掘削	30
61	1993	33	SR~TG12~13	渠	丹波地區構造整備: 水取川設置	1.8	0.5~1.2	10ヶ月、近鉄~中世標準まで掘削、一部で瓦器と土器が確認	30
62	1993	34	ED~BE12~13	河	牛高池地区堤防整備: 伏せ枝設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で河原色土質	30
63	1993	39~42	FD05~07、 FC05~41	渠	御陵構造パックストリート法ネット改修	2.0~3.2	1.0	GL-1.2~2.0mで黑色土色、以下は青色土~灰黑色土	30
66	1994	9	ED~SL~DF01~07	水	上野被爆熱電新規設置	2	0.96	オーバー版層 (深さ60cm、幅310m)、GL-1.92~2.0mで黑色土	33
67	1994	13	AV10, AW10, AU11	渠	聯合構造透析センター新宮配水工事	2.2	1.5	近畿~2層、中段(奥か?)1m、GL-1.7mで黑色土、瓦器	33
68	1994	20	ED20	渠	御陵地	2.2	1.5	GL-1.9mで黑色土	30
76	1995	4	EC18	渠	動物光触媒新宮に伴う土成土取り	2.2	1.9	浜田~1.5mまで強風	44
77	1995	3	TD16~19	渠	動物光触媒新宮に伴うハンドホール設置工事	1.3	-	4ヶ月、遠浅下に下に5層確認	44
78	1996	12	AV02, AV03, AV04, AW05, AW02, AW04	水	サクライトベンチャービジネスガバウトリー~新宮: 外灯古面T.ト	1.0~1.5	0.76~1.1	6ヶ月、羽切川2箇、表津川2箇、中世層7.4%、瓦器層? 1箇	44
79	1996	13	AV03~AW03	水	ナテライバンパインサイジニスラボットリーフ新宮: 配管貯水槽	2	0.95	古の時代馬頭で掘削、古墳時代初期の通路、通路	44
80	1996	18	AW03	渠	谷倉新宮下流域改修工事	2	-	黒色土で強風	44
81	1996	25	AV13	渠	鈴鹿農業新宮~深水川、清工事	1.3	1.0	遠東~以北に着色粘土層、黃褐色土質上、施設地盤土質	44
82	1997	16	EB13~BH13	水	庄北地区ガス管設置工事	1.5	-	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~SA13	水	庄北地区ガス管設置工事	1.5	-	中世層	50
84	1997	21	PC12	渠	福岡市在施設新宮に伴う共同清潔工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黑色土、古代~近沢の遺物	50
94	1998	15	DA09	水	室内外井戸設置工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黑色土	53
95	1998	22	AZ09, BA09	水	コラボレーションセンター実施配管工事	1.4	1.0	GL-1.4mで黑色土	53
96	1998	24	RB12, BC12	水	水道橋引付開発工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	渠	松谷新宮に伴う土管管路敷工事	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで掘削、1ヶ所	53
98	1998	34	DC10	水	李生川改修工事に伴うトラップ廃棄工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで強風、瓦器層・土器層	53
99	1998	35	BA00	水	YIT蓄積施設工事	1.5	0.9	遠東~上部に施設系瓦質土	53
100	1998	41	AX03~AY02	渠	美濃桃木曾開削工事	1.4	0.6~1.4	10ヶ月、5地点で中世層、2箇所で古代層、1箇所で古墳時代まで掘削	53
101	1998	42	AU02	渠	当塙移設に伴う附木移植	2.2	1.1~1.3	GL-2.2mで古墳後半段落、GL-2.2mで発掘手帳	53
102	1998	44	AV03, AW03	渠	授産新宮に伴う生活排水設置工事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、瓦器・土器層	53
103	1998	48	AW03	渠	松谷新宮に伴うガス管設置工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00, AZ01~03	渠	渠内外井戸設置工事	1.35~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黑色土 (GL-0.85~1 m) まで掘削	56
108	1999	12	AZ08~09	渠	コラボレーションセンター~新宮工事に伴うハンドホール	1.48~2.1	1.03~1.16	2ヶ月、1ヶ所で古墳代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	渠	松谷(玉前)新宮に伴う土管管路敷工事	3.5	1.2	古墳時代層まで掘削、瓦器土下部まで鋼瓦、古代土器・古代瓦・陶文焼切張瓦	56
110	1999	42	AZ09	渠	コラボレーションセンター新宮に伴う排水	1.0~1.2	0.8~1.0	遠東~下に灰色粘土層、瓦器土粘土層まで掘削、6ヶ月、1ヶ所で黑色土色土層まで掘削	56
115	2000	17	DA12	水	津島地区電柱工事	1.6	1.0	遠東~上部に着色粘土層、瓦器土粘土層	61
117	2000	23	AY09	渠	校舎改修工事: 境宇課本筋草壁補強工事	1.3	0.9	中世ハンドホールはGL-1.32mで瓦器土層、沟から東西方向に回転して進行	61
118	2000	28	AX01, AY10	渠	校舎改修換設壁工事: 丸久	0.85~1.60	0.8~1.1	中世ハンドホールはGL-1.82mで瓦器土粘土層 (古?)を	61
119	2000	42	AW08, AX08	土	湯瀬店舗化(宇都御郡太山ガス改修)工事	1.6~2.05	1.45	GL-1.82mで瓦器土粘土層 (古?)	61
120	2000	44	BA16	大穴	組合施工換設瓦設置工事	1.3~1.7	1.0	GL-1.4mで中世層?、瓦器土の基層	62
122	2001	4	AZ10	渠	松谷改修瓦設置工事	1.6	1.0~1.2	ハンドホール部分で中世層	66
123	2001	11	BB~BC16	渠	本木津川改修工事	1.5~2.1	1.2~1.4	2ヶ月、GL-1.4mで瓦器土粘土層	66
124	2001	27	BB~BC13	渠	本木津川改修工事	0.5~1.6	1.0	2ヶ月、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BD14	渠	本木津川改修工事	1.6	0.65~0.8	GL-1.4mに瓦器土粘土層 (古?)を	66

社号 番号	年度	番号	施 内 施 工 様	所 属	調 条 名 称	掘 刃 深 度 (m)	高さ上層 (m)	備 考	文 史
126 2001 31 BB14	事	不透水性地盤工事に伴う土質改良施設工事				1.95	0.45~0.75	12ヶ月前回、中世層まで掘削	66
130 2002 29 DE15	事	改修及び移動式気孔工事				1.8	1.5	3ヶ月、古代・中世層まで掘削	71
131 2002 34 BC13~15	事	不透水性地盤工事：雨水排水・貯留				1.2~2.5	0.7~1.2	文書文化・器・古墳がまとめて出土、出土層・古墳層	71
132 2002 31 BB13	事	不透水性地盤工事：雨水排水・貯留				1.57	0.8	中世層・古代・古墳層を確認	71
133 2002 34 BB13・SU14	事	不透水性地盤工事：雨水排水・貯留				0.95~1.9	0.8	2ヶ月で中世層と古代層まで掘削、GL 1.3mで墨田土	71
134 2002 55 PC07~09	改 営	一般教育施設の改修工事				1.0~1.26	0.95	4ヶ月、中世層まで掘削	71
135 2002 57 BB~BC14~15	事	改修工事に伴う雨水排水工事				1.9~2.3	0.85~1.0	一層黒色土と向てて掘削	71
136 2003 1 DD13~15	五 ト	改修工事に伴う雨水排水工事				GL~1.3m	0.7~0.8	李世宗まで掘削	71
137 2003 4 AX06	工	綜合研究棟改修工事(改修工事)				GL~1.4m	0.9	古代層まで掘削	74
138 2003 6 BC15	学	附属施設改修工事(改修工事)				GL~2.43m	0.85	李世宗まで掘削	74
139 2003 7 BNHC18	施	附属施設改修工事(改修工事)				GL~1.7m	0.7	GL~1.2mで黒色土、GL 2.1mで黒色土と墨田土で繋ぎ放題	74
140 2003 8 AX06~BA06	工	綜合研究棟改修工事(雨水排水)				GL~1.7m	0.7~0.8	唐山3.3~3.6mで黒色土、李世宗・古代の床面多部、近世・五代の床面多部、黒色土と墨田土	74
141 2003 14 AW~AX06~07	工	綜合研究棟改修工事(改修工事(外訂))				GL~1.4m	—	五代まで掘削	71
142 2003 15 AW~AX06~07	工	綜合研究棟改修工事(改修工事(清水))				GL~2.5m	1.6	西で純文化層頃まで廻削した層所あり、弘武基層	74
143 2003 17 BC~BD15	事	山形県立美術館改修工事(改修工事、雨水排水・雨水排水)				GL~2.75m	1.1	秋で、清水地盤帯露頭	71
144 2003 21~21 BG~BH13	事	公共下水道施設工事 No.1~X第1期地盤合意整理				GL~1.8m	0.9	西で清水地盤帯まで掘削	71
145 2003 21~21 DB~DG10	事	公共下水道施設工事 No.2区段				GL~2.25m	0.8~0.9	秋で清水基層、資料で乳生土・東周まで掘削、清水地盤帯露頭	74
146 2003 21~21 AZ16	事	公共下水道施設工事 No.2区段				GL~2.45m	1.5	清水基層まで掘削、西で純文化層	74
147 2004 21~21 BA10	事	公共下水道施設工事 No.5区段				GL~1.9m	0.7	中井町の深川を掘削	74
148 2003 21~6 BG22	事	公共下水道施設工事 No.6区段				GL~1.5~1.9m	0.9~1.4	清水基層まで掘削、清水・古戸物語地盤	74
149 2003 21~7 BI16	事	公共下水道施設工事 No.7区段				GL~1.15~1.3m	0.8	中层層まで掘削	74
150 2003 21~8 BN13	事	公共下水道施設工事 No.8区段				GL~2.0~2.6m	1.1	清水基層まで掘削	74

## (熊田地区: 熊田遺跡)

社号 番号	年 度	番 号	施 内 施 工 様	所 属	調 条 名 称	掘 刃 深 度 (m)	高さ上層 (m)	備 考	文 史
3 1983 23 AO~AW22	医	外来診療棟改修工事				1.3	—	作生時代後二期・南朝形土製品、貝	1
7 1985 6 AW~BH 23~24 BE24	医	外来診療棟改修工事(雨水排水改修)				1.3~1.7	0.7~1.3	中世・作生の遺構・遺物	5
8 1985 12 AG2~AG4, AF23	医	施設改修地盤強化工事: 露天配管ハンダ溶接				1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ月、中世盆地層・ピット	5
9 1986 9 BI~BN14	医	施設改修地盤工事(雨水排水改修工事)				0.8~1.3	0.8	中世盆地層・二重井	6
11 1986 24 CR~CR12, CR~CX15, CX~DA14	医	施設及び臨時工事				2	0.8~1.0	中世盆地層	6
14 1987 8 SG37	医	管理機関に伴う施設改修				2.5	—	作生時代盆地層・地盤強化	8
15 1989 46 CI~CR45, CI~CR48, CR~37~44,	医	改修地盤強化地盤整備: 外灯基礎				1.2~1.5	0.7~1.0	2ヶ月、中世層を確認	14
16 1992 29 DWY	ア	アイソトープセシーラー形測量・雨水排水				1.4~1.5	0.9	中世漢ノ井	25
19 1992 41 CH13	医	改修地盤強化: 下駄箱修理				1.2	1.0	古代土 1.0m	25
20 1994 5 DH60~62	国	医療改修工事				1.5	0.8	古墳層以下はすべて墨田土の可塑性あり、埋3条・ピット9条	33
21 1995 11 DG~DN16	医	医療改修施設整備: 医院病院連絡通路新設				1.5	1.0	造成土 1.0m 以下含め土質改良・施肥なし	35
22 1995 14 CT07~08	医	横山地区薬剤貯蔵: 洗滌タンク設置工事				2.3	1.0	小井2回発見、埋3条・ピット9条	38
23 1995 17 CT08~CC11	医	横山地区薬剤貯蔵: 薬剤貯蔵タンク U 室内改修工事				1.23	0.8	造成土 1.0m 以下含め土質改良・施肥なし	38
24 1995 23 DF56~67	医	防護ネット取付工事				3	0.8	壁片・石器出土、調査区西寄りは、GL~2.5m 以下は河原石。	38
30 1998 36 DV73, CN73	国	会議室に伴う施設改修工事				1.2	1.0	小井層まで掘削	53
33 1999 19 DV63~71	国	施設改修に伴う雨水排水改修工事				1.2~1.4	0.9	小井層まで掘削	56

記号 番号	年度	番号	構内車線	所員	調査名稱	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
34	1999	16	BL05	同	研究技術者に伴う浄水槽	2.2	1.1	角柱8.2m、底面深さ中空層・ピット	56
35	1999	27	BY42・43, B43・44	同前	基幹整備(電気設備)：給水配管	1.25~1.45	0.45~0.5	2~3m、中空層まで掘削、時間不規則	56
36	1999	41	CF21~28, C9~CL28, CD~CP28~33	同前	施設設備に伴う共同溝等	1.7	—	面積10m <sup>2</sup> 、底面11次高さ3mで側面分離で中空ピット造成	56
37	1999	46	C446~DE49	底前	施設設備に伴う汚水沟・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基、下坑1基、中空溝等	56
38	1999	47	CM~CN~CP~CR~ CT~CR~CV~DA~ DC~DU~DF~S9	同前	グランド芝庭ネットボール	2.0~2.3	—	11~26m、面積8~40mは深淵、7~10mが付近は高臺地、南北は河岸	56
39	1999	48	DT31	同前	病院新築に伴う汚水排水所	2	1	高底土以下7m地盤、古墳時代まで埋蔵前か	56
41	2000	25	CD42~CN45	同前	病院新築その他の工事：管路・雨水溝	1.6~2.8	—	清ら見われる遺構など難観	61
42	2000	26	CO31~42, CS45, DV~G	同	電柱及び外灯の配管工事	1.6	—	7~10m、底面色土層・泥和色も土層・底面色砂質土層を経る、鐵漬地部か。	61
43	2000	29	DE27	同	御子都部ガス配管引込し旧バルブ取扱工事	0.8~1.15	0.7	GL~0.8mで葉底敷設上、幅12mの埋蔵底面、古代の浜勝・河底地盤	61
44	2000	47	DG~DJ28~67	西側	豊田山道東側原木野地区桜塚改修	2.1~2.3	1.3~1.5	中段まで深削、中段下岩が多段出土した點もあり。	61
45	2001	37	TR~CA43~CA 43~55, CA44~ CL45, BR~CA45	同	総合教育研究施設文化財伝承施設に伴う 施設設備工事	1.65	0.7~0.9	中段まで深削、中段下岩が多段出土した點もあり。	61
47	2002	10	CH11~CN22	同	黒田道場ガス配管改修工事	1.0~1.3	0.87	中段まで深削	71
48	2002	19	BT~Bf11	西側	飛田団園ガス配管改修工事	0.5~1.8	—	2~5m、GL~1.22mまで深削した地点で中段または六代塔確認	71
49	2002	22	CX41~42	医研	エヌルーカーセンターモノ洗浄その他の工事 ・共用洗浄水槽	1.3	—	1ヶ所、底面深さまで掘削	71
50	2002	25	CG41, CO34, CF43, CO38	同前	エヌルーカーセンターモノ洗浄その他の工事 ・外灯	1.47~2.66	—	4ヶ所、中段深さまで掘削	71
51	2002	27	CY36~43	同前	エヌルーカーセンターモノ洗浄その他の工事 ・外灯	0.9~1.9	0.9	中段の井口・柱穴、溝	71
52	2002	35	BL~BS45~52	上段	総合教育研究施設文化財改修工事	1.85~2.0	0.8~1.0	5ヶ所、中段まで掘削	71
53	2002	52	DO67	同	本引排水施設その他の工事：機械構造	1.25	—	中段	71
54	2002	56	BL18	医研	総合教育研究施設グリーストラップ改修	1.68	—	既往で発生・古墳層、土器小糸	71
55	2003	5	BS~BS45, CA~CO46, CO45	同	総合教育研究施設文化財改修工事(屋外新設) ・水	1.7	0.7~1.0	発生中段も古墳まで掘削した箇所あり ・みかね代溝、中段改修、洗浄装置	74
56	2003	9	BL~BS45~52	同	総合教育研究施設改修工事(雨水・污水・廃物排水)	0.8~1.75	0.7~0.9	発生中段も古墳まで掘削した箇所あり ・みかね代溝、中段改修	74
57	2003	10	BR~BS50~54	同	総合教育研究施設水配管改修工事	1.33	0.8	一部で中段改修	74
58	2003	13	BS53, BL54	同	総合教育研究施設改修工事(例行)	1.4	0.6	中段まで掘削	74

## (東山地区)

記号 番号	年度	番号	構内車線	所員	調査名稱	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
1	1983	13	—	教科	御園中学校新設	4.0~5.6	—	シント層中	1
2	1997	29	—	教科	御園小・中学校公園樹化作工事	1.2	0.79	GL~1.1mで古墳水仙層、薄1条	50

## (三郷地区：福呂遺跡)

記号 番号	年度	番号	構内車線	所員	調査名稱	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概要	文獻
4	1997	18	—	同	実験技術新設に伴う電気基盤改修工事	1.0	—	GL~1.0mで中空壁骨張は東に向かう 二段	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収藏遺物概要（2003年度現在）

所属	種類	調査名・地区名	発掘（1年・約20リットル）						備考	文献	
			总数	土器	石器	木器	骨・貝	その他			
医療	発掘	鹿児島1次発掘（外公道施設）	598	493	13.5	60	0.5	1	28	古墳中期～近世、灰陶、木製塗甲、人頭 新石器器、ガラス片等	7
*	*	鹿児島2次発掘（NMJ-C1.施設）	118.9	94	0.4	20	0.3	4	4	古墳後期～中世、土器、水器等	*
医療	発掘	鹿児島3次発掘（佐賀）	131.6	36	0.3	90	0.3	5	5	古代～中世、石器	10
医療	発掘	鹿児島4次発掘（配管）	3.5	2	0.3	0.2	0.2	1	1	古代、西周製品	*
医療	発掘	鹿児島5次発掘（保健施設）	130	87	2.5	20	1.5	19	19	古墳後期～中・近世	24
アメ	*	鹿児島6次発掘	62	39	0.5	1	1.5			中世、青銅製鏡	30
医療	*	鹿児島7次発掘（鹿児島区役所）	81	60		20		1	4	弥生～近世、灰陶、素面小瓶等	53
医療	*	鹿児島8次発掘（T1.近藤家跡）	8	8						弥生～小良、石器	53
医療	発掘	鹿児島9次発掘（新宿1号）	120.1	95	0.1	28	0.1	9	2	弥生～近世、水器等	56
医療	発掘	鹿児島10次発掘（矢内川）	2	2						古代～近世	56
医療	発掘	鹿児島11次発掘（佐野7期）	21	66		4		2	2	弥生～近世、木隨工店	56
医療	発掘	鹿児島12次発掘	147	77	1	36		16		弥生～近世、板	61
医療	*	鹿児島13次発掘（総合改修研究室）	234	211	5	10		28	弥生～近世	71	
医療	*	鹿児島14次発掘（佐野8期）	66	54	3	54		9	9	中世～近世	71
医療	発掘	鹿児島15次発掘	4	4						古墳初期～中世	74
大河	*	鹿児島16次発掘	1	1						弥生～近世	74
企画	*	鹿児島17次発掘（佐野1号）	5	0.5	0.5	4				古墳中期～古代	3
企画	*	鹿児島18次発掘（吉原1号）	17.5	12	1.5			4		弥生早期～弥生前段	4
学生	*	鹿児島19次発掘（弓子字牛牛生）	67	49	1.5	2	4.5	10		縄文後期～古墳初期、古代～近世 石 器済滿、絞頭土器等	29
シテ	*	津島例人第4次発掘（鹿児島高動地）	1	1						弥生早期～近世 （佐野1号～吉原1号）	6
大河	*	津島例人第5次発掘（矢内川）	82	68	3	1	8	2		縄文後期～古墳初期 （矢内川1号～矢内川2号）	27
工	*	津島例人第6次発掘（佐野2号）	49	33	1	9	6			縄文後期～古墳、人形水器、アンペ ラ、人形2号	35
企画	*	津島例人第7次発掘（吉原1号）	31.5	10	0.5	1		20		歴史後期～近世	35
企画	*	津島例人第8次発掘（吉原1号）	11.5	10	0.5			1		歴史後期～近世	32
企画	*	津島例人第9次発掘（吉原1号）	60.5	30	2.5	3		15		歴史後期～近世	47
企画	*	津島例人第10次発掘（吉原1号）	87	78		7		2		弥生前段～近世	65
企画	*	津島例人第11次発掘（吉原2号～3号）	5.5	3	0.5			2		古墳後期～近世	36
企画	*	津島例人第12次発掘（吉原2号）	56	24	1	20		10		歴史後期～五世	65
企画	*	津島例人第13次発掘（吉原2号）	12.5	12	0.5					縄文後期～古墳前期、中世	41
シテ	*	津島例人第14次発掘（吉原2号）	13	12				1		弥生～古墳	46
企画	*	津島例人第15次発掘（吉原2号～3号）	66	14	10	20		24		縄文後期～中世、礎石後期、弥生早期 、フツラ、良玉器	72
企画	*	津島例人第16次発掘（吉原2号～3号）	0.3	0.3						縄文後期～弥生～古墳	44
企画	*	津島例人第17次発掘（吉原2号～3号）	85	62	21			12		歴史後期～近世	77
企画	*	津島例人第18次発掘（吉原2号～3号）	1	1						歴史後期～近世	53
企画	*	津島例人第19次発掘（吉原2号～3号）	31	21	1	4	2	3		歴史後期～近世	64
企画	*	津島例人第20次発掘（吉原2号～3号）	1	1						歴史後期～近世	53
工	*	津島例人第21次発掘（吉原2号～3号）	7	5	2					歴史後期～近世	61
企画	*	津島例人第22次発掘（吉原2号～3号）	37	26	4	3	1	3		歴史後期～近世、古代陶器等、石器等	77
文部省	*	津島例人第23次発掘（吉原2号～3号）	127	29	1	90	2	5		縄文後期～近世、石器、灰	56
文部省	*	津島例人第24次発掘（吉原2号～3号）	2.1	1	0.1	1				歴史後期～近世	61
農	*	津島例人第25次発掘（吉原2号～3号）	0.3	0.1						中・近世	61
農	*	津島例人第26次発掘（吉原2号～3号）	33	27		6	1	10		縄文後期～近世	76
農	*	津島例人第27次発掘（吉原2号～3号）	16	14	1					歴史中期～近世	68
工	*	津島例人第28次発掘（吉原2号～3号）	17	16	2					歴史後期～近世	71

所蔵	書類名	御正名・地名	冊数(1冊:約300 ペットル)						備考	文献	
			部数	上巻	下巻	未添巻	種子巻	その他	ナンバリング		
農	実験	近畿同大遺跡第25次調査 (農学部古生物学)	2.1	2	0.1					純文化財~近世	71
国	・	昭和55年 水曜会(実験研究課)	9	8				1		純文化財~近世中期・中古	55
	・	西日本遺跡第2次調査 (文部省新規スロープ)	2.1	2				0.1		中古~近世	55
医病	施設	施設(廃草薙)	1	1						衛生~近世	3
学生	・	諸文化(男子学生寮)	1	0.7	0.3					純文化財~近世中期	4
大正	・	諸文化(自然科学研究科)	1	1						純文化財~近世中期	6
李	・	諸文化(外國人宿舎)	1	1						純文化~中世	8
理	・	諸文化(生物学用スパンバーラー)	0.3	0.3						中・近世	4
教育	・	諸文化( )	0.7	0.7						純文化~中世	4
下	・	諸文化(校舎)	1	1						衛生~近世	11
農業	・	諸文化(台地・進化した実験施設)	0.7	0.7						純文化~近世、中・近世	4
京	・	諸文化(植物交配研究所)	0.3	0.3						中世	4
大正	・	諸文化(土壤植物學)	0.2	0.2						中・近世	14
学生	・	諸文化(学生会館附)	0.4	0.2			0.2			中世	4
教育	・	諸文化(自習者用スパンバーラー)	0.3	0.3						純文化	4
道	・	諸文化(圖書室)	0.8	0.8						古墳~中世	4
学生	・	諸文化(学生会館ゴンドラ)	0.4	0.4						純文化~中世	18
教育	・	諸文化(音楽室施設研究所)	0.1	0.1						近世	4
ア	・	図書(アインストーク合衆センター)	1	1						中古~近世	4
事	・	津島北(植物生産科)	0.5	0.5						衛生~中世	4
農	・	津島北(植物実驗貯蔵)	0.1	0.1						純文化~近世	33
建	・	津島北(環境理工系直轄)	0.1	0.1							53
二	・	津島北(システム工学科)	0.1	0.1							53
企	・	80年度	2	2						分編四十種	1
育	・	86年度	1	1							2
・	・	87年度	1	1							3
・	・	88年度	0.5	0.5							6
全	企	・	89年度	0.5	0.5						8
		・	89年度	0.5	0.5						14
企	企	・	89年度	0.3	0.3						21~22
		・	90年度	0.8	0.8						30~33
企	企	・	91年度	2	3						38~41
		・	92年度	6.5	2.5	6					50~53
		・	93年度	2	2						56
		・	94年度	1	1						企観型
総 緒 数			2273.9	941.3	77.1	455.2	25	17.1	242.2		

\* 本表「漢字・サンプルの構成は、資料監修者が海につれて転載部が変化するため、特に複数の支版があるため。

文献は付表4・5の番号に對応する。

付表4 球藏文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内道路調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内道路調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小構法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内道路発掘調査報告 第1集		1985年5月
4	岡山大学津島地区構内道路発掘調査報告II(農学部構内BH13区他)	岡山大学構内道路発掘調査報告 第2集	1986年3月
5	岡山大学構内道路調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内道路調査研究年報4	1986年度	1987年10月

付表5 球藏文化財調査研究センター刊行物 (2004年3月まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡 I	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3号	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号		1988年10月
10	鹿田遺跡 II	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4号	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号		1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号		1990年2月

番号	名 称	発行年月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡1 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月

番号	名 称	発行年月日
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月

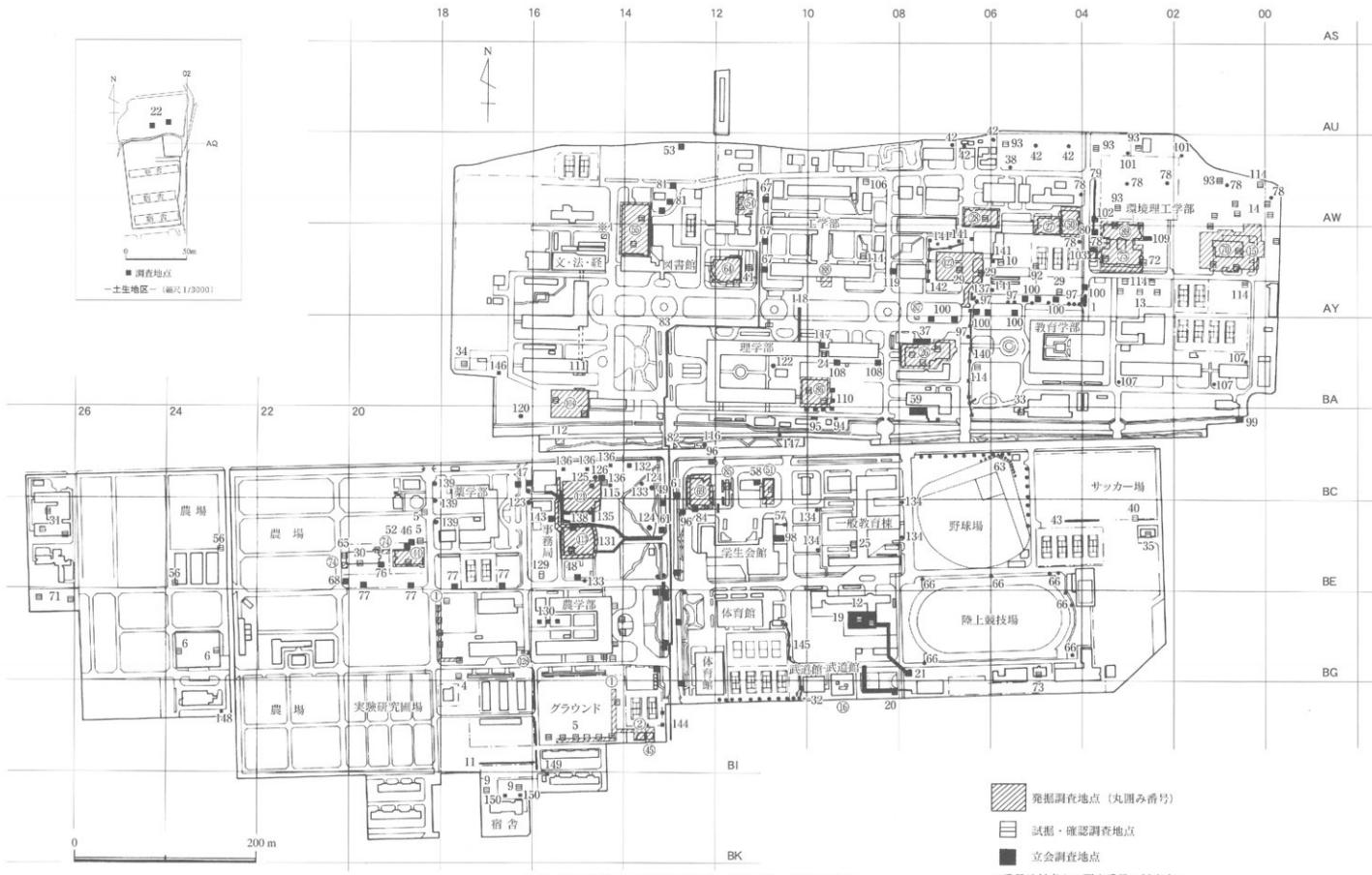
発掘調査報告書は太字

## 付 図

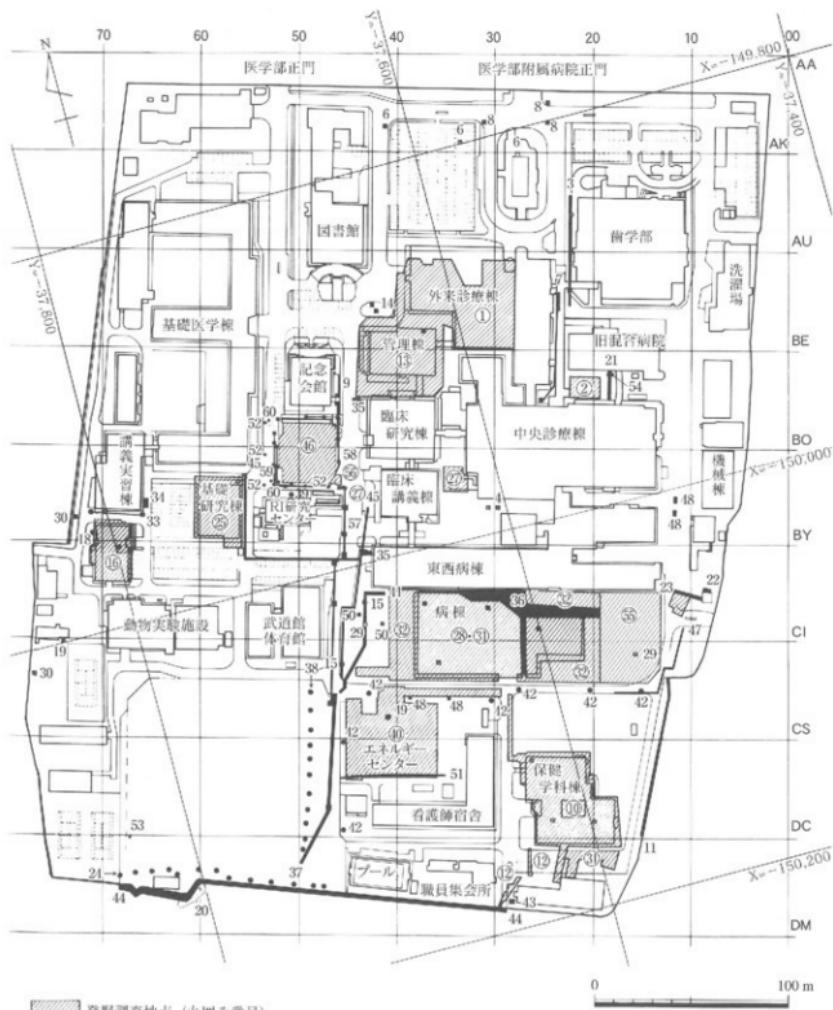


付図1 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)





※番号は付表1の調査番号に対応する。



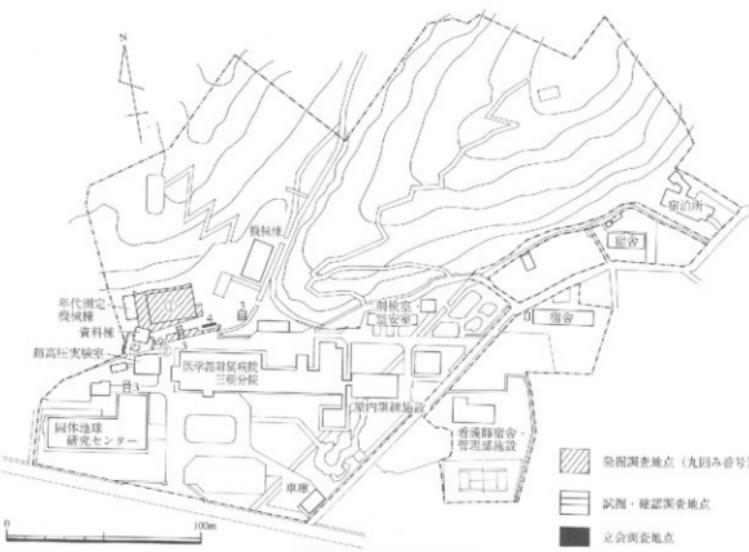
■ 発掘調査地点（丸囲み番号）

● 試験・確認調査地点

■ ● 立会調査地点

\* 番号は付表2の調査番号に対応する。

付図3 2003年度までの調査地点【2】—鹿田地区—(縮尺1/2500)

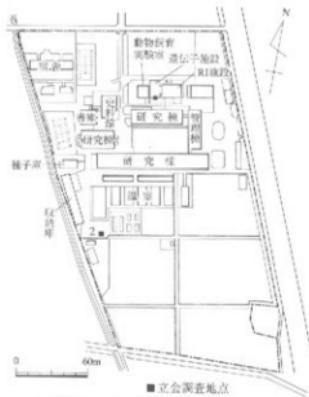


付図4 2003年度までの調査地点【3】一三朝地区ー（縮尺1/2500）



番号は付表2の総合番号に対応

付図5 2003年度までの調査地点【4】一東山地区ー（縮尺1/4000）



番号は付表2の総合番号に対応

付図6 2003年度までの調査地点【5】一倉敷地区ー（縮尺1/4000）

Copyright © Archaeological Research Center, Okayama University  
Printed in Okayama, Japan

---

2006年3月15日 印刷  
2006年3月15日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要  
2004

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市中区中町1番1号  
(086) 251 7200  
印刷 西日本法規出版株式会社

---



BULLETIN of  
Archaeological Research Center  
Okayama University  
2004

Archaeological Research Center, Okayama University  
3-1-1 Tsushima-Naka Okayama-city, 700-8530 Japan  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>